Guilty Gear Xtension―ギルティギア エクステンション―

秋月紘

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ＧＥＡＲと呼ばれる生体兵器、そして、『あの男』と呼ばれる人物によって作られた、その自立稼働型第一号であるジャスティスの暴走に端を発する１００年に渡る人類とＧＥＡＲの戦争『聖戦』は、多くの物を人類から奪っていった。帰る場所、平和、そして数えきれないほどの命。

そして、幸か不幸か自身を殺したものと同様のＧＥＡＲとなった少女は、終わるあてのない旅へとその身を投じる。旅路の先で彼女が見るのは予兆か、審判か。

※Ｘｔｅｎｓｉｏｎ＝Ｅｘｔｅｎｓｉｏｎからの捩り。拡張、延長の意。

コンシューマー本編の外伝的なものの予定、開始地点はＸＸ～ＡＣ＋Ｒ周辺の時期の話になります。

その為時系列が進んだ後も原作ストーリー展開には影響しませんのでご了承下さい。

３／２３　活動報告にてあとがきを投稿しました。

目次

Episode 01 ―Golden Eyes―
Chapter 1 〝Encounter〟 Part A 1
Chapter 1 〝Encounter〟 Part B 13
Chapter 2 〝Fugitive〟 Part A 26
Chapter 2 〝Fugitive〟 Part B 38
Chapter 3 〝Cloaks〟 Part A 51
Chapter 3 〝Cloaks〟 Part B 63
Chapter 4 〝Reminiscence〟 Part A 75
Chapter 4 〝Reminiscence〟 Part B 87
Chapter 5 〝Termination〟 Part A 99
Chapter 5 〝Termination〟 Part B 112
Episode 02 ―Common Crossbill―
Trailer―JUDGEMENT― 127
プロローグ 130
第一章 上陸 144
第二章 追跡 159

第三章　進入 ―― 174
第四章　対峙 ―― 184
第五章　異界 ―― 194

Episode 01 ―Golden Eyes―

Chapter 1 "Encounter" Part A

『第一の男』と呼ばれる賢者やその弟子たちにより、人類が魔法、法力と呼ばれる超常の力を授かってから長い時を経た。彼等がもたらした知識によって人は無限のエネルギーを得、再起の日1999年に全世界の電子機器を襲った怪現象。後の調査によって未知の生命体が機械を媒体に実体を得ようとしていたことが判明し、電子機器を始めとした機械文明が封印される原因となった。をきっかけに失った機械文明の代替を手に入れ、かつての生活を取り戻す。

やがて人はその知識や力を欲望の為に求め、使うようになり、その結果『ギア』と呼ばれる生体兵器を生み出すに至った。

その内の一つ、初の指揮固体型ギア『ジャスティス』による暴走と反乱、それに端を発する生体兵器ギアと人類の全面戦争『聖戦』

百年にも渡るその戦いは多くの命を奪い、数多の地に今もなお残り続ける深い爪痕を刻んでいった。

そして、消えゆく命の一つであったはずの少女は、幸か不幸か絶えかけた鼓動を『ある者』を模したギア細胞によって繋いだ。

化物に殺された少女は生きたいと願い、そして自分を殺したそれ等と同じ化物になった。

Guilty GEAR Xtension Episode1―Golden Eyes―

Chapter 01

Encounter

A

時は移ろい、２１８１年。人間に危害を加えないギアがいる、その噂を聞きつけ、高額の手配書を手に悪魔の棲む地へと向かった賞金稼ぎが出会ったのは、自分よりも遥かに強い、破壊神ジャスティスと同等の力を持つ少女ディズィーであった。

近くの村で拾われた彼女は、急激に成長してゆく自身の姿やその背に負う翼、腰の辺りから垂れ下がる尻尾などの『人ではない』証拠に恐れをなした村人達との軋轢を避けるため、育ての親である老夫婦の密かな計らいによって逃され、人の手の届かないこの森に隠れ住んでいるのだと言う。

彼女の言葉と村の状況を見て分かったのは『ディズィーが自分の意志で率先して人を襲ったことは無い事』と『彼女の内にあるジャスティスと同等の力は未だ制御が及ばない事』。

以上の点を理解したにも関わらず、格上の相手に勝負を挑むほど賞金稼ぎは愚かではなく、また話が通じると知っていても、彼女が今以上に問題を起こさない場所を融通できるほど、賞金稼ぎは伝手も、力も持ちあわせてはいない。

それ故ディズィーに対して出来ることはなく、幾つかの経験談と、生まれが特殊であっても意外とどうにかなるものだという気休めとを会話の中で吐き出し、見なかった事にしてその場を去る以外の選択肢を、あの時の賞金稼ぎは持たなかった。

その後しばらくして、彼女がジェリーフィッシュという快賊に身を寄せている事を、風の便りに聞いた事は幸いであった。たとえ自身が無力であったとしても、特別彼女と親しかった訳ではなくとも、どうせ聞くのであれば凶報より近況報告や吉報にしたいものなのだから。

そして、それから幾らかの月日が流れる。

「あら、おはようございます。珍しいですね、こんな時間に来られるなんて」

「久し振りに近くに寄ったしついでにね。ちょっと面倒な賞金首と当たってさ、三日くらい何も食べてないんだ」

ある街の一角、噴水のある広場を望む位置に存在する喫茶店。扉に取り付けられたベルを鳴らし、一人の少女がその店内に足を踏み入れる。店員とは顔見知りらしく、二、三の挨拶と会話を交わし、彼女は窓際の席へと荷物を置いて腰を下ろした。巾着型のバッグはまだしも、背丈ほどはありそうな大きな鉄塊が壁に立てかけられている様は異様であったが、それを気にする者は今はいない。
「眠気覚ましにコーヒー貰っていい？　あとトーストとサラダお願い。どうせこの時間は暇でしょ」
「暇は暇ですけど。うちのオススメは紅茶ですよ」
「そっちは元団長に好きなだけ振る舞ってよ。私コーヒー派だもん」
そう言って小さく笑い合い、彼女は差し出されたグラスの水を一気に流しこむ。直前の数日を飲まず喰わずで越えたことも手伝い、喉を潤す冷たさが心地よい。雲の切れ間から見え隠れする陽の光に目を細め、早すぎる朝食を待つ。賞金稼ぎの少女、ノーティス＝アーシュヴァインのおおよそいつも通りの朝であった。
同時刻。路地裏を抜け、建物の間を縫うように息を弾ませ走る二つの人影。片方は黒のショートカットを揺らし、顎が上がり始めた状態で寝巻着姿のまま必死に脚を動かしている。そしてもう一人は、修道服を思わせる形状の青いベールにワンピースに金色の髪。どちらも十代前半から半ば頃の少女と思しき容姿をしていた。
「……大丈夫ですか？」
「なん、とか」
「もう少しで広場に出ます。そこなら人の行き来もあるはずですし、注目を集めて警察の方を呼んで貰いましょう」
そう言ってこちらに視線を向ける少女に頷き返し、棒になりそうな脚に一層の力を込める。そして十四、五分程度走っていると、不意に視界が開けた。
「……くっ」
しかしそこには、期待していた賑わいとは程遠い静寂が広がっており、規則的に水を噴き出し続ける噴水と、営業中の札を掛けているものの、客の気配が殆ど無い喫茶店とが見えるのみであった。

そして、数分としない内に朝靄の中から自分達を追ってきた男達の姿が現れ、その幾人かが懐から刃物を持ち出し二人に切っ先を向ける。
「ウチから絶対に離れないで下さい」
こくり、と頷く黒髪の少女に微笑み、直ぐに男達に意識を向ける。繋いでいた手を離し、そのまま腰に下げた得物へとゆっくり下ろす。冷たい金属の感触を確かめ、そのまま曲面を指でなぞり小さなため息を吐く。
「……勝ったところで、お捻りは貰えそうもありませんね」
二個のヨーヨーを手に、少女は口角を上げて笑みを作る。こちらを心配するような表情を向ける少女と、彼女に持たせている一冊のファイル。十人を越える数を相手にその両方を守りぬけとは、なかなかに骨が折れる要求だな、と数刻前に首を突っ込んだ自らを呪う。
しかし、今更方針を変えるなど出来るはずもなければ、そもそも彼女を守りつつ警察機構へ事の次第を伝える、という目標を変更する予定も毛頭なかった。
「さあ、始めましょうか」
そう呟き、上体ごと大きく両手の得物を振りかぶる。二人を抑え込もうとしていた三つの人影を目掛け、そのままバネのように身体を捻った。そのまま手を離れた赤黒の円盤が風を切って唸りを上げると、鈍い音が耳孔を叩き、確かな手応えがストリングを通じて伝わった。
受け身を取れず地に伏す影を視界の端に確認し、入りが浅かったのか片膝を着くもう一人へと向かって駆け出し、その勢いを乗せて蹴りを放つ。
「がっ?!」
「まず三人……っ!?」
「調子に乗るんじゃねえぞガキが！」
着地を狙い、逆手に取ったナイフを振りかぶり迫る人影。先程投げ放ったヨーヨーの一つは中空に留まっており、その両手には何も握られてはいない。

そして彼女が姿勢を立て直す前に到達しそうな凶刃、もはや手遅れかと思われた。
「四人、でしたね」
しかし、その切っ先は少女を貫く事無く取り落とされる。めき、という鈍い痛みを伴う音によって。
「か、はっ」
「な、なんだありゃあ……！」
「ロジャー！」
背後からの打ち下ろしをまともに受け、男は石畳に顔面を強かに打ち付けそのまま動かなくなった。そして少女を庇うように男達の前に立ちふさがるのは、『ロジャー』と呼ばれた熊のぬいぐるみ。ひと目見れば何の冗談だと思うだろう、しかし『それ』は、確かに何もないように見えた空間に突然現れ、そして仲間の一人の意識をその豪腕によって刈り取ったのだ。
困惑と警戒心で足踏みをする男達と、ロジャーと並び立つように構えを維持する少女。自身の扱う武具の特殊性のお陰で、彼女は相手の戦力を再確認する猶予を得られた。
「へえ、召喚系かな」
「珍しいですね。……助けには？」
「面倒臭いから嫌。警察機構に連絡入れてるんでしょ、アレなら到着までの２，３０分位は……」
問題なく凌げる、トーストを片手に言い掛けた言葉は声として外に出ること無く途切れてしまう。あまり見ない武器を扱う少女が気になったせいで、少女は男達が狙っているのが彼女一人ではないことを失念していたのだ。
小さな悲鳴を上げ腕を取られる少女と、それを見て足を止めた金髪の彼女とを横目に、店員へと金貨を手渡し荷物を背負い扉に手を掛けた。
「げっ、そっち非戦闘員なの」
「あら、行くんですか？」
「予定変更、仕方ないでしょ。お金先に渡しとくね、お釣りはとっとい

て」
窓越しに見えるのは、人質を盾にされ、為す術もなく抑えこまれる少女と、それを囲む様に立つ男達。二人の少女から少し距離をとって立つ、頭一つ背の高い男の下卑た笑い顔を見て、ノーティスは小さくため息を吐いた。
見覚えのある横顔、そして周囲の人物の身体的特徴。右肩に背負ったバッグから取り出した紙束をパラパラと捲り、男達と見比べた後それを仕舞って扉を開ける。
「人の朝ご飯を邪魔したツケは高いから」

油断していた。最初にヨーヨーを食らわせた内の一人が、意識を取り戻していたのだ。
他の男達との戦闘に気を取られていたため反応が遅れ、位置関係の悪さから伸ばされる手を止めることが出来ず、戦うことの出来ない少女はいとも簡単に人質として相手の手に落ちてしまった。
「おっと、そこまでだ」
「くっ！」
「動くなよ、その変なヌイグルミもなしだ。この状況が理解できない程馬鹿じゃないよな？」
「どうしてその子を」
「分かんねえのか？」
少女にナイフを突き付けていた男とは別の声が割って入る。ニヤニヤと趣味の悪い笑みを浮かべてこちらと人質とを見比べる姿に背筋が凍る。身体中を駆け巡る悪寒に眉をひそめ、ポツリと吐き捨てるように呟いた。
「……最低です」
「そりゃどうも。ただ、自分の立場はちゃーんと覚えとけよ？」
何を言っている、そう問いかけようとした直後、後頭部を鈍い痛みが襲い、足元がぐらり、と揺れる。背後から殴られたと理解が及んだのは、頬に石畳の冷たい感触が押し付けられてからだった。
「テメエはその最低な奴に命綱を握られてるって事をな」

「……」
「お生憎様、命綱って偽物だったみたいよ？」
凛とした少女の声が広場に響く。頭を押さえつけられたまま、視線のみを声のした方へと向ければ、緑地に黒の靴がゆっくりとこちらに向けて歩みを進めるのが視界の端に見える。遅れて意識に入ったのは、かつ、かつと石畳を叩く金属の音。
それが何の音なのかを理解する前に、少女の姿はそこから消えていた。
「一つ」
「がっ……?!」
次の瞬間、黒髪の少女を捕らえていた男の顔に膝が吸い込まれるように打ち込まれる。仰け反る男の腕から力が抜けたのを確認し、少女はもう片方の脚を一気に振りぬく。
遅れて吹き飛ぶ男を見ること無く黒髪の娘の手を取り、背負っていた荷物を上方へと放り投げた。
「何だてめえはっ!?」
「クソ、コイツもヤっちまうぞ！」
「……遅いッ！」
自由になった右手で少女の脚を、左手で背中を抱き、お姫様抱っこのような姿勢のまま、彼女はそのままもう一人の救出対象の元へと駆け出す。初めにこちらへ到達した男の右腕を躱し、その勢いのまま回し蹴りで延髄を刈り、崩折れるそれを足場に一気に跳躍する。
そして、それに反応して残る一人から手を離し立ち上がった男へ向けて、重力に従いその踵を振り下ろす。ゴッ、という鈍い音を立てて、鮮やかにノーティスの脚は彼の頭頂部へと吸い込まれていった。
「動ける？」
「はい、なんとか……」
殴られた衝撃でベールが脱げ落ち、その短く整えられた金髪が露となる。揺れる頭を抑えながら、ショートカットの少女はロジャーが居た場所に落ちていたヨーヨーを手に取り再び構えを取る。
「上等。良い根性してるよ」

そう言い終わった所で、轟音が背中を強く叩いた。突然の物音に肩を竦めた金髪の少女が恐る恐る振り向いてみれば、そこには隣の少女が持っていたバッグと、古い布が乱雑に巻きつけられた大きな塊。まるで板のようなそれが何なのか、という疑問は、そこから伸びていた布の一端を引いた少女の手によって明らかとなった。
「さて、残るはアンタ達五人だけ。目的は別に興味ないし、まだ結構時間あるから警察来るまで引き延ばすの面倒なんだよね」
「んだと……!」
「……そーゆー訳だからさ」
少女が手首を返し、解かれてゆく布の下から現れたのは、緑色の装甲板が拵えられた大きな剣。長さこそ両手剣、ツーハンデッドソードと呼ばれる物より短かいものの、その厚み、剣の幅からくる重量は並の人間が武器として扱えるようなものではなかった。
「手っ取り早くノされててくれない？」
返事は、一つの乾いた音によって行われた。左の肩口を刺す焼けるような痛み、突然のことに訳も分からず恐怖に声も出ない黒髪の少女と、呆然とノーティスと相手の男に視線を往復させる金髪の少女。
この痛みに、痛みの原因に、少女は心当たりがあった。残った男の内のリーダー格と思わしき人物がこちらに向けている、白煙を引く黒い塊。旧世紀には火器、と呼ばれた忌むべき兵器。
「……ブラック、テック」
「よく知ってるじゃねえか、糞ガキ。だが残念だったなぁ、テメエは此処で殺した後ゆっくり遊んでやるよ」
「きゃっ!?」
二つ、三つと銃声が響き、少女の太腿、腹部へと赤黒い穴が開けられる。同様の武器をこちらに向けられ動くことも出来ないまま、二人は為す術もなく傷を増やす少女を見ているしか出来なかった。
「随分静かになったなオイ。大人しくしてりゃ生きてる内に楽しめたのによ、残念」
「同、感」
「……あ？」

「ＤｏＡの賞金首とは言え、生きてた方が後々楽だろう、って思ったから……捕まえるだけで済ませようと思ってたのに」
手配書に書かれていた罪状、当人の振る舞い。
「アンタは、やっちゃいけない事をした」
そして、旧世紀の負の遺産。
「気が変わった」
「何をブツブツ言ってやがる、そんなにすぐ死にてえか」
少女の身体から、銃創が消えた。
「……死ぬのはアンタ達だよ」
「ナメたこと言ってんじゃねェ！」
怒声と共に放たれた銃弾が、少女の額へと吸い込まれてゆく。肉が抉れ、骨を叩く音が響いても、その首を衝撃に揺らすこと無く彼女は歩く。やがてその歩調が早まり、二つ大きなステップを踏んだ直後、その姿は男の至近距離にまで迫っていた。ぐん、と身体を捻り、小さく風を切る音が聞こえる。男の喉から絞り出される怯んだような悲鳴は、次の句を次ぐことのないまま掠れて消え去った。
「そんな玩具で死ぬと思った？」
片手で振り抜かれた大剣が、男の上半身と下半身を二つに分け、それは重力に従い崩れ落ちる。石畳を鮮血が染め、むせ返るような匂いが風に舞って鼻腔を刺激する。目の前で起こっている事実を理解できず困惑の色を見せるシスター姿の少女は、いつの間にか自分に身体を預け、気を失っている少女を羨ましいと思ってしまった。
その後眼前で繰り広げられたのは、戦闘ですらない、単なる一方的な蹂躙に過ぎなかったのだから。
ブラックテック魔法、法力が生まれるより以前の技術や、それによって作られた物達の総称。銃火器は元より、広義には燃料発電や科学技術の産物すべてが含まれる。再起の日を境に封印ないし破棄された筈であったが、ごく一部では今なお秘密裏に研究が行われている。と呼ばれる武器が通用しないことを知って、残された者達は対照的な行動を選んだ。ある者は、気を失っている者達も全て見捨てて逃げだし。そしてある者は、理性を失いただ怒りと恐怖に任せて目の前

の少女を殺そうと己の武器を大きく振りかぶる。
　しかし、後者はその腕を、剣へと変化した少女の手によって切り落とされ、首筋を貫かれ物言わぬ死体へと変わり、逃げた者達は、死体を残すことすら許されず。
「……インペリアルレイ→↘↓←↙↑→＋Ｓ、テンションゲージ５０％使用。掌からレーザーを放ち、着弾した地面から火柱を上げる覚醒必殺技。基本的な性能はディズィーのそれに準ずる。」
　呟く少女がその手より放ったレーザー、爆炎にその身を灰塵へと変えられてしまう。残されたのは、意識を失い倒れている男達と、まるで先ほどまでの惨劇が無かったかのように、平然と返り血を拭うノーティス、そして物言わぬ肉塊となった幾人かの姿。
　喉まで上ってくる吐き気を抑え、一歩、彼女の元へと近づく。
「どうして、こんな事を」
「何？」
「ここまでする必要は無かったはずです！　赤の他人なのに、ウチ達を助けてくれたことには感謝しています、でも……」
「面倒臭かったから」
　遮ってノーティスの口から出た言葉に、険しい表情を浮かべていた少女の瞳が驚愕に見開かれる。こいつは何を、平気な顔をして言っているんだ、と。
「あいつ等が持ってた武器、見たでしょ」
「……ええ」
「あの武器、ただ狙って撃ったらそれだけで人を殺せるの。街中であんな物使われたら巻き添えだって出るしさ」
　続けて、少女は口を開く。そんな物を気にしながら戦う位ならさっさと殺してしまった方が早い。単なる取捨選択でしかない、と。
　理屈は分かっても、彼女の感情の失せた瞳が見えてしまった以上、その発言に納得など出来なかった。戦闘力を奪う程度なら出来たはずだと、思わず食って掛かってしまう。
「気絶させるなり方法はあった筈です」
「わざわざ加減が必要な方法を選ぶ理由は無い、って言ってるの。前

に居たハムメーカー『小説版ギルティギアゼクス　白銀の迅雷』に登場した賞金首団体。生きた人間を吊し上げ、刃物でその身を切り刻むという残忍な手口からそう呼ばれる。登場した数ページの内に首魁は首を落とされ、残る賞金首たちは消し炭となった。討伐者はソル＝バッドガイ。とかよりマシってだけで、ロクでもない事には変わりないでしょ」
「……それでも、彼等は法の裁きを受けるべきでした」
少女の言葉に、ノーティスは態とらしく大きなため息を吐く。二人の感情を表すかのように空模様は大きく変化を見せ、灰色の雲がやがて大粒の雨を降らせ始める。
もう話すことはないと言いたげに荷物を回収し、大剣を提げた少女は二人に背を向ける。歩き去っていこうとするそれを、シスター姿の少女は引き止めた。
「何処に、行くつもりですか」
「さあ。警察相手に説明するのもあんまりやりたくないし、とりあえずここから離れようかな、って」
「なら、ウチ達も行きます」
「……いや、なんで？」
心底不思議そうにこちらを見るノーティスに対して、少女は小さく考えこむ素振りを見せる。やがて顔を上げ、その小さな口を開いた。
「ああは言いましたが、間違いなくウチより貴方の方が腕は立ちますし、一緒にいれば一人でこの人を守るよりは安全です。それに、貴方のような危なっかしい人を放っておけませんもん」
「……で？」
「後は、そうですね。雨の中彼女と警察の方が来るまで待つのも身体によくありませんから。その服じゃ一人で宿に入れないかもしれませんよ？」
そう言っていたずらっぽく少女は笑う。今度はノーティスが微妙な表情を浮かべて考えこみ、やがて諦めたように首を左右に振る。
「……わかった。その感じだとアンタも訳ありというか、警察で長話はしたくないんでしょ」

「……ええ、まあ。色々と事情はありますが、状況的には家出中のようなものなので」
「仕方ない、か。乗りかかった船だし、逃げてた理由にその女の子の事、色々聞かせて貰うからね」
そして。金色の瞳の少女は、困ったように眉尻を下げて笑みを浮かべた。

Chapter 1 ”Encounter” Part B

Chapter 01 Encounter B

石畳の道を雨粒が叩く。返り血の着いたベストや、重ね着していたスカートの内一着をバッグに仕舞い、濃紺のインナースーツのみとなった上半身を雨に晒して宿へと向かうノーティスから視線を逸らしながら、シスター姿の少女はその後ろを付き添うように歩いていた。

「あの、流石にその格好は……」

「元々これとベストだけだったんだからあんまり変わんないでしょ、そんなに言われるようなカッコじゃないと思うんだけど」

「ええと、それはそうなんですけど」

同性だというのに変なリアクションをするなあ、などととりとめのない事を考えながら歩く内に、目的の宿屋へと到着する。気を失っている少女に気付き訝しむ店主に『歩き疲れて眠ってしまった』と誤魔化し、三人はそのまま充てがわれた二階の客室へと足を踏み入れる。

途中、シスター姿の少女が同室をやんわりと断ろうとしていたのを止め、同室で良いと伝えた辺りで『彼女』の表情が若干曇っていた理由に気付いたのは、しばらくの時を彼女と過ごしてからのことであった。

「シャワー先使ったから、次どうぞ」

「は、はい……あの」

「自己紹介はそのびしょ濡れの身体をどうにかしてからね。一応着替えも貸し出してるみたいだし」

タオルを手に髪を拭くノーティスに小さく会釈を返し、金髪の少女はシャワールームへと直ぐに引っ込む。扉越しに聞こえてくる衣擦

れの音と遅れて鳴る水音、それらをかき消すように窓を叩く雨音を聞きながら、彼女は未だに目を覚まさない少女の方を見やる。
見る限りでは特別な何かを持ち合わせている訳でもなく、彼女自身が、異種と呼ばれる人間でもギアでもない何かである、という風にも見えない。先程殺した賞金首の言い回しからみてただの人攫いか、と考えかけて、ふとテーブルの上に置かれたファイルに目が向く。
「……そういえば、あの子の持ち物なのかな、アレ」
表紙には通し番号と思わしき数字が書かれているのみで、誰のものか、どういった内容のものか等は一切書かれていない。好奇心に負けて手に取ろうとし、慌ててその手を引く。厄介事の種だったらどうするんだ、と。
「……まあ、後で本人に聞けばいいか」
「……ん」
小さな声を漏らし、眠っていた少女が寝返りを打つ。やがてゆっくりと目を開いた彼女の視線が、寝返りに気付きそちらに振り返ったノーティスの視線とぶつかった。
「あ」
「目が覚めた？」
「はい。あの、あなたは……」
上体をゆっくりと起こし、黒髪の少女はこちらに向き直る。その表情には気付いたら見知らぬ場所に居たという戸惑いと、つい先程まで暴漢から逃げていた、という事実からくる恐怖が浮かんでいた。濡れた身体が原因である体温の低下と精神的な負担の両方から、肩を抱いて少し距離を取ろうとする彼女を宥めるように、ノーティスは努めて落ち着いた声で話しかける。
「私は通りすがりの賞金稼ぎ、一応味方。貴方を連れて逃げてた子なら今シャワー浴びてるから、もう少ししたら戻ってくるよ」
「……？　あ、ありがとうございます」
「私の顔に何かついてる？」
「いえ、その……なんでもないです」
遅くなってすみません、と言ってシャワールームの扉を開け、金髪

の少女が部屋へと戻ってくる。そのままノーティスは黒髪の少女を促しシャワーを浴びさせ、再び彼女らは対面して話す形となった。
「それじゃ、あの子の事聞かせてもらっていい？」
「ええ。詳細を彼女に聞かせたい話ではないですし、手短に伝えさせていただきます」
　そう言って金髪の少女は、先程ノーティスが覗き見ようとしていたファイルをテーブルから取って手渡してくる。嫌な予感がしたものの、見ないという選択肢は与えられず、そのままページを開いた少女の瞳は大きく見開かれ、その表情は強張ったまま動かなくなる。
　そこに書かれていたのは、複数の少女の名前や身長体重、血液型などの情報と顔写真、その名前の幾つかに付けられた×印。そして、ページ最下部に書かれた『Ａｄａｐｔｉｖｅ（適合性）』の文字。それは紛れも無く、ギア研究の被験者、その候補達を記したものであった。
「……アンタ、これ何処から手に入れたの」
「……あの男達が持っていたものを、警察機構に伝えるときに役立つかもしれないと思って。奪って逃げてきました」
「で、ロクに戦えない女の子連れて逃げてたわけ？　私がたまたま居なかったら二人揃ってコレの仲間入りじゃない、馬鹿じゃないの」
　ノーティスの言葉に少女はぴくりと眉の端を跳ね上げ、憮然とした表情を浮かべ身を乗り出す。
「貴方はどうしてそういう言い方ばかりするんですか！　確かに先程は危なかったと自分でも思います、でも、だからといって見捨てろなんて言われても出来ませんよ！」
「ミイラ取りがミイラになってちゃ世話ないよね。被害者増やすくらいならやらない方がマシだと思うよ、私は」
「……冷たいんですね、貴方」
「うん、よく言われる」
　大きなため息を吐き、乗り出していた身体をベッドに戻して、少女は壁に背中を預ける。片膝を抱え、思い悩むように顎を膝に乗せた彼女を横目に、ノーティスは仰向けに倒れこんだ。二人分のため息が、静かな室内に吐き出されて消える。

「……取捨選択だよ。優先順位は決めないとさ」
「……簡単に言いますね」
「手の届くもの全部を拾って救って回れるのは、ごくごく一部の天才サマだけなの、困ったことにね」
　それまでとは打って変わって哀しげな色を付けて吐き出される声に、思わず顔を上げる。呟いた彼女の表情こそ変わりないものの、その声の変化が気になり、彼女はつい、迂闊だと知りながらも少女に問いかけた。拾えなかった何かが、救えなかった何かが、彼女にはあるのではないか、と。
「何か、あったんですか？」
「昔話は聞かない方が良いよ、ツキが落ちるから」
「なんですか、それ」
「……ちょっとしたジンクスごく短期間の在籍かつ神出鬼没、そして余りにも高い戦闘能力を持つソル＝バッドガイ。その特異すぎる振る舞いから軍神と呼ばれ、その素性を知る者が一人として存在しなかったことにより聖騎士団の内部で自然発生したもの。みたいな物かな、知り合いにそういう風に言われてた人が居てね」
　変わった人も居るものですねえ、と金髪の少女は小さく笑い、本人に聞かせたら殺されそうだけど、とノーティスも合わせて苦笑いを浮かべる。それから何を話すでもなく時間は過ぎ、やがて聞こえたシャワールームの扉の音に反応した少女は、軽く振り上げた脚で勢いをつけ、そのまま上半身を起こした。
「ごめんなさい、時間、掛かっちゃいました」
「良いよ、別に急いでこの宿を離れようってわけじゃないから」
「貴方を家に送り返すにしろ、警察機構に保護してもらうにしろ、この雨じゃ外を出歩けませんしね」
　小さく頭を下げる黒髪の少女をベッドの縁に座らせ、三人共が話を出来る体勢になったと見た金髪の少女は、残る二人に確認をとった後小さな咳払いを一つし、改めて口を開いた。
「それじゃあ、一端落ち着いた所で自己紹介といきましょう。ウチはブリジット、旅の賞金稼ぎです」

「ノーティス＝アーシュヴァイン。同じく賞金稼ぎ、アンタの名前は？」
「クリス……クリス＝メタリカです」
短い付き合いになるだろうけど、と前置きノーティスは笑みを浮かべる。その表情に壁を感じたか、戸惑いながらもクリスと名乗った少女は微笑み返した。
実際の所、彼女達の置かれている状況そのものはさして悪いものでもなかったのだ。直接クリスの身柄を狙っていた者達はブリジットやノーティスの手によってひとまず倒され、彼等にファイルを渡した人物などは三人の潜伏先を知らない。そして、実行犯のうち気を失っている者は恐らく既に警察機構によって逮捕されている筈。
以上の点から、ノーティスとブリジットの両名は、部屋でクリスが目を覚ますまでゆっくりと待つことが出来たし、腰を落ち着けて話をする事も出来た。
「それでクリスって言ったっけ、住んでる所と家族構成だけ教えてもらっていい？　帰す前に連絡入れておきたいんだよね」
「ええと、それなんですが、他にも仲間がいるみたいなので……家に帰って貰うのは少し遅らせた方がいいかもしれません」
「そうなの？　うーん、じゃあ警察の動きを待った方が安全か。流石にずっとボディーガードをしてる訳にもいかないし」
そう言って少女は備え付けのケトルを手に取る。人数分のマグカップとティーバッグを準備し、そこにケトルを傾ければ、茶葉の香りが湯気に乗って鼻腔をくすぐる。雨に濡れた身体をシャワーと紅茶で内外から暖めなおし、三者三様に息をついた。
「となると、あんまりやる事も無さそうだね。二人共その様子だと着替えも無さそうだし」
「恥ずかしながら、逃げてる途中で荷物を落としてしまって……ウチは一応こっちのポーチに貴重品やお金は入れてるんで大丈夫なんですが」
人差し指で頬を掻くブリジットの視線が、両手でマグカップを抱える黒髪の少女の方へと向く。

「クリスさんは特に、元々攫われそうになった所を助けたのもあってそういった準備なんかは全然出来ていないんですよね」
「……すみません」
「そもそも賞金稼ぎでも何でもないフツーの子だろうし当然か」
　申し訳なさげに頭を下げる少女に対して首を振り、どうしたものか、と考えを巡らせる。どちらにしろ、警察機構に対してこの情報を知らせる必要はあるだろう。だが、『家出中のようなもの』というブリジットもそうだが、何より派手に賞金首を殺した身で警察の人間とあまり顔を付き合わせていたくない、という気持ちもある。
　それに、このファイル一つでは持ち主を特定出来る情報に欠けるためすぐに知らせて進展があるのか、という疑問が拭えない。
「警察機構に知らせる前にもう少し情報を集めたい所なんだけどね」
「情報ですか？」
「そ。被験者集めに足が付きにくい個人の賞金首を使ってる辺り結構頭は回ると思うし」
　虱潰しになる可能性が捨てきれない以上、少なくともこの街区の手配書の入手と更新とはしておきたい、そうノーティスは呟く。厄介事に関わりたくないとは思うが、それが禁忌であるギア研究に関係するものであり、更には被験者を誘拐してまで行われているとなれば、流石に見て見ぬ振りをする気にもなれなかった。
「……ブラッカード社小説『白銀の迅雷』に登場した製薬会社。ロンドン郊外、ギアとの戦闘によって出来たクレーターに住む難民たちを利用し、極秘裏に『ヴィタエ』という新薬の開発を行っていた。後述のヴィタエを用いた人体実験、そしてメガデス級ギア『ヒュドラ』の覚醒などの主犯として社長であるシーバスは逮捕拘束。ブラッカード社も程なくして完全に解体された。って確かヴィタエブラッカード社が研究開発していた新薬。実際のところ、薬剤と言うより投薬型のギア細胞であり、患部を置き換えることによりあらゆる症状に効果を発揮するというもの。そしてその実体は『指揮個体型ギアの命令信号を受信、増幅させることでメガデス級の制御をも可能とする共鳴基』というおぞましい代物であった。で摘発されてなかったかな」

ファイルの背表紙からラベルを抜き取り、何かを隠すように貼られていたラベルと同色のステッカーを剥がす。粘着剤に負けて破れた部分と、ラベルに残された図柄とを見比べ、少女は呟いた。

雨の降りしきる噴水広場、雨水と混ざり斑になった血だまりを、白いブーツが踏み、飛沫を跳ね上げる。レインコートのフードから青緑の瞳を覗かせるその男は、同様の雨具を身に着けている部下たちと共に、数刻前この場所で起こった惨劇についての捜査を続けていた。

男の名はカイ＝キスク。かつて聖騎士団団長でもあったその男は、今は国際警察機構に身を置いている。

「カイ様。残存法力の解析、出ました」

「ご苦労様です。結果は？」

「生体法紋法力を扱える生物が固有で持つ法力の流れ。気功における『内気功』にも似た概念であり、この流れの乱れが体調や法力の行使に影響を与える事も。個人、個体ごとにそれぞれ特有の流れを持つため、指紋などと同様に本人確認、身元の照合などといった用途にも使われる。の該当者は二名、いずれも賞金稼ぎです。目撃証言にあった特徴とも合致しますね。もう一人、現在行方不明の少女も、被害者達から賞金稼ぎの手に渡ったと思われます」

部下である男性とガーデンハットの下へ行き、懐から取り出した用箋挟を見ながら話を続ける。

「賞金稼ぎのうち一名はブリジット、ここ最近、数件ほど討伐者として名前が登録されておりますがそのどれもが拘束……」

「これほどの惨状を生み出せるとは思えない、ですね」

「はい。もう一名はノーティス＝アーシュヴァイン。こちらも記録されている討伐リストは少数、先に上げたブリジットと同等か、それより僅かに上回る程度です」

あまり収穫は得られそうにありませんが、探して話だけでも聞いてみますか。言外にそう問いかけた瞳が、カイの表情を見て、戸惑うように揺らいだ。

「……どうされましたか」

「……いえ、何でもありません。その賞金稼ぎの捜索、並びに接触は私が行います、引き続き被害者の身元確認を急いで下さい」
「了解しました。ですが、賞金首や登録されている民間人等と生体法紋が合致しないというのは何とも妙な話ですね、これではまるで難民や死人です」
　不用意な発言に思わず眉をひそめた事に気付かれたか、部下の男が慌てて頭を下げる。だが、その発言を咎めようとしたその時、カイの脳裏に一つの可能性が浮かんだ。
「し、失礼しました」
「……思慮に欠ける発言は慎むことです。だが、貴方のお陰で彼等の身元が判明するのが少し早まるかもしれない」
「というと」
「遺体の顔の内一つ、そして一つだけあった首なし死体に抱いていた違和感の原因が分かりました。この数ヶ月の内に討伐された賞金首から照合を行って下さい、対象は死亡の認定が出た者のみです」
　カイの言わんとする所が見えず、部下の表情が困惑に彩られる。しかし、幾ばくかの間の内に目的に思い当たったのか、慌てたように男は敬礼をして走り去った。
　いまだに止む気配を見せない雨を見ながら、カイの口から零れたのはため息。
「あまり気は進まないが、話を聞かないわけにはいかないだろうな……」
　かつて自分が聖騎士団団長として対ギア戦闘の渦中に居た頃。自分の少し後に聖騎士団に参加し、僅かな在籍期間の後に神器聖戦の最中にソルが作り上げた対ギア兵器『アウトレイジ』が余りに強大であったため、八つに分割し人が扱えるようにした武具の総称。法力の増幅、詠唱、演算の最適化などにより所有者の戦闘能力を高め、聖戦においてその力を振るった。聖戦後所在が不明となった物も存在する。『封炎剣』を持ち逃げした男ソル自身が封炎剣の製作者であり、当時所有者と言える存在でもあったクリフ＝アンダーソンより譲渡された上で脱退しているため、正確には持ち逃げではない。が、ソル自

身が説明を放棄しそのまま脱退してしまったためそのことをカイは知る由もない。とは別に、ある問題児が居た。身の丈に合わぬ大きな剣を操り、その戦果から年若い内に物理攻撃小隊長を任されるまでになった一人の少女。

特徴的な風貌に一見無謀とも取れる単身での突出、強大な法力に任せた荒れ狂う暴風の如きその戦いぶりから『金色の目の死にたがり（GoldenEyes|Suicidality）』と囁かれた彼女の名は、ノーティス＝アーシュヴァイン。

「……捜査を混乱させることにならなければいいが」

男は、口が裂けても愛想が良いとは言えない、どこか危うさを感じる少女を内心苦手としていた。

その後の捜査も手応えは薄く、早朝ということもあったせいか二人の行方に繋がる目撃証言は出ないまま、雨は上がり、日は直上へと登ってしまっていた。疲れたように息を吐きフードに手を掛ければ、捲られた布地の下から艶やかな金髪が顕になる。

一通りの聞き込みも終わり、これからどうしたものか、と無意識の内に愛剣へ手を掛けた所で背後から部下の声が聞こえた。

「照合、完了しました。遺体のほぼ全てが討伐済みの賞金首と合致、その大半が全世界的に名の知れている国際広域手配ではなく、街区、国家単位での手配に留まる者でした」

「……犯罪組織ですら無く、たまたま徒党を組んでいたに過ぎない、と？」

「そのようですね。若しくは特定のクライアントに金で使われていたか、といった所だと思われます」

男の言葉に、思わず握りしめた柄がみし、と悲鳴を上げる。一瞬その鞘を覆った帯電現象に眉をひそめ、彼は持ち歩いていた用箋挟を上司へと手渡す。

「こちらが、死亡者の一覧です。国籍も潜伏されていたとされる地区もバラバラ、共通点といえば誘拐、略奪行為での手配書が公開されている点でしょうか」

「……分かりました。貴方は引き続き賞金首についての調査を。討伐

者の情報も可能な限り集めて下さい」
「討伐者、ですか？」
　胸に着けた小さなメダルを手に、男は頷く。討伐記録そのものが偽装であったのなら、それらの討伐者が賞金首と繋がっていた可能性が高いと付け加えて。
　そして、カイはその手元のメダルの向こうで待機しているであろう人物に向けて呼びかける。
「ベルナルド。至急調べて欲しいことがあります」
「……そちらでの事件に関係することですかな」
「そうかもしれない、という予感に過ぎませんが念のためです」
　ベルナルドと呼ばれた初老の男性の声がううむ、と唸り声を上げる。カイの執事であり、元聖騎士団員でもある男は手元の資料から幾つもの束をピックアップし、自身が待機している部屋のテーブルへと広げる。
「先程の会話は聞いていましたね。この近辺、今から二ヶ月前までの期間における失踪、誘拐事件に関しての詳細を調べて下さい。未遂の場合は犯人の目撃情報も合わせてお願いします」
「了解しました。資料がまとまり次第そちらへ送信します」
　メダル越しの通信を終え、カイは広場を離れるように踵を返す。賞金首の死亡を偽装し、個々の繋がりのない人物を使っての誘拐。ベルナルドに調べさせている事件の容疑者の中に、遺体の人物が居たとしたならば、それは『増加の傾向を見せる誘拐、失踪事件』から『組織的な略奪行為や人身売買』もしくは『別の何か』へと変貌してしまう。
　なるべくなら杞憂であって欲しい、そう願いながら男は消えた二人の賞金稼ぎを再び探し始めた。

「どう？」
「今のところ、警察の方が来ている気配はないです」
　大きな市街ともなれば、必ず一箇所は存在すると言っていい施設がある。終戦管理局国連の最高機関である『元老院』の直轄組織。聖戦の終結に合わせて発足し、名称の通り聖戦終結に伴う兵士の社会復帰

支援などを目的として作られた。しかしその活動の透明性は低く、またロボカイの製造や『気』属性の法力の使い手を狙うなどの暗躍もあり健全な組織とは言い難い。の管理の下、賞金稼ぎたちが討伐、逮捕した賞金首を報告したり、また逆にその地区、国家などが手配している賞金首の情報を受取る集会所（ギルド）と呼ばれるそこに、ノーティス達三人は来ていた。

一週間という時間経過もあり、警察機構の手が及んでいることを警戒して先行していたブリジットの報告を受け、ノーティスとクリスの二人はギルドへと足を踏み入れる。

「うわぁ……」

一般的な家庭に生まれ育った少女では、一生涯で一度も訪れるような事はないであろう場所。周囲を見ても、賞金稼ぎを生業とする屈強な者達や、彼等に賞金首の手配書を渡し、捕らえた賞金首や懸賞金のやり取りを行う関係者のみしか見えない辺りで、自分達が明らかに周囲から浮いていることに気付き、慌ててノーティスの影に隠れた。

それらを気にする素振りもなく受付へと向かって歩くノーティスの前に、一人の男が立ちはだかる。

「嬢ちゃん達よ、日銭でも稼ぎに来たんだろうが、悪いことは言わねえから帰った方が身のためだぜ。そんな細腕じゃハイヤー強盗も捕まえらんねえぞ」

「ああ、これでも場数踏んでる方だから平気。討伐報告兼ねて来てるし」

「あん？」

疑いの目をこちらに向ける男に対して、背負ってきたバッグから一つの小包を投げ渡す。慌ててそれを受け取った男は、ぴくりと眉をひそめ、不快感を露わにした表情のままそれを突き返した。

「……そうかよ、邪魔したな」

「いいよ、慣れてるし」

相変わらずおっかなびっくりといった様子で後ろをついて歩くクリス、そしてブリジットと共に受付に小包を渡し、複数枚の手配書を見せてノーティスは口を開いた。

「これ照合お願い。後は手配書の更新、こっちの分で消えてるのがあったら教えてほしいのと、新しい手配書来てたら一通りちょうだい」
「かしこまりました。討伐者名はいかが致しましょう？」
「不詳（ネームレス）でいいや。人攫いの真っ最中に仕掛けたせいでちゃんと後始末出来てないから、正直名前出されたくないんだよね」
「では、少々お待ち下さい」
　淡々とした事務的対応を一通り受け、三人は長椅子に並んで座る。誰からとも無く吐いたため息の後、口を開いたのは、右端に座っていたブリジット。
「でも、本当に良かったんですか？　賞金稼ぎとして名前が売れた方が、他の地域でも手配書を受け取りやすいでしょうし、メリットの方が多いんじゃあ」
「いいの。正直ゴシップとか好きじゃないし、あんまり名前乗りたくないもん。それだったらブリジットの手柄にすれば良かったのに」
「いえ、流石に自分が倒せなかった賞金首の討伐者を名乗るわけには……クリスさんもすみません、無理言って連れて来てしまって」
　ぺこりと頭を下げるブリジットに対して右手を振って気にしていない、と少女は応えた。そして、不安感より新鮮さの方が最終的に競り勝ったのか、此処に入ってきた時の怯えた様子もある程度霧散しており、明るい笑顔を浮かべてクリスは話す。
「私の方こそ、助けてくれるだけならまだしも、知り合いでもなかったのにこうして一緒に行動してくれて、本当に嬉しいです」
「まあ、あの状況で一人にしてしまうのもなんですし……」
「それで行き倒れられたりまた攫われたりしたら寝覚め悪いでしょ」
　そんなことを話している内に、受付嬢の声がノーティス達を呼ぶ。その声に反応してカウンターへと再び立った彼女らを待っていたのは、予想外の宣告だった。
「先ず、手配書の更新分がこちらになります。お持ち頂いた大半は既に討伐が完了していますので、ひとまず新しい物をご用意させて頂きました。それから……」

「ありがと。……？」
　手渡された手配書から立ち上る違和感。こんなに数が減るものなのか、確かに警察機構が現場に到着し、既に捜査を開始しているのだろうが、それにしたってこれは明らかに反映が早すぎないか。
　そう考え首を捻る彼女の脳を、数秒と立たない内に次なる衝撃が襲った。
「誠に申し訳ありませんが、こちらの賞金首は一月前に討伐済みであり、その際生体法紋も照合済みです。また、懸賞金の受け渡しも完了しております」
「……は？」
「……失礼ですが、これはどちらで？」
　受付嬢の視線が、薄らと恐怖、嫌疑を孕むそれに変わった。

Chapter 2 ”Fugitive” Part A

Chapter 02 Fugitive A

「何処で、って中央の噴水広場、丁度人攫いの真っ最中に遭遇して討伐したって言ってるでしょ？」

「確かに、人相に関してはおおよそ一致しましたが、やはりこちらの賞金首の討伐は一月前に確認されており、その際生体法紋も合致しましたので……」

カウンターを挟み問答を続ける二人。眉間に皺を寄せ、高圧的な態度を取るノーティスに怯むこともなく、受付嬢は言外に語る。貴方は勘違いで民間人を殺害したのではないか、と。

その意図が明確に伝わったのか、傍に居たブリジットが愕然とした表情を浮かべ、クリスがその視線を困惑に彷徨わせる。

そして、そのやり取りが周囲に漏れるのにそれほど時間を必要とはしなかった。

「どういうこった？」

「あの小娘、誤討伐やらかしたのか」

「大方、手柄を焦って突っ走ったんだろ。迂闊な真似しないでくれねえかな、マジで」

一人、また一人と呟く言葉は波紋のように広がり、ざわざわと周囲が色めき立つ。怒気を孕む瞳で周囲を、この状況を生む原因となった受付嬢を睨むノーティス。

彼女の怒りは分かる。ギア研究の実験体としてクリスを攫い、あわよくば自分達を慰み物にしようとしていた男が賞金首ではなかったと言われて納得など出来るものか。ブリジット自身、そう口にしてしまいたかった。

しかし、今はそれをしても良い時ではない。一度自分達がギア研究を追い掛けていると知れれば、賞金首を使い実験体を集める黒幕は姿をくらましてしまいかねないのだから。
喉奥にまで出かかった感情を押し殺し、場の空気に呑まれ始めているクリスをブリジットはその背中に庇う。
「……ウチの後ろに」
「……はい」
「一月前に死んだなら私が討伐したコイツは何？　たまたま人相が一致した、賞金首でも何でもないただの人攫いだとでも言うつもり？　それこそあり得ないでしょ」
「不本意ながら、そう言わざるを得ません。それに、貴方の言う人攫いが事実であったかも……」
言い掛けた受付嬢の瞳が、その直後鋭い音と同時に恐怖に揺れる。音に反応してブリジット等が向けた視線の先には、受付カウンターに叩き付けられた平手と、そこから放射状に出来上がった天板のヒビが映っていた。
「アンタ、私が勘違いで普通の人間殺したとでも言うつもり?!　馬鹿にしないでよ!!」
「で、ですが」
「被害者ならここに連れて来てるし話だって聞かせてあげるわ、そこまで言うんだったらコレの生体法紋の照合だってすりゃあ良いでしょ！」
そう言ってクリス達二人を指差すノーティス。だが、それが失敗だった。
「……アレ、捜索願出てた女の子じゃないか」
「二人組に攫われた、って目撃証言があったあれか？」
ポツリと遠くで誰かが呟いた言葉や、それを聞いてクリスの顔を確認する者たちの息を飲む音が聞こえ、ギア化に際して向上した身体能力がもたらした情報に思わず舌打ちが零れた。続けようとしていた言葉を飲み込み、ノーティスはそのままカウンターを少し離れ、背筋に走る悪寒を堪えて、待機している二人の方へとその身を寄せた。

突然冷静さを取り戻した少女を不審に思ったか、困惑するように眉根を寄せるブリジットに向けて彼女はそっと耳打ちをする。『クリスを助けた時、その場に居た男達は何人だった』と。もっとも答えは聞くまでもなく、ブリジットの言葉はノーティスを襲った悪寒を更に補強するための情報でしか無かったのだが。

「二人ですけど……クリスさんを助けた場所の近くに彼等の一部が野営していたみたいで、ノーティスさんが助けてくれた時に居たのはそこから来た増援なんです」

「ありがと。……それとゴメン、ちょっとややこしい事になったみたい」

賞金首が討伐済みだった以上に何が、と言いかけた辺りで、一際大きなベルの音が鳴り響き、それに合わせるように複数の人影がこちらに近付く。そして、続くノーティスの言葉でブリジットは状況を理解した。

「人数もピッタリとはね……」

「……ウチ達がその人攫いだと疑われちゃってます？」

「正解。どうする？」

「どうもこうも、今犯罪者として捕まっちゃうとそれこそクリスさんが……」

「だよね」

苦笑いの後、ノーティスは不意に拳を床へと叩きつける。轟音と共に地面を大きく引き裂く亀裂に周囲はどよめき、三人に近づきあわよくば取り押さえてしまおうと考えていたらしい者たちが恐怖に後ずさった。

「……悪いけど、今捕まる訳には行かないの。取り押さえようってなら骨の三、四本は覚悟してね？」

「腕に自信はあるようだが。さすがに誤討伐はいただけねえな、嬢ちゃんよ」

身体をゆっくりと起こすノーティスの正面に、一人の男が拳を鳴らし歩み寄る。衣服の袖から覗く傷跡、腰に提げた剣と腕を覆う紅蓮の炎。

ギルドに来た直後、カウンターに向かう彼女に話しかけてきた男が、今度はその法力と武力を手にノーティスの行く道を塞ぐように立ちはだかる。クリスを庇いつつその様子を窺うブリジットの目には、男を見つめるノーティスの瞳が一瞬だけ紅い光を放ったように見えた。

「誤討伐じゃないって言ってんでしょ。怪我したくなかったら通してくれる？　その自慢の傷が二桁位増えるよ」

「……言ってくれる。悪いがそっちの嬢ちゃんは返してもらうぜ」

「……人攫いでもないっての！」

一気に意識を奪うためにノーティスが踏み込んだその直後、男はその両腕を大きく振り上げ、纏わり付く炎を地面に向けて振り下ろした。小さな爆発を起こしたそれは、波打ちながら正面からくる少女へ向けて高速で走りだす。ノーティスは、既に地を蹴り地面を離れていたその足を、正面方向の床へと向けてもう一度蹴り下ろす。

地面に突き立てられた左足はブレーキの役割を果たし、その威力は彼女の正面のタイルを打ち上げ、炎を防ぐ様に土や石片を巻き上げた。

「ちっ、速攻で終わらせるつもりだったのに」

「そう簡単にやらせるかよ！」

土埃の中心を撃ち抜くように、炎を纏った拳が飛び出す。頭を下げることでそれを回避し、そのまま両手を着いて地面に刺さっていた足を勢い良く振りぬく。側面から弧を描き顎へと向かい来る踵をすんでのところで躱し、互いに距離を取るよう飛び退く。

「剣、使わないんだ？」

「……殺していいとは言われてねえからな」

「そ」

刹那、男の腕を這っていた炎がその勢いを失い、消えてしまう。そして、それを疑問に思う間もなく、彼は一発のボディーブローによって地に伏すこととなった。

「……ナメられてるんだったらもうちょっととか考えたけど、アンタを殺すのは違うしさ」

「がっ、は……お前、手ェ抜いてやがったな」
「ま、本気でやるとここ解体する事になっちゃうしね。早く行こ、二人共」
苦痛に悶える男を尻目に、ノーティスは表情一つ変えること無くブリジット等を呼ぶ。そのままギルドを逃げ出そうとしたその時、射抜くような声が少女の足をその場に釘付けにした。
「国際警察機構だ。そこまでにしておくんだな」
その制服を、少女はよく覚えていた。身寄りを失い、ギアとなり、行き場を失い、ただ自分に降りかかる火の粉を払っているだけだった自分を拾い上げ『戦い方』を『生き方』を教えてくれた人物。そんな彼の後継者として、聖騎士団団長の勤めを果たし、人類の希望となった男。
いまだ変わらない白と蒼の制服姿に、少女はぎり、と歯を軋ませた。
「カイ＝キスク……！」
「……ノーティス＝アーシュヴァインに、ブリジットの二名で間違いはないな。お前たちに聞きたいことがある」
「嫌だ、って言ったら？」
にやり、と不敵な笑みを浮かべて問い掛ける少女に対して、カイと呼ばれた男は小さくため息を吐き、手にした神器『封雷剣』を鳴らして答えた。
「実力行使だ」
その声が聞こえるのと、ノーティスの眼前に向けて剣が振り下ろされるのは、ほぼ同時であった。反射的に上げた腕の、グローブに備え付けられた手甲が切っ先を弾いて金属音を響かせる。そのまま刀身を打ち払い放たれた拳はカイの顔を捉えること無く空振り、二人の顔が瞬く間に近付く。
そして、伸びきった腕を掴んだままこちらを見据えるカイの顔に浮かんでいたのは、呆れにも近い表情であった。
「緊急要請を受けて来てみれば……一体何があった」
「……色々です」
ごく僅かに震える声に気付いたか、カイの瞳がすっと細くなる。

「色々、か。……分かった、話は後で聞かせてもらう」
「ノーティスさん！」
　カイの言葉を聞き終えた直後、少女の腹部に鈍い痛みが走り、身体がくの字に折れる。こみ上げる吐き気にたたらを踏んだのも束の間、そのまま延髄に手刀の一撃を受け、そのままノーティスは荒れた地面へを倒れ伏した。動かなくなった彼女を抱え上げ、カイは残された二人の方へと向き直る。
「お二人も、ご同行いただけますか」
「……はい」
「……」
　最大戦力であったノーティスをいとも簡単に下されたブリジット達には、彼の言葉に頷く以外の選択肢が無かった。

「もう少し手加減とかってできなかったんですか、団長」
　人の目を盗み、カイはノーティスを抱えて、ブリジットの先導に従い宿の一室へと足を踏み入れる。三人の見守る中、やがて意識を取り戻した少女の放った第一声は、文字通りの嫌味であった。
「仕方ないだろう、人が集まり始めていた以上、あの場で詳しい話もできなければ、お前を叩き伏せるのが演技だと気付かれるわけにもいかなかった。それと、団長はやめなさい。もう聖騎士団の人間ではないんだ、あの頃の立場をそのまま引きずるつもりはない」
「はいはい。ていうか遠回しに演技が下手って言ってます？」
「揚げ足を取るな。まったく……それで、ギルドでは何があったんだ？」
「それは、ウチから説明します」
　不機嫌そうな表情を浮かべて俯くノーティスを制し、ブリジットはテーブルに置かれたままとなっていたファイルを、特定のページを開いてカイに示す。大事になってしまった以上、クリスに気を使って仔細をごまかす訳にはいかない、と考えたらしくその表情は硬いものとなっていた。
「……なるほど、それで賞金首のリスト更新を、と」

「はい。ですが、ノーティスさんが提示した首級が誤討伐ではないか、と言われて……」
「そうでしたか。こちらの通達が遅れてしまったようで、申し訳ない事をしてしまった」
「どういう事ですか？」
　不意に、ノーティスが顔を上げて問い掛ける。それを受けて答えたカイの言葉、彼女が噴水広場で倒した、若しくは殺した賞金首のほぼ全てが討伐済みとなっていたというその衝撃的な内容に、彼女は身を乗り出し眉間に皺を寄せたまま男に問う。
「それ、ギルドへの通達は？」
「いや、まだ行っていない。情報が確定してからのつもりだったからな」
「……しばらく周知しないようにしてくれます？」
　少し考えこんだ後、そのような提案をするノーティスに、傍に座っていた二人の少女が疑念の眼差しを向ける。あんな疑いを掛けられたにも関わらず、何故そんなことを？　と。
　その疑問に答えたのはノーティス本人ではなく、向かいに腰掛けていたカイであった。
「相手の逃走をなるべく防ぎたい以上、こちらは情報制限に異論は無いが、その間は二人の嫌疑を晴らすことが難しくなる。迂闊に動けなくなるが、それでも良いのか？」
「……大丈夫ですよ、危機的状況には慣れてます」
　そう言って肩をすくめるノーティスを見て、カイは小さくため息をつく。そして、やがて諦めたようにその首を左右に振った。
「分かった。だが、さっきも言った通り二人の立場は『クリスさんを攫い、身元不明の人物を殺害した容疑者』となる。こちらからもフォローはするが、少なくとも大手を振って行動できなくなる事は覚えておいて欲しい」
「……それじゃあ、情報収集は」
「ここからの捜査は警察機構が引き受けます。貴方がたはこのまま重要参考人としてここで聴取、監視を受けている、という振りをしてい

て下さい」
「でも」
　反射的に異議を唱えようとしたノーティスを制し、カイは険しい表情を浮かべる。その口から出た言葉は、ギア研究という脅威度の高い内容に触れるせいかいささか棘のある口調になっていた。
「良いかノーティス、ただでさえ動きづらい状況になっている上、この事態を脱するために黒幕を探るという行動は当然ながら相手も考えていると思っていい。無策ではみすみす狙われに行くようなものだ」
「警戒されるのは警察も一緒じゃないんですか」
「そうかもしれない。だが三人が独自に動くより、警察機構が捜査を引き継ぐ方が安全性は高いだろう」
　カイの言葉に渋々ながらも同意する素振りを見せた少女だったが、やがて何を思いついたか、片眉を小さく跳ね上げ得意げな表情を浮かべてブリジットたち二人に視線を向ける。その口から飛び出した提案は、有用ではあったものの警察機構という治安維持機関に勤める彼にとってはいささか承服しがたいものであった。
「……じゃあ、私達がここから逃走して行方を眩ませれば、それを追跡するって名目で本命を追いつめられません？」
「あ、確かに良いかもしれませんね！　ウチ達はそのままどこかに身を隠してしまえば良いわけですし、カイさんが捜査を継続するもっともらしい理由もできますよ！」
　好意的な反応を示すブリジットとは対照的に、カイやクリスの表情は硬い。それもそのはず、一見なんの問題も無いように思える案だが、実行するためにはいくつかの条件をどうにかして満たす必要があったのだから。
「……カイさん？」
「いえ、確かにお二人の言う通りではあるのですが……振りとはいえ貴方がたの追跡を行う必要が生まれる以上、文字通り隠れ家となる場所が必要となるのと、仮に潜伏先を用意できなかった場合クリスさんを連れて逃げ回ることになってしまう可能性がありますので」
「この子を警察で保護してそのまま私達だけ動くのはダメなの？」

「難しいだろうな。両親の健在が確認できている以上、通常通りであれば心理状態や健康状態の検査などが終われば保護者の元へ帰してしまう事になる。だが攫われかけた理由を考えれば家族へ帰した後も警備は必要だろう？」
「ああ、ギア絡みだって気付いてる素振りを見せちゃダメですもんね。保護した後も警備を付けちゃうと相手に怪しまれる訳か」
「そういう事だ。我々が手がかりを得るまでの間、クリスさんの警護を頼めるか」
「……了解しました」
　不機嫌さが滲む少女の声に、他の面々も同様の不快感を募らせる。だが、やはり現状に大きな変化を与えられるほどの妙案は浮かぶはずもなく、最初にカイが発言した通り、警察機構に以後の捜査を任せ、二人は戦えない少女を匿う形でこの宿屋への逗留を続けることとなった。
　そしてカイからの収穫も特にないまま日はやがて傾き、窓から見える景色が藍に染まりはじめる。
「……動けなくなっちゃいましたね」
「そうだね。そういえばあの人、アンタの名前知ってたみたいだけど知り合いだったの？」
「実は、ある賞金首を追いかけていた時に少しだけお世話になりまして」
「賞金首、ですか？」
　ブリジットの言葉にクリス、ノーティスの両名が首を傾げる。警察機構や終戦管理局といった公的機関が賞金を懸ける事も少なからずあるとはいえ、賞金稼ぎが直接警察機構の手を借りることなどそうあるだろうか、と。民間人の少女は単純な興味から、そしてブリジットと同じ賞金稼ぎの少女は、自身の経験から彼女の言葉に同様の疑問を抱いた。
「ええと、お恥ずかしい話なんですが、一度偽の手配書を掴まされちゃったことがあるんです。それでカイさんに色々手を貸していただいて」

「あー……」
そして、続くブリジットの言葉に少女はその瞳を伏せる。なぜなら、彼女自身もその手配書を手にしたことがあるのだから。
「チップ＝ザナフ、御津闇慈、ミリア＝レイジ、梅喧、それからディズィー、だったかな。ブリジットも引っかかったんだ」
「も、ということはノーティスさんも？」
「うんまあ、危うく無実の人間に喧嘩売るところだった」
売っちゃいましたねウチ、とノーティスの言葉を受けて苦笑いを浮かべる。それを見てノーティス、クリスの両名が聞き直してみれば、返ってきたのは「勢いでそのまま当該人物らと戦闘に突入した挙句、偽物と勘違いして本物のカイに戦闘を仕掛けた」『ＧＧＸＸ』ストーリーモードＰａｔｈ　１より。ゲームでは村に帰るスチルが存在するが本作ではその後『やはりまだ迷信を覆すには足りない』と改めて賞金稼ぎを継続している。というなんともそそっかしい話であった。
「え？　アレ読み上げたの？」
「はい」
「本人の前で？」
「はい」
「……私が言うような事でもないけどさ、もうちょっと慎みとか思慮深さとか、そういうのは気にするべきだと思うよ」
真顔でそう言い放つ少女に反論することができず、ブリジットはう、と声を詰まらせる。だが、やがてある可能性に思い至ったのか、先程までのバツが悪そうな表情から一転し薄ら笑みを浮かべて彼女はノーティスへと問い返した。そういう貴方はどうなんだ、と。
「危うく、なんて言いますけど実際のところどうなんです？　チップっていう人も『後から後から賞金稼ぎが押し寄せてきやがる』って言ってましたし、ノーティスさんも戦ったりしたんじゃないですか？」
しかし、ブリジットの追及にも少女は涼しい顔をしたままで、やがて小さく息を吐いてその肩をすくめる。
「……一応これでも元聖騎士団の人間だからね。ミリア＝レイジの賞

金解除って話は聞いてたから、本人に直接確認して終わりだったよ」
「え、あの人ホントに賞金首だったんですか？」
「そのミリアって人はどういう方なんですか」
　ノーティスの言葉に興味を示した二人の方へ改めて向き直り、少女は自身の知っている範囲で、細かい点をごまかしつつミリア＝レイジという人物について話した。元アサシン組織の人間であることや、その首魁であるザトー＝ＯＮＥという人物の逮捕に協力したこと等の対価として賞金を解除され、組織に居た頃の罪を帳消しとされたと。
「今は一人で普通の暮らしをしてるらしいって話。別に個人的に付き合いがあるわけじゃないし、どうしてるかは正直わかんないや」
「……うーん、あんまり気持ちのいい話じゃないですね」
「そうですねぇ……アサシンのリーダーの人を捕まえるのに協力したとはいえ、暗殺者だったことは事実ですし、ウチ的にはなんとなくもやっとしちゃいます」
「まあ、色々あったんでしょ。それこそザトー逮捕に繋がる決定的な情報を持ってたのかもしれないしね」
「いえ、そういう意味ではないんですがなんというか……」
　なにやら歯切れの悪いブリジットの言葉を気にするように片眉を釣り上げたが、やがて興味が失せたのか、少女は自分の飲み物を取りに腰を上げる。
「言いたいことは分からなくもないけど。私たちはそれを面と向かって言う立場じゃないからなぁ」
　冷蔵庫の前で呟くノーティスの手に握られたグラスが、氷を揺らし澄んだ音を立てた。

「……ざってえ。喚くしか能がねえのか」
　紅蓮の炎が闇夜を煌々と照らす。草木や土へと飛散し広がる鮮血よりも紅いジャケットを着た男は、周囲に漂う焼け焦げた肉の匂いに眉をひそめ、手にしていた得物を足元へと突き立てる。直後、その背中で小さな影がびくりとその身を揺らした。
　やれやれと言いたげにその影を一瞥し、男は地面に落ちていたファ

イルを手に取る。
「ヴィタエの臨床実験記録と適合者リスト、何でブラッカードの関係者でもねえ奴がこんな物持ってやがる」
筋肉質な腕が、息も絶え絶えとなっている男の襟首を掴み、その足を地面から１０ｃｍほど浮かび上がらせる。
「お、俺達はただ金で雇われただけだ！　リーガルって奴がそのリストに載ってるガキどもをさらって来いって……！」
「あ？」
男の表情が、より不機嫌そうに歪む。それに気づかず、吊り下げられた男はただ自分が助かろうと、血煙や肉塊、炭となった他の者達のようにはなるまいと、ただひたすら口を動かし続ける。
「それに、俺はもう賞金首じゃない、こんな事をしてただで済むわけが……」
「……何を勘違いしてんだテメエは」
「え……？」
腹の底を蹴り上げるような低音と、ぱち、と弾ける火花の音が聞こえたその時、男はようやく気付いた。この男を前に、命乞いなど無意味でしかないのだ、と。
ソル＝バッドガイ、掠れる声でそう呼ばれた人影は、首筋を掴む指に力を込めて、不愉快だと言わんばかりに男の喉笛を軋ませた。
「死亡済みの賞金首は大人しくクタバってろ」
直後、男の体を猛々しい炎が包み、逃げることのできないその身体を焼き払う。喉から絞り出した悲鳴は酸素を失い音を出す前に消え去り、もがき苦しんでいたそれは、やがて周囲の物と同じ匂いを発し、その活動を止めてしまった。
吐き気を堪え立ち尽くす小さな影、その髪に付いた埃を払いソルは目的地を顎で示す。お前の家は向こうだろ、と。
小さく頭を下げ、逃げるように走り去る影を見るでもなく、彼は男たちから奪い取ったファイルをバッグに入れ、そして何事もなかったかのようにその場を離れた。
「まだブラッカード社の残りが居るってのか……ヘヴィだぜ」

Chapter 2 "Fugitive" Part B

Chapter 02
Fugitive
B

噴水広場に面した喫茶店。惨劇の舞台となった場所を臨み、そして事件の一部始終を見ていた人物のいるこの場所で、カイは少女が座っていた場所と同じ席に着いてティーカップを傾ける。そして、カップの縁から唇を離し小さく息を吐いたところに、業務を終えたらしい店員が歩いてくる。

「……この前の事件、何か気になることでもあったんですか？」

「ええ、まあ。ベルナルドの報告を待つ必要はありますが、単純な殺人事件とするには気にかかる点がいささか多い、というのが正直なところです」

「ということはノーティスも」

「色々と事情はありますが、ひとまずは勾留という形で動きを抑えています。彼女が殺した賞金首についても、まだ調べなければならないことがありますからね」

カイの言葉に店員は納得したように頷き、夕闇の中、窓の外で現場の保全にあたっている人影へと視線を向ける。とはいえ大半の検証作業は済んでいるらしく、それらの人物が必要以上に気を張っている様子は見えない。そして、ふと下方へ視線をやれば、半ば呆れたようなため息を吐きながらも、それを見ているカイの瞳は穏やかなものだった。

やがてその瞳が、決意と不安の両方を湛えたものへと変わる。

「……事の運び次第では、元聖騎士団員である貴方達に応援を頼むことも、ひょっとしたらあるかもしれません」

「そうならないことを祈りたいですね。私なんて聖戦が終わってから

は、包丁や盆を握ってばかりですから」
「……それもそうですね」
　呟くカイの懐で、聞き慣れた呼出音が鳴り始め、その音に二人の表情が強張る。音の発生源は、かつて聖騎士団の人間が連絡を取り合うために持っていた、通信機としての機能を備えた小さなメダル。呼出音が鳴りやまない内にメダルを手に取り、発信者であるベルナルドの言葉を促す。
　そして、固唾を飲む二人に向けて、連絡を寄越して来た者の口から語られた言葉は、カイの胃にストレスを与えるのに十分な役目を果たしていた。
『指示を受けた時は一体何のことかと思いましたが、どうやら貴方様の懸念通りといった所ですな。今回ノーティス＝アーシュヴァインによって殺害された賞金首の内数名、正確には彼らと思われる人相の者が、当該地区並びに近隣での誘拐事件の容疑者として手配されておりました。既に死亡済みと認定されていたためあくまで人相のみ、ですが……』
「同一人物である可能性は低くはないでしょうね」
『して、それが如何しましたかな？　組織的犯罪という事であればそれに合わせた対応をとなりますが、単なる誘拐、人身売買とは別のものを懸念しておられるように思えますな』
　ベルナルドの訝しむような声に、カイは小さくため息をついて一つの資料を送る。それは彼がノーティス達から見せられたファイルの写しであり、その内容に思い当たる点があったのか通信の向こうから息を飲む音が聞こえた。
『これは……』
「ええ、『ギア細胞と思われる何か』の適合者リストです。ブラッカード社のロゴが入っていた事から、ヒュドラ事件『白銀の迅雷』におけるブラッカード社によるヴィタエの人体実験並びにヒュドラタイプの覚醒、交戦および当該地区での最終解決策（ラスト・リゾート）発動を含めた一連の事件の総称。この事件によりブラッカード社は解体され、研究施設のあったヒュドラ封印地点の周囲は殺界の発生圏となり、あらゆる生命も立

ち入る事が許されない場所となった。の関係者が裏に居ると考えられます」
『しかし、あの事件での研究員の生存者は居なかったと記憶しておりますが……ほとんどが死亡、行方不明者に関しても殺界の発生範囲や研究施設の状況から生存は絶望的だと』
「ですが、シーバスが持ち出したはずの研究データが行方不明になっていたことも確かです。これがその時の物と同一かは不明ですが、どちらにせよあまり悠長にはしていられませんね」
『……そのようですな。こちらでも今一度、あの事件での行方不明者を洗ってみましょう』
「お願いします」
　通信の切れたメダルを懐にしまい、カイは空になったティーカップを机に置いて席を立つ。残された食器類を片付けながら、扉に向かって行く男を引き留めるでもなく店員はどこへ行くのかと問いかける。
　すると彼は、日常会話の続きでもするかのように「捜査の再開」を意味する回答を返した。
「……私の方でも少し、確認しておきたいことがあります。これで黒幕が明らかになるとまでは思いませんが、何かしらのヒントは掴めるはずです」
「確認、ですか」
「ええ。少し時間は掛かりましたが、どうやら任せていた調査が済んだようです」
「ではまた。事件が終わったらまた来てくださいね、新しい茶葉が入りましたし、あの子にも紅茶の良さを教えてあげないと」
「そうですね……彼女らの安全のためでもあるとはいえ、この状況は長く続けられるものでもありません。一刻も早く黒幕を突き止めなくては」
　そうして店員との話を終えたカイは、そのまま伸ばした右手でドアノブを握りしめる。開く扉と蝶番が立てる音を聞きながら、残された彼女は薄曇りの空の色に溶けてゆく背中を見送った。
　喫茶店を出たカイが初めに向かったのは、人気のない路地裏。周囲

に動くものがない事を一通り確認した後、彼は右手の人差し指を耳の側へと近づける。すると、瞬く間にその指先を中心とした魔法陣が浮かび上がり、それは音の波を拾うように伸縮を始めた。
「お待たせしました、状況は？」
『カイ様の読み通りでした。いくつか不詳（ネームレス）として処理されていたものもありますが、『ジェイムス』という名の賞金稼ぎが当該人物らの懸賞金を獲得しています』
「その賞金稼ぎの足取りは掴めましたか」
『いえ、申し訳ありません……ですが興味深い事実が判明しました』
どこか喜色を滲ませる部下の声に、逸る気持ちを抑えてカイは続きを促す。続く彼の言葉が、何かしらの手がかりになれば良いと思い、そしてそれが勾留中のノーティスやブリジットらの身を自由にする一手であらん事を願いながら。
『該当する賞金首が全て殺害済み、という形で討伐記録が出ているのはご存知かと思いますが、そのどれもが素性の判別が困難なほどの損傷を受けており、中には強力な炎により焼き払われたものもありました。それからもう一つ、あの広場での事件以後、ここ数日近郊で身元不明者の焼死体が複数発見されています』
「……照合はどうやって」
胸中に引っかき傷を残したある単語を務めて意識から外し、カイはさらに続けて問う。
『全て生体法紋によるものです』
「なるほど……生体法紋照合をどのようにして掻い潜ったのかは分かりませんが、そのジェイムスという男が今回の事件の首謀者、ないし共犯者である可能性は高いでしょう。貴方は引き続きその賞金稼ぎの足取りを追ってください」
『では、カイ様は』
部下の声に答えたのは沈黙。そして、考え事をしている様子のカイを待っていた男の耳に、あまりに長く感じる数十秒という時間を経て答えは返ってきた。大部分の不愉快さと、ごくごく一部にほんの少しだけ潜む『ひょっとしたら』という不信感に彩られた、若き長官の言

いよどむ声が。
「私はその身元不明死体の調査を。……『強力な炎』に一つ、心当たりがあります。いささか早計かとは思いますが、これから起こり得る事態を考えれば少しでも情報は欲しい」
『了解しました。現在まで確認できた討伐済み対象の資料はお送りしておきます。では、ご幸運を』
　通信が途絶え、手持無沙汰となった右手を見つめ、強く握り込む。賞金首や賞金稼ぎの事であるならば、それはキャリアが長く戦場に身を置き続けている同業者（賞金稼ぎ）に聞くのが最も信頼度が高く、そして何より手っ取り早い。
　だが、その男の行方をカイは知らず、そしてその男自身を、聖騎士団に伝わる神器を奪って逃げたその男を、カイは好ましく思ってはいなかった。
「これがヒュドラ事件の残滓だとするならば、あの男もこの街に居るはず。何か知っていればいいが……」

「暇だね」
「……そうですね」
　窓から見える月明りを眺め、ノーティスは呟く。幾重もの魔法陣を吐き出しては消すラジオの音声、それを子守歌代わりにして眠るクリスの側に腰かけていたブリジットは、誰へと向けた訳でもないその言葉におざなりな同意を返す。
　あの後も幾度かカイから連絡はあったものの、結局すぐに自由の身となれるほどの進展は得られず、居場所を突き止めた敵対者が襲い来るということもなく、彼女らの置かれた状況を示すのに『退屈』という二文字は不本意ではあるが最適な表現でもあった。
「ブリジットって、どうして賞金稼ぎやってるの？　その感じだと、そうしないと生きられないとか、そんなに切羽詰まった理由も目的もないんでしょ？」
　だから、ノーティスは起きている少女の方へ向かって問いかける。誰に聞いても、誰が語っても、おおよそ通り一遍の内容が返ってくる

ばかりの問い。しかし、彼女の答えは、一般的な誰かとは少しだけ事情が違っていた。
「ええ、まあ、絶対に賞金稼ぎじゃないといけない、っていう訳じゃないんです。ただ、少し事情がありまして」
「事情？」
「はい。だから、ウチ自身の手で大金を手に入れたい、って」
「……ああ」
つまり、それがディズィーという史上最高額の賞金首に繋がったわけか。そう得心したノーティスは、一度通り過ぎた話題へと立ち返る。
「で、賞金が解除されてる事に気付かずディズィーを追いかけてた、と」
「……お恥ずかしい話ですが」
食うに困っていた訳ではないにもかかわらず、大金が必要になるような彼女の『事情』に興味がないわけではなかったが、少女の無意識がそこに踏み込むことを抑制させた。
彼女の事情に深く立ち入るほど親密でもなければ、そんなことを気に掛ける義理も道理も存在しないのだと。
そのため少女はそこで話を打ち切り、再び窓の外へと視線を向けるが、それが拙かった。
「ええと、聞きそびれてたんですけど、ノーティスさんとカイさんってどういうご関係なんですか？」
「なんで？」
「いえ、その……お二人のやり取りを見てたら気になって」
ブリジットの言葉にさっきの事か、と思い直し少し考え込む。どうあっても隠し通さなければならないというわけではないが、とはいえ自身の身の上を考えても、あまり掘り下げたい話ではないからだ。不思議そうに首を傾げるブリジットを横目で見、やがて考えがまとまったのか彼女はゆっくりとした動きで振り返る。
「……私も小さいころ聖騎士団に居て、あの人はその時の団長だったってだけの話だよ」

「それだけ、ですか」
「それだけ。それ以外に何があるってのよ」
「えっ、でも」
ブリジットが迂闊にも口にしてしまった単語を、彼女は一度たりとも忘れたことはなかった。その言葉は、自分をこれ以上ないほど明確に定義する言葉であり、同時に、誰であってもどうしようもない事実を、研ぎ澄まされたナイフのように喉元へ突きつける言葉であったのだから。
目の前にいる少女を糾弾する筋合いがない事も、彼女の疑問が至極当然のものであることも重々承知しているし、ノーティス自身は、これといってブリジットを責め立てるつもりはなかった。
だが、ただ自身の手のひらを刺す痛みと、自身の失言や突然頬を張ったノーティスの行動に、愕然とした表情を浮かべただ痛みと後悔にその瞳を染める少女の顔を見ることが、なぜだか酷く悲しく思えた。
化物で、悪かったわね。
「……これ、借りていくよ」
ブリジットの返事も待たず、少女はテーブルに置いたままのファイルをバッグへとしまい込む。
「待ってください、ウチは」
「ちょっと頭冷やしてくる」
呼び止める言葉も謝罪も口にする間は与えられず、そのまま彼女は扉の向こうへと姿を消してしまった。
寝息だけが聞こえる部屋に一人取り残され、追いかけるべきかと逡巡して諦めたように首を振る。幾らなんでも、この状況下で無防備な少女を一人置いて離れる方が悪手に決まっていると。
「……そういうつもりで言ったんじゃないんです」
自分の身が狙われていた事への気疲れからか、ずっと眠り続けている少女を起こしてしまわぬよう、ブリジットは小さなため息を吐いてベッドへとその身を預けた。やがて微睡みに溶けてゆく意識の中で、一つの疑問がふと浮かび上がる。

拘留中という立場であるなら、振りとはいえ監視役の一人や二人はこの部屋の周囲に付けられていてもおかしくないはずだと。なのに、彼女は物音一つ立てること無くこの部屋を立ち去り、今に至るまで静けさが保たれているのだ。

「……あれ？」

その疑問が、一つの不安を伴う確信に変わるまで、そう長い時間は必要としなかった。

「……テメエか」

「……見つけたぞ、ソル」

それとほぼ時を同じくする時刻。街外れの酒場の扉を開けて出てきた赤いジャケットの男は、目の前で立ち止まった男の姿を見て、これ見よがしに舌打ちをする。どこから嗅ぎ付けたのか、どういった目的で立ちはだかるのか、それによっては厄介事になるのが目に見えていたからだ。

「ったく、どうやって嗅ぎ付けやがった」

「お前の行動は目立ちすぎる。ここ数日の身元不明者殺害事件、その発生現場を繋げばそれで終わりだ。この街に何の用だ」

言いながら、二人は少しずつ建物から、市街から距離を離してゆく。まるでこの後に起こることを双方が理解しているかのように。

「……テメエには関係ねえ」

「一連の誘拐事件は私の管轄だ、余計な行動は謹んでもらおうか」

そう言って翻した封雷剣と、合わせてソルが振りかぶった神器、封炎剣が激突し、一陣の閃光を放つ。弾かれた剣をそれぞれに構え、二人は小さく息を吐いた。

「ヒュドラ事件の借りがまだだったな」

「……うざってえ！」

そう吐き捨てながら封炎剣を地面に突き刺し、自身の法力を剣へと練り込む。増幅剤としてその力を何倍にも高めた剣は地面を砕き、多数の火柱をその切っ先から放つ。凄まじい速度でカイへと向かってくるそれを躱し、お返しと言わんばかりに青白い光が雷鳴を伴って疾

走る。
　だがその雷撃もソルの身を貫くことはかなわず、そのまま虚空へと散って消えた。そして、霧散した雷を視認できる頃には既に、赤い手甲はカイの眼前へと迫ってきていた。
「くっ！……流石だな」
「官職がこんな所で油売ってる場合か？　とっとと仕事に戻んな、坊や」
「そうしたいのは山々だが、今回の事件に関して二三聞きたいことがある」
「あん？」
「ジェイムスという賞金稼ぎに心当たりはあるか」
　カイの問いかけに、面倒くさそうに頭を掻きながら男は答える。
「ねえな。そいつがどうした」
「いや、お前には関係のないことだ。……それからもう一つ」
「何だ？」
　鍔鳴りとともに、一際大きな雷鳴が轟く。
「貴様がここ数日で殺した賞金首について、知っていることを洗いざらい話してもらおう！」
「やれやれだぜ……！」
　直後、再び二人の剣がぶつかり合い轟音を響かせる。そのまま封炎剣を弾き返して切り払うカイの剣閃を避け、右の拳をアッパーの体勢で振り抜く。咄嗟に下げた両腕でその打撃を受け止め、距離を離すようにカイは左足に力を込めて蹴り出す。
　一気に飛び退ったカイを追い打つ様に封炎剣が炎を放ち、雷撃がそれらを撃ち貫く。
　その後も幾度もの剣戟を重ね、一際激しい衝突と共に二人の距離が大きく離れた時、彼等の構える神器がかつてない程の法力を発揮した。
「セイクリッドエッジ！←↘↓↙←↘↓＋Ｐ、テンションゲージ５０％使用。雷によって形作られた大きな刃を飛ばす覚醒必殺技。ＥＸ版終端に近い高速飛翔。」

「サーベイジファング！←↘→←↘→＋Ｐ、ＥＸ限定、テンションゲージ５０％使用。ナパームデスのエフェクトと同形状の火柱をガンフレイムのモーションから放つ。効果範囲が非常に広い。」
類稀なる精度によって練り上げられた迅雷の剣は、その力を以って大気を容易く切り裂き。
ただひたすら圧倒的な力によって生まれた焔の柱は、その力を以って大地を真っ黒な焦土に変えた。
強大な力の衝突と、その余波が過ぎ去った後に残ったのは、草木一本すら残らず焼き消えた大地と、息を切らして膝を付くカイと、そしてまるで疲れなど見せずに平然と立つソルの姿だけであった。
「くそっ……！」
「テメエと遊んでるほど暇じゃねえんだ、いい加減失せろ」
「そうは、行かない……この事件にはギアが絡んでいる。罪のない人々が、放っておけばまた大勢命を失う事になりかねないんだ」
「……んだと？　ならあの連中も関係者って訳か、面倒臭え」
「！　何か知っているんだな」
思わず顔を上げたカイの言葉に、少し思考を巡らせる。ここ最近彼が狙っていた賞金首は、そのどれもが既に討伐記録が存在する、いわば死んでいる筈の者ばかりだった。一人や二人であれば誤討伐とも考えられるが、複数人が短い期間で見つかった事を考えれば、何かしらの方法で照合を誤魔化すことが出来るか、若しくは内部に協力者が居るか、のどちらかとなる。
そして、本人はともかく、ギルドの元締めである終戦管理局と繋がっている警察機構に所属している人間にこの情報を与えていいものか、男は迷った末に簡潔な言葉で答えた。
「リーガルって野郎を探せ、ブラッカード社の人間だ」
「……その男が鍵を握っていると？」
「さあな。殺した連中が吐いた名前ってだけだ」
もうこれ以上話すことはない、と言いたげに封炎剣を提げて街の中心部方面へと向かい歩いてゆこうとするソルを呼び止めようとした時、不意にカイの胸元からベルの音が響いた。

「どうしました？」
『敵襲、です。薬物かガスの類による不意打ちを受けたため数は不明。……間一髪で気付いたらしく、ブリジット、クリス両名の身柄は隠れていた所を確保できましたが……』
「……まさか」
　青ざめたカイの様子に、不審に思ったソルが立ち止まり振り返る。そして、三人の警護を任せていた部下の言葉を継いだのは、ブリジットの悲痛な声だった。
『ノーティスさんが行方を……きゃあっ!?』
「……くそっ！」

　月明かりが木々の隙間から覗き、林の中を照らす。少女が立ち止まると、その周囲の影も、ピタリと動きを止めてしまった。距離を詰めるでも離れるでもなく動きを見せない何かを見るでも無く、その少女はポツリとその口を開く。
「……逃げ回るのって、あんまり性に合わないんだよね」
「んだよ、気付いてたのか」
　草木を揺らし、ノーティスの声に答えるように二つの人影が姿を現す。その顔に見覚えはあったのだが、答え合わせをする気分にはとてもじゃないがなれなかった。
　故に、おざなりな返答をするに止め、彼女はバッグを地面に置く。
「この辺を担当してた連中が逃したクリスってガキを探してたんだが、まさかこんな所で別の上玉を引くとはな」
「へえ、クリスを探してるんだ。なんで？」
「そのガキの居場所を知ってんだったら答えてやらなくもないぜ？」
「知ってるよ？」
　ノーティスの言葉に、ビンゴ、と下卑た笑い声が答える。懐から二人組みが取り出したナイフと、そのだらしなく緩み、狂気を孕んだ表情を見比べ。少女は小さく笑った。別に聞く必要もないけど聞いてあげる、と。
「別に大したことじゃねえよ。ただ、とある野郎に連れて来いって頼

まれてるだけだからな。まあその前にちょっと楽しませてもらうけどよ？」
「そんじゃあ嬢ちゃん、そのクリスってガキのところまで案内してくれるか？　そうすりゃ命は助けてやっても良いぞ？」
「……ふーん、じゃ、ついて来てよ」
　聞き飽きた常套句。そして、目を見れば分かる。この男達がその発言を守るつもりなど毛頭ないことも、守った所で、普通の少女からすれば『死んだほうがマシ』と思う結果が待っているだけだということも。
　だが、今夜は相手が悪かった。
　闇夜に紛れて直ぐ傍まで寄ってきた少女は、そのまま右手で男の胸部に拳を突き入れたのだ。肋骨が折れ、その奥にある臓器に食い込む手応えを感じて満足したのか、一度引いたその腕で、喉笛を胡桃でも割るようにあっさりと砕いてしまう。
　そして、面倒臭そうに振り抜かれた足が、もう一人の男のスネを折り曲げ、立ち上がる力を一息の内に奪い去る。
「大声出さないでね。で、誰の命令？」
「ひっ……!?」
「私今最っ高に機嫌悪いから、さっさと教えてくれない？」
　悲鳴と共に返ってきたのは、リーガルという名前と、受け渡し場所として指定されたという廃病院の場所。その病院は以前、ブラッカード社の関係会社が資金援助を行っており、ヒュドラ事件の際にヴィタエの成分発覚などの煽りを受けて利用者が激減。その後様々な要因によって廃業となり、また殺界『白銀の迅雷』に登場。最終解決策（ラスト・リゾート）と呼ばれる法力兵器によって発生する空間であり、結界によって封じられた一定空間の情報を書き換え、そこに存在する全ての生命を文字通り抹殺する。半減期に二千年もの時を要すること、敵味方の区別なく殺界が作用すること等から使用は極めて限定的。の発生圏からそう遠くない場所にあるため、事件が終息した後も人が寄り付くことが無かった場所だ。
　好んで人が近寄ることのない病院跡。なるほど、人目を避けたい連

中には好都合で、ブラッカード社の所有していた施設という事もあって研究に必要な機材などの融通も利くだろう。組織立って行動が出来るわけでも無いのだから、実験体の移送の手間も省けるのは大きなメリットである。

「……とはいえ結構歩く事になるか。転移法術ファウスト先生が『前（ｏｒ後ろｏｒ上）から行きますよ』などで行使している法術。簡単に使っているように見えて使用難度は数多くある法術の中でも屈指のもので、状況次第では転移先に出た途端に遥か彼方へと吹き飛ばされてしまう等といった危険性を孕む。シリーズ中でも使用しているのはイノ、イズナ、ファウスト、ベッドマン、カイなど極一部の人物ないし法力のエキスパートのみである。が安定すれば楽なんだけどな」

そう悪態をつきながら懐から取り出したのは小さなメダル。聖騎士団員に配られていた万能章であり、こんな物でも持っていれば役に立つこともあるだろう、とずっと持ち歩いていた物だ。

若干汚れの滲んでいたそれを手で軽く払い、何時以来だろうか、と考えながら通信機能を開く。そしてカイへと連絡を取ろうとした矢先に聞こえてきたのは、無断で部屋を抜けだした少女への叱責と、彼女が不在の間にクリスが攫われた、という最悪の知らせだった。

Chapter 3 ”Cloaks” Part A

Chapter 03
Cloaks
A

呆然と、と形容するのが最も近しいであろう立ち姿の少女。彼女の心情をあざ笑うかのように、野犬の遠吠えが耳障りな風の音を伴って木々を揺らしている。

彼女の気分は最悪に近かった。一言で表すなら文字通りの油断からくる失態であり、その結果を引き起こした原因は自身の独断行動にあるのだから。

たとえそれが、自らの出自に関わる内容で、容易く触れられたくはない事柄であったとしても。独断行動に至った理由は、ノーティスの自責を紛らわせる材料にはなりえなかった。

クリスを狙っていた人物の潜伏先と思われる場所が判明した、という成果報告を打ち消すようなカイの苛立ちを隠しきれていない声が耳孔を叩く。反論も憎まれ口も披露する余裕は一切なく、彼の事務的な確認や指示を、鬱屈とした表情のままノーティスはただ聞いていた。

「……それで、クリスが攫われてからどれくらい経ってるんですか」

『まもなく二十分、といったところだ。今のところ検問に引っかかった様子はないが、貴方の掴んだ廃病院の場所から考えても、相手は何かしらの輸送手段を用意していると考えていい』

聞いているのかいないのか、無言のままメダルをじっと見つめる少女の頬を冷たい夜風が撫でる。状況が状況だけに、これから彼女がとり得る行動はそう多くなく、またこの事態の緊急性や、クリスが攫われてしまったという過失をどこに求めるかを考えれば、自ずとノー

ティスが選ぶことのできる選択肢は一つに絞られてしまった。
「団長はそのままクリスの捜索をお願いします」
『貴方は』
「廃病院に向かいます。……そっちに戻ってから行くより格段に早いですし」
『待て、まだ廃病院が拠点と決まったわけでは』
「決まってなくても調べなきゃいけないのは一緒でしょ！」
言うが早いか、カイの返事を待つことなく彼女はメダルをバッグの中に放り込み、その足で廃病院を目指し駆け出す。石畳の道を走り抜け、やがて舗装されておらず荒れたままの砂利道へと足を踏み入れてもなお、夜の闇を裂くように少女は走り続ける。
制止するように鳴り続けるメダルの呼出音を、努めて耳に入れないようにしながら。

「やはり、出ようともしないか」
ノーティス達が滞在していた宿の一室。一向に呼出音が鳴りやまないメダルを諦めたように握り締め、カイは小さくため息を吐いた。
全く予想だにしていなかったという訳ではないが、しかし彼が考えていた以上にノーティスは思い詰めているような口振りをしており、そして普段であれば耳を傾けているような忠言すら無視するほどに、彼女の思考は短絡化していたのだ。
気を取り直してカイが顔を上げれば、そこには不安そうな表情を浮かべ自身の傷を手当てしているブリジットと、知った名前が聞こえた事や、ギア絡みの事件である可能性が高いことなどを理由に、半ば強制的に同行させられたソルの姿があった。
「……ったく、子守も碌にできねえのか坊やは」
「非常識が服を着て歩いているような人間に言われたくはないな。それに、今はそんな話をしている場合でもないだろう」
あからさまに挑発するような言葉遣いと語気につい荒げそうになる声を抑えて、カイは正面で座り込むブリジットへと発言を促す。外に待機させている部下や、ブリジットらを襲った者たちの情報をわず

かでも得られればという期待がそこにはあった。
「その、すみません。クリスさんを守りきれなくて……それにノーティスさんも」
「気に病む必要はありません、大事なのはこれからどう対応するかです。……ですが事態は急を要する。貴方達を襲った者についてなにか、気付いたことがあれば教えていただけますか？」
「それなんですが、ウチも不意を突かれたせいでちゃんとは見れてないんです。たぶん賞金首の人達だったとは思うんですが……」
　どんどんと小さく消えゆくブリジットの言葉に渋い顔をするカイとソル。考え込むように小さく唸り声を上げるカイを見て、やがて何かを思い出したのか少女は微かな声を上げる。何事かと問いかけるカイに対して、直前に黙り込んでしまっていたブリジットが、やがて口にしたのは小さな手がかりであった。
「……一人だけ、賞金首のリストでは見た事のない人がいました。たぶん、その人がリーダー格なんだと思います」
「顔や体格などを可能な限りでいいので思い出してください。人相書きを手配します。それとソル、お前にはノーティスの追跡と廃病院の調査をしてもらう」
「あぁ？　何だって俺がそんな事しなきゃなんねえんだ」
「ブリジットさんにはこのまま此処で人相書きに協力してもらう必要がある、それに彼女を止めるとなると、適任なのはお前位しかいないだろう」
「それこそテメエでやりゃあ良いだろうが」
　ソルの呆れたような物言いに首を振り、カイは鋭い視線を男へと向ける。それを気にする事もなく肩を竦めるソルに対して、やがて諦めたように大きく息を吐く。
「私では警察機構が嗅ぎ付けましたと宣言しているようなものだ。それに万一彼女が本気で抵抗した場合、最悪殺害を考えなければならない。ああまで言ったんだ、お前なら子守くらい簡単なものなのだろう？」
「チッ……ちったあ言うようになったな」

それだけ言い捨てて愛用の剣を片手に部屋を立ち去るソルを見送り、カイは改めてブリジットと正対する。不安そうな表情を浮かべて扉とカイとを見比べていたブリジットはやがて、疑念を込めた視線をカイに向けて問いかけた。本当に彼一人で大丈夫なのか、凄腕の賞金稼ぎとは聞いているがいったい何者なのか、などの質問に彼はすっと目を細めて答える。

ノーティス同様に聖騎士団に所属していた人間であること。ギアを率先して狩る賞金稼ぎであること。そして、あのジャスティスを破壊し、ディズィーを制圧した本人であるということを。

「ま、待ってください！　それだとノーティスさんが」

「二人とも同じ聖騎士団の人間であったことには変わりありません。不安がないとは言いませんが、奴が上手くノーティスを止めてくれることを祈りましょう」

そうじゃない、とブリジットは首を振る。意図が分らず首を捻るカイだったが、彼女の表情にただならぬものを感じ、そして過剰ともいえる懸念の理由に気付く。そして、そこから繋がるように、ノーティスがどこか思い詰めたような反応しか示さなかった原因に思い至ってしまった。

「ブリジットさん、まさか」

「……ウチ、ギアがどうして聖騎士団に、って……ごめんなさい」

「……」

ひょっとしたら、と考えた内容が現実のものであったことに、カイは言葉を失う。目の前で俯くブリジットの姿を見ても、ディズィーから友人として彼女の名前が挙がったことから考えても、その言葉は決して悪意から来るものではなかったのだろう。

だが、相手も、聞き方も悪かった。

『ギアは全人類の仇敵である』という前提条件を忘れ、彼女はその持ち前の楽天的思考から、あるいは単純な厚意から、ノーティスの過去へ触れようとしたのだろう。話を聞くことくらいはできるかもしれない、と。

だが、過去や自身の素性に触れる事そのものを嫌う者にとって、ブ

リジットの振る舞いは不愉快と認識されても不自然ではないものだった。
「貴方が悪意を持って言ったのではないことは、恐らくノーティスも分かっているでしょう。ただ、彼女の方から口を開かない限りは、貴方からは極力その話に触れない方がいい」
「カイさんは、ノーティスさんの事を……？」
「私も詳しくは知りませんが、クリフ団長が彼女を連れてきた時に伝えられました。壊滅した街で独り生きていられたのには理由がある、そしてそれは身寄りのいない子供が背負うには残酷すぎるものだ、と」
「……」
「ですが、私はあの時それに気付いてしまう訳にはいかなかった」
　ギアは人類の罪そのものであり、そして力を持たぬ者はその圧倒的な暴力に対してあまりにも簡単にその膝を折ってしまう。ましてや十六、十七といった年の頃の娘が膝を屈さず、頭を垂れずに生きて行けることなどまず有り得ないし、仮にそれを成したというのであればその少女は。
「一度気付いてしまえば。人類の最後の希望として存在した聖騎士団に、人類の仇敵たるギアが居ると知れてしまえば……人々は、災厄に抗う力を失ってしまう事になりかねない」
「だから、見ないふりをしたんですか」
「……お恥ずかしい話ですが、ノーティスの素性に意識を向けることができたのは、彼女が聖騎士団を脱退し、聖戦が終わってからの事でした。それに彼女と話をすることも避けてしまっていた。私の未熟さが問題を先送りにしてしまったとも言えますね」
「……すみません、不躾なことを聞いちゃって。でも、それだとなおさらソルさんを止めなきゃ、ノーティスさんが」
　申し訳なさそうに頭を下げたブリジットが再び顔を上げ、ソルを呼び戻すようにカイに詰め寄る。ソルがギアを率先して殺す賞金首で、ノーティスがギアなのであれば、それは討伐者と討伐対象の関係に他ならない、と。

だがブリジットの目を見つめるカイの表情は穏やかなもので、まるで心配いらないと言わんばかりに、ゆっくりと目線を少女に合わせて説く。
「私も以前は誤解していましたが、奴はそこまで見境の無い男ではありませんよ」
「でも」
「言ったでしょう、ディズィーさんを制圧したのもソルだと」
カイが強調した言葉の意味は、すぐに分かった。史上最高額の賞金首を、最強最悪のギア『ジャスティス』以来の自我を持つギアを、あの男は破壊することなく見逃したのだ。そして、まだ晴れないブリジットの不安を打ち払うかのように、青年は笑顔を浮かべたのだった。
「彼女の事はソルに任せましょう。その間に我々もやるべき事があります」
カイが手に持っていたメダルが、小さな輝きを放った。

「ここがそう、かな。病院だけかと思ってたけど、町も似たようなもんね」
小さくため息を吐き、ゴーストタウンとなった町並みを見渡して少女は口を開く。直接的な被害は受けなかったとはいえ、百万都市を平然と壊滅させ得るメガデス級ギアの覚醒が身近で起こっては無理のない事だろうとも考えかけたが、ある違和感がゆっくりと鎌首をもたげる。
その正体に感づく前に、ふと正面で微かに浮かぶ人影がノーティスの思考を寸断させた。
「……？　ちょっと、聞きたいことがあるんだけど」
ふらふらと行く先も定まらないまま歩く人影に近付き、少女はその人物を呼び止めようと声をかける。だが、こちらの声が聞こえていないのか、人影は声に反応することもなくそのままどこかを目指して歩き続けている。それに明らかな苛立ちを浮かべ、足早にその人影を追いかけ、乱暴に肩を掴んで振り向かせた。

だが、この前に気付くべきだったのだ。
ゴーストタウンに人がいる事の異様さに。
そして、殺界の発生圏に近いというだけで、メガデス級ギアの脅威が消えた地から人々が姿を消したという事の異常さに。
「なっ……!?」
「う……が、ァ……」
脇腹を貫く激痛、目の前でこちらを覗き込むように首を傾げる、生気の無い顔。視線の定まらない瞳に不気味さを覚える前に、体が反射的に防衛行動を起こす。痛みを無視して拳を握りこみ、力任せに人影の腹部を、顔面を強く殴打する。
目論見通りに体勢を崩したそれを蹴り?がし、５ｍほどの距離をとったところで一息。無意識の内に肩越しに背中へ回した右手が空を掴んだことに気付き、少女は思わず舌打ちをこぼした。
「中型相手に素手か……低級とはいえ剣置いてきたのは失敗だったかな」
唸り声を上げてこちらを睨む人型の何か。何時の間にやら二対となった双眸があちこちに視線を巡らせ、やがてこちらを四つすべての瞳が射貫く。そしてどう大袈裟に見積もっても成人男性のそれでしかなかった四肢は、みるみる内に膨張して筋骨隆々の物と化す。そして二回りほど体積を増し、人型と呼ぶことすらおこがましい姿となったそれは、腹の底を蹴りつけるような咆哮を上げた。
「ただまあ悪いんだけど、アンタ（量産型）より私（自律型）の方が上等なんだよね」
無意識の内に添えていた左手を離せば、脇腹にあった刺し傷がみるみる内に塞がってゆく。そして、まるで初めから傷などなかったかのように上半身を軽く捻り、ノーティスはがくん、と腰を落としありったけの力を両脚に込めて大地を蹴った。
繰り出されるギアの腕を、その腕から致命的な一撃を狙って飛び出す鋭い爪を掻い潜り、右の拳を軽く握る。瞬く間に距離を１ｍ未満にまで詰め、近付かれると同時に現れた一対の副腕が迎撃のために得物を振り上げた瞬間。
鋭い風切り音とともに打ち上げられた拳が、化け物の腹部に大きな

穴を開けた。
「……ちっ、直接指揮してる個体が分かれば早かったんだけど、流石にそこまで簡単じゃないか」
腹部に受けた大きな傷によって動きが鈍った隙を少女は迷いなく突き、剣状に形を変えた腕を振るってその首を切り落とす。そして続けざまに心臓を打ち貫き、完全に息絶えたことを確認してノーティスは戦闘態勢を解く。地面に落ちたそれを拾い上げてしばらく考え込んだ後、彼女は大きくため息を吐いた。
「生体法紋の接近に反応して攻撃、戦闘行動に入るだけの量産型ギアね。こんなのがいるならそりゃ人も寄り付かないわけだわ。となるとこの先の病院跡もどうやら当たりっぽい訳だけど、……？」
自身が呟いた言葉に違和感を覚え、改めて物言わぬ肉塊となったそれに視線を向ける。この姿になる直前、これがこちらに向けたあの顔に見覚えはないだろうか、と。しばらく考えた所で彼女は思い出す。ブリジットらを助けに割って入った時、自分が打ち倒した賞金首の中の一人に、この死体と同じような顔つきの男が居たはずだ。
「……なるほどね」
簡単な命令を実行するだけの低級ギアとはいえ、これほどの外見の模倣が可能なのであれば、体の一部分、それも外見のみを複製することは難しくはないのだろう。
そうすれば、賞金首の頭部などをギア細胞と本人の体組織によって作り上げ、出来上がった物体をそれらしい攻撃で破壊してしまえば『討伐された賞金首の体の一部』と偽ることが可能なのだ。
クローン技術と呼ばれるそれは、単なる義手義足などとは違い、個人の細胞を複製してまったく同一の物を作り上げようとする技術であり、ブラックテックとも呼ばれる科学技術の集合体であるゆえに忌避され、忘れられんとしていたものである。
恐らく彼らは、そうして作り上げた身代わりによって手配をすり抜け、今回のような誘拐事件を繰り返し起こしていたのだろう。
周到な下準備の上で行われていたであろう行為がどのようなものであるのか、実際にその標的となった者たちの末路は。好むと好まざ

るとにかかわらず思考は泥沼へとはまり込み、やがて強さを増した憎悪が法力の余波という形を得て打ち捨てられた死体を地表諸共引き裂く。
「こんな事なら、首突っ込むんじゃなかったよ」
ありったけの不快感を乗せた言葉は、風に乗って夜の帳へと溶けてゆくのであった。

ベルナルド様。部下からそう呼ばれた男性が、手にしていた資料より視線を外して声の方へと振り向く。その瞳はいささか疲れたような色を浮かべておったが、それもそのはず、とうに解決を迎えたと思われていたはずのヒュドラ事件がまったく別の形で再び燻り始めていると言われたからに他ならない。
夜を並べて進められていた調査や、ベルナルドらの働きもあって標的の痕跡や足がかりは得られつつあったものの、やはり即応性の求められる事態が続けば少しの疲労も出ようものである。
「こちらが一か月以内の未解決誘拐事件の一覧です。発生地点を地図にもまとめておりますので、おおよその行動範囲はこれで掴めるのではないかと」
部下から手渡された資料を礼と共に受け取り、記載されている情報を値踏みするように視線を滑らせる。やがて目的となる情報を見つけたか、わざとらしいため息とともに男性は凝り固まった体を解し始めた。その姿を見た部下たちの表情が、にわかに安堵の色を浮かべる。
「それから、ようやく賞金稼ぎの足取りが掴めました。ジェイムスと名乗っていた男の素性が割れた、と言う方が正確ですが……」
「ほう？」
続けて部下が差し出した資料を検め、ベルナルドの白く染まった眉が歪に跳ね上がる。その不愉快そうな表情が元に戻ると間もなく、カイの焦りを孕んだ声がスピーカーを通じて彼らのもとに届いた。
『ベルナルド、聞こえますか』
「ええ、ここに。貴方様より頼まれていた調べごとが一通り片付いた

所です、これより資料を纏めて」
『そちらは後程確認します、それよりも至急頼みたいことがあります』
「……高くつきますが、よろしいですかな」
　カイの焦りからおおよその状況を汲み取ったか、ベルナルドの眉間にしわが増え、遅れてカイと同時にため息が口をついて零れる。やがて諦めたようにカイは苦笑いとともに答えた。いつぞやのコニャックを今度こそ贈ろう、と。
　まだ手を付けていなかったのですかと冗談交じりに答えながら、彼の要求を随時メモとして書き起こし、部下の内数人を呼びつけてそれぞれに捜査、カイの応援を割り振ってゆく。
　そうして言伝られた生体法紋の追跡準備を完了し、今回ノーティスが起こした事件の被害者らが潜伏していたと思われる地点を目撃情報から割り出し、ソル達の向かった病院跡とは異なる地点が弾き出された後。礼を言って通信を切ろうとしたカイにベルナルドの声が突き刺さる。
「例の賞金稼ぎの件ですが、どうやら元ブラッカード社の研究者で間違いないようです」
『……手短に』
「ジェイムスというのは偽名でして本名はリーガル。２１８０年初頭に事故死というかたちでブラッカード社を除籍となっておりますが、遺体は当然ながら見つかっておりません。その後いくつかの偽名を用いて各地を転々としており、ここ半年の間にこちらに根を張ったのでしょうな」
『では、賞金首の遺体偽装もその男が』
「恐らくは。遺体の偽装や懸賞金の解除を餌に賞金首連中を抱え込んで、実験体を集めさせていたのでしょう。報告が上がっている身元不明死体の記録を見る限り、目立ち過ぎた者の処分なども行っていたようで」
　淡々と続く報告に、奥歯が無意識の内に軋むのが分かる。こみ上げる怒りを押しとどめ、自然と力の籠っていた拳を解き、小さな深呼吸の後カイは頭を下げた。

「ありがとうございます。私はブリジットさんと共に潜伏地点を探ってみます」
『それでは、御幸運を』
「……そちらこそ」
　通信を終えたカイが扉をくぐり部屋の中へと戻ってくる。入れ替わりで人相書きなどの作業を終えた部下が部屋の奥から歩いてくるところに敬礼をし、何点かの確認を済ませて男を室外へと送り出す。落ち着かない様子でベッドに腰かけていたブリジットは見知った姿に緊張が解けたか、跳ねるようにベッドから腰を上げてこちらへと顔を向けた。
「どうでした？」
「……犯人の潜伏地点の候補が病院以外にいくつか浮かび上がりました。ソルにはああ言いましたが、正直なところなりふり構っている場合ではありません」
「ええと、じゃあ」
「二人とは別行動になりますが、このまま我々も調査に向かいます」
　カイの言葉を受け、ブリジットは自身の身体や武器を検める。じっとしているのは性分ではないのだろう、先程までの重く沈んだ面持ちとは打って変わって、彼女の顔にはわずかながら高揚感が浮かんでいるのが見て取れた。
　不謹慎だと思う気持ちもないではなかったが、塞ぎ込んでしまって戦えないよりはずっといい。だから、彼もそれに答えるように踵を返す。
「時間に余裕があるとは思えません。急ぎましょう、カイさん」
「ええ」
　腰に下げた封雷剣の柄を、右手の指が撫ぜる。冷たい金属の感触が熱していた心を冷まさせ、波打っていた感情を平坦に均してゆく。足早に歩を進めるカイを追いかけ、横に並んだブリジットの目に映った横顔は、先程までの人の好い表情でも、聖騎士団や警察の人間としての責任感、正義感に溢れた表情でもなく。
「カイ、さん……もし、間に合わなかったら。彼らが取り返しのつかな

いことをしていたら、貴方は」
「取り返しのつかないことは既にしているでしょう。犯罪者に向ける慈悲などありません」
「……」
「殺しはしません。罪は、償われなくてはならないのですから」
ただ無感情にギアを屠っていたころの、ひたすらに冷たい目をしていた。

Chapter 3 ”Cloaks” Part B

Chapter 03
Cloaks
B

ガラス張りの扉が開かれ、踏み込んだ靴が大きく砂埃を舞い上げる。両手で目鼻や口を庇いつつ立ち止まり、落ち着いた後、一度周囲を見渡した少女はそのまま真っ暗な病院内へとその足を向けた。
「さて、と」
グローブの裾を軽く引き、二度握り拳を作って解く。そうして手の感触を確かめたノーティスは、打ち捨てられた空き缶や、瓶などのガラス片を砕く自身の足音を聞きながらエントランスへと歩みを進める。人の手が入っていないというには荒れていないような、そんな違和感を抱きながら周囲を見渡せば、かつて受付であっただろうカウンターに視線が留まる。
「……」
ゆっくりと歩を進めて近づいてみると、カウンターには厚く埃が積もっており、迂闊に手を触れようものならば、先程と同じように周囲に舞い上がってしまうだろうことが容易に想像できた。
しかしその様をよく見てみれば、暗くて気付き難かったが明らかに埃の薄まっている場所があり、そしてそれらは、人の手形や荷物、そして腰や背中を預けてたむろしていたのであろう、服の皺などに沿った形の段が形成されていた。
「人の出入りがあったのは間違いなさそう、なんだけど。どこから調べたものかな」
未だにざわめく感情を抑えるように、少女は小さくため息を吐く。検めてぐるりと周囲を見渡し、あるかどうかすら分からない手がかりを求めて少女は月明りの差し込む院内を探り始めた。

まず手を付けたのは、人の出入りが認められたカウンター周辺。入り口を探すことが面倒だったのか、右手を天板に着き、軽く地面を蹴りつけカウンターの内側へと少女はその身体を滑り込ませる。床や棚など、目につく範囲を一通り調べてみるが、手掛かりとなりそうなものは見つからず、ただ無作為に捨てられたゴミなどが増えていくばかり。やがて諦めたように首を振り、入った時と同じように抜け出した。

そうして同じような手順で当てもなく病室やエントランスを探ってゆくも、時間だけがただ無常に過ぎて行く。階段を上りながら思わず口をつく舌打ちをし、手掛かりらしい手掛かりもなくただ埃に塗れていく焦燥感からその足取りはだんだんと重くなってゆく。やがて屋上へと続く扉に手を掛けた辺りで、その足がぴたりと止まった。

「明かりも点かないし人の気配も碌にしない、埃の溜まり方からしてもそんなに時間は経ってない筈だしひょっとして地下があるのかも……」

そう考えるや否や階段を飛ばして駆け下り、再度エントランスまで戻ってきた辺りで、背筋が凍るような感覚が少女を支配する。ぱち、と火花の弾ける音に気付いたのと、ざり、と砂埃を踏み鳴らす音を聞いたのはほぼ同時であった。

恐る恐る振り返った先には、明らかな不機嫌さを滲ませ、封炎剣に炎を纏わせて此方を睨みつけて立ち止まるソルの姿が浮かんでいた。

「……ソル」

「肝試しは済んだか？」

「残念ながらまだなんだよね。先約があるから帰ってくれる？」

腹の底を蹴るような声に気圧されながらも、少女は不敵な笑みを浮かべる。相手の意図が分らない以上、自分の目的をむやみに知らせるのは躊躇われた。敵対者ではないが、決して味方と言えるほど気心の知れた相手ではないのだ。ましてや聖戦以後もギアを狩るために賞金稼ぎを続けている、などという噂を聞いてしまえば尚更気を許すことなどできない。

「俺が遊びに来た風に見えるか、クソガキ」

「見えないから言ったの。……軍神サマも暇じゃないでしょ？」
「まどろっこしいのは趣味じゃねえ」
わざとらしく男は首を鳴らし、そして剣を構えて吐き捨てた。
「選べ。道を開けるか、くたばるか」
「……どちらもお断りだね」

一方その頃、ブリジットを伴い宿を出たカイは、数か所ほどの寄り道を経て、ベルナルドより預かった資料を基にとある施設の付近まで来ていた。人目を誤魔化すように近くの食堂に入り、まだ人の疎らな壁際のテーブル席に二人腰掛ける。ウェイターが運んできた水をそれぞれ受け取り、飲み物の注文だけを手短に済ませて彼らは声を潜ませた。
「……あそこが？」
「ええ、表向きカジノとして運営されていたことから、ジール使用量の異常に気付けなかったのでしょうね。今回の主犯格と思しき人物の出入りも確認されています」
カイの言葉に引っかかりを覚えたか、ブリジットは小さく首を捻る。
「異常ですか？」
「ええ、もともと夜間の営業を主とする娯楽施設である以上、同規模の一般的商業施設と比較しても照明等に使うジール量は多いのですが」
「同じカジノとかと比べても多かったんですね」
「それもありますが、一番の理由は『昼夜を問わずに大規模のエネルギー使用が認められた』点です」
その言葉に少女はああ、と納得したように手を打つ。仮に人が住んでいたとしても、夜間営業型の娯楽施設が営業時間中と同等のエネルギー使用を昼間からずっと行っているとは思えない。であれば当然、営業時間外にも相応の規模の何かが動いていたと考えるのが自然である。
「……どうします？　クリスさんの事も心配ですし、すぐに踏み込んだ方が……」

「正面から身分を明かして踏み込んだところで、主犯に逃げられてしまうのが落ちでしょう。それにあくまで表向きは民営のカジノです、民間人も多い以上彼らを盾にされかねません」
「でも」
　周囲の様子を窺いながら話すカイは、ブリジットの焦る姿を気にする様子もなく手元のグラスをテーブルに戻す。やがてウェイターが運んできた紅茶を一息に飲み下し、彼はその腰を上げた。
「確かに、ベルナルドに要請を出しているとはいえ応援を待つ時間は惜しい。常套手段ではありますが、我々だけで動きましょう」
「は、はい」
　慌てて後を追うブリジットの前。濃紺のワイシャツ、淡いベージュのスラックスという私服姿に、ソードベルトを提げた男は、ポケットに入れていた財布から数枚の紙幣を取り出し、会計を済ませた後何事もなかったかのように口を開く。カジノも近いですし、少し遊んでいきませんか、と。
「……そうですね。ウチも興味あります」
「それは良かった」
　カイは小さく笑みを浮かべ、ブリジットを連れて目的の施設入口へと近づいてゆく。逸る気持ちを抑え、あくまで民間人である風を装って、そうして受付の目を誤魔化し、客の一人として人のひしめくフロア内に入ったあたりで罪悪感が首をもたげる。
　騙し討ちの様な手口を使う事にもいつの間にか慣れてしまっているな、と。
　この事件の遠因ともいえる、ブラッカード社によって行われた人体実験やそれに端を発するヒュドラの覚醒。
　そしてその直後に起こった『自我を持つギアとの接触』。それらの事件は、カイの心に少なからず変化を及ぼしていたのだ。
「誰かそれらしい人が見つかれば早いんですけど……カイさん？」
「ああいえ、何でもありません。……フロアの奥へ向かいましょう。下層階へ向かう階段や昇降機がどこかにあるはずです」
「わかりました、探してみましょう」

そうして二人は人の間を縫うようにフロアを歩き、手掛かりを探し始める。人々が口にする噂話を盗み聞き、時には直接話しかけ、なるべく怪しまれない様に気を配りながら、彼らはこのカジノの実態を朧気ながら掴もうとしていた。
「……やはり、ここで間違いないようです」
「そうみたいですね、サングラスや髪型を変えてますけど見覚えのある人が何人かいますし」
「後は昇降機の場所ですが……」
言いかけたカイの目が、ある一点を見たまま動きを止める。釣られてそちらを覗き見たブリジットは人混みの隙間から、二人組の男を見つけた。
そのうち、黒服を着た従業員らしい人物が、リネンのスーツを着た重役らしき男に耳打ちをし、その後いくつかの会話を経て最奥の扉の向こうへと消えてゆくのを見届けた直後、カイが足早にそちらへと人をかき分け進み始める。
「カイさん、あれ……！」
「ええ、間違いありません。貴方に協力頂いた人相書きとも、ベルナルドから聞いた情報とも一致します」
「追いかけましょう！」
言うが早いか、二人の足が先程より明らかに速度を増す。押しのけられる人の怪訝な表情や反応を気にする間もなく、彼らは二人組の消えた扉の近くまで駆け寄る。そのままの勢いで踏み込もうとするブリジットを抑え、立ち止まったカイは注意深く周囲を見渡した。
「カイさん……？」
「……やはり、この先が目的地のようですね。少なく見ても三組、この扉の警備を行っている者がいます」
カイの言わんとするところが見えず、ブリジットは慌ててカイと同じように周囲へ視線を向ける。扉の近くにいる者たちはともかくとして、他に此処を警戒している人間がいるのか、と。隣に立つ男性に問いかけようとした直後、彼は小さく声を潜めて答えた。
「客の中に一人、あのドアから一定以上の距離を取ろうとしない者が

います。他に確認できるのは向こうの扉の前を警備している人物ですね。あの場所から此処までは障害物もない。それに監視装置もある」
「……どうします？」
「……手荒な真似をするにはまだ早いのですが、状況を考えれば仕方ありません」
そう呟くカイの指先に、小さく雷光が迸る。しばらくの間黙り込んでいたかと思うと、稲妻を纏った彼の腕が、地面に向けてその仕草を隠すように振るわれた。
直後、カイが指し示した人物らが、不意に目を覆うような動作を見せる。何が起こったのか分からず戸惑うブリジットは、横から掛けられた声に我に返った。
「今です」
「は、はい」
そうして気付かれる事なく扉を潜り抜け、薄暗い廊下を歩きながら、彼女はカイへと問いかける。先程は何をしたのか、監視装置は大丈夫なのか、と。それに対してカイが答えたのは、迅雷という二つ名を持つ天才に相応しい所業であった。
彼は、目的の扉を監視している人物全てに時間差で微弱な電流を浴びせ、平衡感覚と視界を一時的に奪いまるで『立ち眩み』のような状態を作り出した上、同時に監視装置に備えられていた防護法術を破り、映像を差し替え自分たちの姿を監視装置の映像から消し去ったのだ。
繊細な制御を必要とする雷属性の法力を簡単に制御し、その片手間に他者の法術に介入するなど、一介の法力使いに出来るような事ではない。ましてや、カイのような若者がそれほどの資質を持つなど、それこそ聞いたこともない話である。
「……」
「どうしました？」
「いえ、カイさんって凄い人なんだな、って」
異常ともいえる才覚にブリジットは内心戸惑いを抱えながら、全く

落ち着いた表情を崩さないカイの後ろを黙ってついて歩き続けた。

「ガンフレイム！」

「ちっ！」

廃病院のエントランス、待合のソファーやフロア表示の看板、掲示物などが炎を上げて燃えている。休む間もなく襲い掛かる爆炎や剣戟を躱し、建物の奥へ奥へと逃げながら、壁面やフロアを砕いた瓦礫を打ち飛ばして足を止めて、ただ一心にソルの猛攻を凌ぎ続ける。しかし、実力差や様々な要因が絡み合い、彼女の撤退戦にもいい加減に限界が近づきつつあった。

自身の武器は不幸にも持ち出してきておらず、にも関わらず相手は神器等という超常の武器を用い、それによる法力の増幅（ブースト）を受けて景気のいい攻撃を立て続けに仕掛けてくる。

その性質から制御らしい制御を必要とせずに攻撃能力を得られる炎と、強い出力やかまいたちなどの現象を作らなければ攻撃能力を得られない風と。単純明快な法力の差は、そのまま彼我の戦力差となってノーティスを押し潰そうとしていた。

（とにかく、あの出鱈目な法力をどうにか出来ないと、ホントにこのまま焼き殺される。せめて、封炎剣さえ抑えられれば……！）

「ちっ、チョロチョロとうざってえ！」

「ぐぁッ!?」

炎の柱を回り込むように駆け抜け、一か八か、と飛び込んだところを前蹴りで引き剥がされ、立て続けに撃ち込まれた蹴りでそのままボールのように地面をバウンドして吹き飛んでゆく。やがて壁に大きな音と共に打ち付けられて動きが止まり、痛みから立ち上がれずに這いつくばる少女の側へと、ゆっくりと止めを刺すために男が地面を踏み鳴らして一歩ずつ近寄ってきた。

「……随分と手こずらせやがったな」

「お生憎様、だけど……諦めは、良く、なくてさ」

肺に刺さった肋骨が鋭い痛みを訴え、呼吸を阻害するようにその存在を執拗に主張し続ける。痛みを抑えて動けるようになるには、まだ

もう少しの時間が必要で。その傷を無理やり癒すには、さらに相応の時間を要するのだった。
だが、その時間がくるよりも明らかに早く、血に塗れたような紅い靴が眼前へとその姿を現す。遠くに「終いだ」と言う男の声が聞こえ、諦めから少女が瞳を閉じかけたその時、周囲の火の勢いが衰えていることに彼女は気付く。
そして、そこから微かに見えた蜘蛛の糸を手繰ることに、一切の躊躇はなかった。
「……死なば諸共、って……ね！」
「チッ！」
痛む胸を抑え、全身全霊を込めて法術による暴風を起こし、ソルへと向けて連続でかまいたちを放つ。破れかぶれの攻撃など、と躱されたって構わない。とにかく、締め切られたままのエントランスに、外気を流し込めるのであれば何だって良かった。
容易にノーティスの攻撃を躱し、そのまま反撃に出ようとしたソルの背後でガラスの砕け散る音が響き渡る。
そしてその直後、外から供給された酸素を目一杯に吸い込んだ燃え残りが、大きな規模の爆発を巻き起こした。フロア中が爆炎に飲み込まれ、乗じて起こった爆風がエントランス内の構造物を薙ぎ倒し、追いかける炎でそれらを焼き払う。
やがて、しばらくの時間の後に落ち着いた炎の中で、全身に火傷を負った少女はゆっくりとその身を起こした。
「……か、はッ……はぁっ」
自身と周囲に空気の断層を作り、炎がもたらす熱を可能な限り小さく抑える。平時であれば息をするように出来ていた制御も、爆風に吹き飛ばされる中で、なおかつ怪我による痛みや、殺されるかもしれないという恐怖があっては、まともに制御ができる筈もなく。
結局のところ、ただギアであるという一点の理由に助けられて、少女は炎の中でどうにか浅い呼吸を続けていた。
「……これで、どうにか……なったでしょ」
視線の先にあったのは、壁面にもたれかかるように倒れている男の

姿。体の各所にはまだ火が燃え盛っており、炎に包まれたその肉体が動く気配は見えない。いまだぼんやりと滲んでいる視界の端に、ベルトの焼き切れた紅いヘッドギアが映る。
「まだ、探さなきゃ……いけない所があるの。悪いけど、恨むなら軍神らしく、神サマでも恨んでてちょうだい」
結んでいた髪は解け、服のあちこちがほつれ、破れ、刻みつけられた身体の傷もまだ消えないまま。ふらふらと足取りの覚束ない少女は、自責の念だけで捜索を続けようとその体を引きずり、病院の奥、地下へと向かう方法を探して歩き出す。
向かってきた火の粉はどうにか払う事が出来た。気分のいい話ではないが、自分が死ぬ羽目になるよりかはまだマシだろう、と『本来敵ではなかった筈の人間を殺した』という罪悪感を納得させて。
ただ、今回ばかりは相手が悪かった。
「悪いが、最初(ハナ)から神(ヤツ)とは縁が無くてな」
彼女が命懸けで焼き払った男は。
「……ぁ」
常人なら明らかに死んでいるであろう攻撃を受けて、それでも平然と立ち上がってきた男は。
「遊びは終わりだ」
「ギ、ア……？」
最凶最悪のギア、そして聖戦における人類の仇敵。そう、かの破壊神『ジャスティス』をその手で屠ったギアなのだから。
怪我の治癒も碌に間に合わず、攻撃手段も持たないノーティスに逃れる術などある筈もなかった。瞬きする間に龍のようなシルエットは地面を蹴り砕き、十数メートルは離れていた少女の額に右手を掛け、大きなクレーターを生み出し、その中心に彼女の身体を叩き付ける。
あまりの衝撃に呼吸が止まり、やがて血を吐き四肢から力を失う少女を気にすることもなく、それは無表情のまま蒼白な顔の側に封炎剣を突き立てた。
「ガキの癇癪に付き合ってるほど暇じゃねえんだ、無駄な事してねえ

で失せろ」
「……無駄、だって？　アンタみたいなバケモノに、何が……わかるの」
「あん？」
ベルトの切れたヘッドギアを拾い上げ、呆れたようなため息を吐くソルに向けて、少女は震える声で吐き捨てる。半端な力しかないギアが出来る事なんて知れてると、それでもそう在らないと存在価値なんてないんだと。
乾き、火に焼けた唇は、まるで懺悔でもするかのように言葉を紡ぎ続ける。
アンタみたいに出鱈目な力があれば、もっと強ければと、溢れる感情を抑えられないまま少女の声は段々と力を失い、やがてしばしの沈黙の後。蚊の鳴くような声で、一言こう呟いた。
私みたいな小さい手じゃ、何にも拾えないんだよ、と。
「……癇癪起こして、悪かったわね」
「懺悔も担当違いだ。軍神（俺）じゃなくて神にでも言え」
やがてしばらくの時間が経過し、ある程度傷の癒えたノーティスが気まずそうに体を起こす。地面に突き立てられた封炎剣とそこに乱雑に引っ掛けられているヘッドギアを見て、少女は小さくため息を吐いた。動けるようになった身体を立ち上がらせ、先の戦闘でズタズタになったバッグをひっくり返す。貴重品を運よく残っていたウエストポーチに仕舞い、予備のリボンを一つ取り出し、丸めて瓦礫に腰かけていたソルへと投げ渡す。
「何のつもりだ？」
「お詫び。ベルト、焼き切れちゃったんでしょ」
「……ああ」
「それで、一応確認したかったんだけど。……無駄な事って言ったよね」
ノーティスの刺すような視線に、何度目かのため息をソルはわざとらしく見せる。明らかに不快感を見せた彼女を気にする様子は相変わらずなく、彼は淡々と事実のみを語っていく。

「あれだけ走り回ってた癖に電源設備も確認してねえのか。ジールの供給もそうだが、法力もロクに感知できねえ時点で、此処がハズレだってのは分かりそうなモンなんだが」
「なっ……！」
「ったく、ちったあ頭を使うんだな」
　思わぬところで自身の失敗を突かれ、顔に血液が昇ってくるのが感覚でわかる。反論を聞く気すらないのか、男は既にこちらから興味を失ったように体に着いた煤を払って廃病院から立ち去ろうとしていた。
「ちょ、ちょっと待って、何処に」
「坊やともう一人のガキが本命を追ってる。ブラッカードの連中が噛んでる以上、街中でギア戦闘になると厄介だ」
「……間に合うの？」
　追いかけるノーティスが口にした疑問に、面倒くさそうにソルは封炎剣を鳴らして答える。
「そこの連中の足でも使やいい」
　そうして、数分の後。被験者受け渡しの中継地点で起こった爆発、その様子を確認するために使わされた馬車は、哀れなことにわずかな時間の内にその乗り手を失う事となった。

　その少女が目を覚ました時、周囲に広がっていたのは暗闇だった。頬や肌を撫ぜる感触と、全身を覆う浮遊感。そして、暖かな温度に包まれて、差し込む光に視界が開け、やがて少女は理解する。自分の今いる場所を。
　しかし、なぜそこにいるのか、なぜそうなっているのかを思い出すことは一切出来ず、彷徨っている思考はガラス越しに聞こえてくる声によって寸断される。
「モニター、感度良好。エフェクターの制御も同じく、精度も高い数値を維持しています」
「当然だろう。その為に実験を続けてきたのだから」
　―ＬＡＬＡＬＡ―

円筒形の、そしてもう一枚の分厚いガラスを隔てた先にいる男たちの話す声がする。一人は冴えない顔をし、黒縁の眼鏡を掛けたいかにも科学者然とした男、そしてもう一人は、隣の男と同じような白衣を着てはいるが、明らかに纏う雰囲気が違う。

まるで猛禽のような、鋭い目つきの壮年の男であった。

「しかし、やはりアモレットの流用のせいか、微細なノイズが入るのが気になりますね」

「この程度は誤差の範囲に過ぎん。そのような事でコレの完成を遅らせるわけにはいかんのだ。ハイエナの目を盗んで資料を持ち出すのにどれだけ苦労したと思っている」

壮年の男はそう言って眉間の皺を深くする。その後ろ、白衣を着せられ、ベッドに横たわっている人影に気付き、少女は一つ、あることを理解する。

次の私は、『あれ』だ。

「世界を変えるのにメガデス級などという制御不能の遺物を使う必要があるものか。……私の、この『セイレーン』さえあれば人もギアも思いのままだというのに」

「しかし、まさか本当にヒュドラを覚醒させてしまうとは思いませんでしたね」

「おかげで我々がこうして勘付かれる事もなく研究を進められているのだ、あの男にも感謝せねばな？」

『次の私』は、黒のショートカットで、整った顔立ちの小さな女の子。きっと目を開けたら可愛い顔をしているのだろう。そして、それを雛型とする私もまた。きっと可愛い顔になるのだろう。

自分の出自も、存在意義も、目の前にいる男達の事も何一つ知らない少女は。

ただ微かに聞こえてくる歌声に耳を傾け、やがて自分が姿を真似る少女を嬉しそうに眺めるのであった。

Chapter 4 ”Reminiscence” Part A

Chapter 04
Reminiscence
A

真っ暗な夜の帳の中。悪路に車輪を時折弾ませながら、明らかに一般的なそれより高い速度で馬車は走り続ける。手綱を引き、黙々と馬を制御しているソルの後ろ、ガタガタと揺れる幌の窓から、火傷の痕がある程度引いたらしいノーティスが申し訳なさそうに顔を覗かせている。

「多少は動けるようになったらしいな」

「……おかげ様で。まだ肋骨とか左腕とか残ってるけど」

「……知るか」

素っ気ないソルの反応に恨み言を口にしながら、少女は再び幌の中へと引っ込む。搭乗口として大きく開けられたままの布地が風に靡き揺れる様と、濃紺の星空とを眺めながら、少女はただ馬車に揺られ、少しでも傷を癒そうとじっとうずくまる。

遠くに見える月に伸ばそうとした右手が、心を蝕む後悔を諸共潰すように握り締められた。

「ギアってさ、ホントはもっと凄いんだと思ってたよ」

「……あんなモンはただの化けモンだ」

「そ、バケモノ。だから人間に出来ないこともできるって、ずっと思ってた。あの後も、多分ずっとどこかでそう思おうとしてた」

「懺悔は俺の担当じゃねえと言っただろうが」

「……じゃあ、神サマにでも聞いてもらうわ」

ぽつりと呟かれた言葉に、明らかに不機嫌さを滲ませたソルの方を一瞥して、やがて少女は瞳を閉じる。勝手にしろ、とこちらを見もせずに言う男の声を薄れていく意識の中で聴きながら。

『聞いたか、『死にたがり』がまたギアの集団を撃破したらしいぞ。このまますぐポーランドの方に出たメガデス級の封印作戦にも参加するらしい』
『なんだ、また死に損なったのか？　戦果を挙げるのは良い事だが……付き合わされる部隊の連中も大変だな』
――そんな心無い渾名を聞くようになったのは、いつからだっただろうか。法力や法術での補助も碌にできず、医療に聡い訳でもなく。
ただ自分がギアで、人間より格段に強いから、それだけの理由で前線に出て戦い続けていたら、いつの間にか、誰からともなくそう呼ばれるようになっていた。
「部隊も私も別にやられてないし。そもそも一緒に突っ込ませてるわけないでしょ、馬鹿じゃないの」
『……腕に自信があるのは結構だが、軍神の真似事はやめておけ。命が幾つあっても足りないだろ』
『死に場所を探したいなら勝手だが、カイ様の胃に穴を開けないようにしてくれよ。ただでさえソル＝バッドガイの奔放ぶりに頭を抱えてるっていうのに』
「あんな子供に心配されるほど間抜け晒してないし、自分の事か軍神って名前の問題児を気にする様に言っといてよ。話聞いてるだけでも私より酷いし、天才サマはアレで次期団長候補なんでしょ」
――戦火の中から私を拾い上げたあの人から、自分より幼い少年を聖騎士団団長の後任にすると聞いて、始めは正気を疑った。
だが、聞いている内に冗談ではない事も、それに足る器であるという事も聞かされてその場では納得を示したが、やはり釈然としなかったし、プレッシャーも含めて相当な大任であるはずの団長職を、あのような少年が務めるなど、正直な話認められるはずもなかった。
『ええと、本日より、クリフ前団長の後任として聖騎士団団長に就任しましたカイ＝キスクです。不安も、もちろんあります……ですが、私にこのような大役をお任せくださったクリフ様と、この神器、封雷剣に誓って。私は……いえ、我々聖騎士団の手で、人類を勝利へと導き

ましょう！』
——自分がその座に就くなどと、思いあがっていたわけではないけれど、１０代やそこらといった年頃の少年が自分たちを率いるなど、到底考えられなかったのだ。
だが。クリフ団長の辞意を受け晴れて後任となった彼は、事実としてそれに相応しい振る舞いをし、更には自身でも素晴らしい戦果を挙げ帰ってきて、いつしか何ら恥ずべきところもない、名実ともに聖騎士団団長としての振る舞いを身に着けていた。
——そして、それが気に食わなかったから。ギアである私の方が人間よりも多くの敵を倒せるし、多くの人を守れると戦場を駆け回り、やがて自分の身を省みなくなっていった。
『そういえば小隊長、そのバックル傷だらけですけど、最初なんて彫ってたんですか？』
「秘密。今更彫り直すようなもんでもないし。アンタがメダルの男の子の事聞かせてくれるんなら教えてあげる」
『ええー、それはちょっと……恥ずかしいじゃないですか』
「バックルの内容を自分で説明するのも結構嫌だからね」
——戦火の中で父を失い、自分が化物なのだと知った私が聖戦という地獄の中で出来たのは、戦う事しかなかったから。
その様を端から見れば『死にたがり』にしか見えないのも、当然のことだった。

「ニューデリー郊外の部隊より救援要請。ギアの大群と戦闘中、大型ギアの姿も確認しており、現状の戦力では戦線を維持できないとの事です」
「……他の部隊は？」
「現在近隣の部隊も当区域にて同大群と交戦中、おそらく我々の部隊が最速で救援可能かと思われます」
「すぐに救援に向かおう。小型艇の準備も進めて、いざとなったら救護と法支援から人借りて私が先に降りるから。まだ欠番の守護神も決まってないし再編も終わってないんでしょ？」

そして、２１７５年８月２５日。聖騎士団所有の飛空艇、その管制室にはギアの出現を示す鐘の音が、救援要請のアラートがひっきりなしに鳴り続け、対応に追われる人員達が忙しなく艦内を駆けずり回っていた。もう既に夜も深く、聖戦という異常事態でさえなければ今頃は皆が夢の世界に居られただろうという時刻だ。

口内に歯を立て、慣れた手順で眠気を殺し、苛立ちを隠して、少女は壁に預けていた大剣をその背に負う。

そして、救援要請に答えるため全速力を上げて空を切る飛空艇の中、歯噛みしながら到着を待ち続けていた。

「!?　ま、待って下さい、ここから北西方向、街道へ進軍するギアの大群を確認！　こちらにも大型反応あり、ニューデリーの中心部へ向かっています!!」

「ちッ……陽動か、小型艇出して！」

しかし、続けて鳴り響いた出現警報と、地図上に現れた光点に管制官の顔が青ざめる。悲痛な声を聞いて確認した地図に映っていたのは、此処よりも遠い地点の、しかも救援に向かっている場所から反対方向に現れた大量のギア反応であった。

慌てて制止しようとする者の声も聞かず、少女は管制室の出口へと駆け出す。そして、扉の前で一度足を止めてノーティスは涼しい顔をして振り返った。

「隊長!?」

「法支援と法術一隊ずつこっちで使うから、残りは救援にそのまま向かって！」

「ですが」

「命令！　アンタ達は救援先の指揮下に入りなさい。死にたがりの下より安全でしょ？」

冗談めかして言う少女に、同行している部下の一人が笑って答える。違いありませんね、と。一瞬の間をおいて、肯定してるんじゃないとノーティスは不機嫌そうに言いながら扉の向こうへと姿を消した。

人の行き交う廊下を駆け抜け、小型艇の発着所へと飛び込んだ少女

を、既に準備を済ませていた団員たちが出迎える。二三状況を確認するための会話を交わし、小型艇へと搭乗し発艦を待つ。
「遅れてる大型ギアを先に獲る。小型艇での追跡時間が大体３０分程度になるから、法支援は準備を万全にしておいて」
「作戦は？」
「飛空艇で追跡してる間に高火力の法術と転移、それからフロートを両方準備。私が対象の直上から動きを止めるから、それを確認したら最大火力を一気にぶち込んでくれればいい」
「……奇襲、ですか」
　渋い顔をする一人に向けて、少女は頷く。
「救援要請は無視できないし、かといってこの戦力で前方の部隊を優先しちゃうと、大型ギアに追いつかれた時が危険でしょ」
「では、転移とフロートは」
「保険って所ね。対空攻撃を持ってるギアも最近確認されてるから」
　眉間に皺を寄せるノーティスを不安げに見る数名の姿。考え事をしていた彼女はそれに気付くと、わざとらしくため息を吐いて姿勢を崩した。その様に身構える者達を見て少女は気だるげに口を開く。
「『死にたがり』たって別に心中志願じゃないんだから、そういう視線向けるのやめて欲しいんだけど」
「し、失礼しました。私も、一度見たきりなので何とも言えませんが、なぜあのような戦い方を？　今回の作戦にしろ、ご自身が一番危険に晒される可能性が高いですし」
「別に、大した理由じゃないよ。その方が気楽ってだけだし、守護天使に任命されちゃってるけど、命預かるの性に合わないからね」
　そういう意味じゃ一人で好き勝手戦ってた軍神サマと大差ないかもね、などと自嘲気味に笑いながら、少女は甲板へとその足を向ける。やがてその縁に立ち、眼下に広がる暗闇の中から、ひときわ大きな紅い光を見つけ、その唇を歪ませた。
「よし、見つけた。準備は？」
　懐から取り出したメダルを開き、管制室へと問いかける。そして間もなく返ってきた『万端です』という声を聞き甲板上に展開された部

隊を見て、少女は手摺へとその足を掛けた。
「戦闘開始、合図はこっちから出す」
そして、少女の身体は深い藍の中へと溶けて行く。凍てつく風と、落下速度がもたらす高揚感に歯をぎしりと鳴らし、大剣をゆっくりと背中のホルダーから引き抜く。
三十秒ほどの自由落下、足を止めた大きな影がこちらにその紅い瞳を向けるのと、彼女の剣が重力を得て放たれるのは、ほぼ同時であった。
「喰らえッ!!」
全身のバネを使って剣を振りかぶり、真下へと向けて力いっぱいそれを投擲する。おおよそ鉄塊と評していいそれがギアの肉体に突き立てられるまで、数秒の時も必要とはしなかった。肉と骨を貫き、重力とノーティスの力を一身に受けたその刀身は、小さくないクレーターを轟音と共に大地に作り上げる。メダルに向けて声を張り上げ、遅れて拳を突き立てようとしたノーティスだったが、違和感が悪寒を伴って背筋を襲う。
直撃と同時に合図を出し、それから二秒。事前に詠唱を終わらせ、複数人で制御を分担する手筈であったのだが、一向に上の法術部隊から追撃が来ないのだ。本来であれば、合図の直後に発動できるだけの練度と下準備を重ねていたにもかかわらず。
その違和感と悪寒に従って反射的に防御姿勢をとったノーティスの目に、鞭のような何かが凄まじい速度で此方に向かってくるのが見えた。
「ぐっ?!」
側面から強烈な打撃を受け、少女の身体が大きな砂埃を上げて地面へと激突する。煙る視界に微かに映ったのは、自分の乗っていた小型艇が、飛行型ギアの奇襲を受け爆発、炎上する姿であった。
驚愕に見開かれていた眼をすぐさま正気に戻し、バウンドする身体を空中で捻り体勢を立て直した直後、此方に向けて飛んできた物体を躱すように二本の足が地面を蹴る。
少女が投擲された赤黒い塊の正体に気付くのに時間は要らず、足元

に転がってきたメダルの破片が、それが誰なのかを雄弁に語った。
「あ……あああぁぁぁッ!!」
咆哮を上げるノーティスの瞳が、目の前に立ちはだかるギアと同じ紅に輝く。そこから行われたのは、ギアと人間との戦争ではなく、理性を持たない化物同士の凄惨な殺し合いだった。
かまいたちを伴い振るわれた長く伸びる爪がギアの肉体を引き裂き、先端を硬質化した突起に守られた触手が少女の腹に風穴を開ける。
暴風が瓦礫を吹き飛ばし、ギアが放った炎をそのまま倍加させて大地を焼き払う。腕を引き千切り、足を切り裂き、やがてどちらが流した物かも分からない血に塗れた人影が、ギアの頭部を握り絞め、無くなった筈の左腕を剣に変えて刺し貫く。
これまでの憎しみ全てをぶつける様に、何度も何度も顔面を裂かれ、いつの間にか大型ギアと呼ばれていたそれは、ただの肉塊へとなり果てていた。
「……行かなきゃ、アイツ等を殺さなきゃ」
焦点の定まらない紅い瞳が遠くに霞む町明かりに向き、大きな裂傷を負ったはずの脚が地面を踏み締め、残りのギアを追い掛けようと進んだ直後。遠く離れたその場所で、一際大きな光が瞬いた。
そしてそれが何の光であるかなど。考えるまでもなかった。

「これは……」
そして夜が明け、立ち尽くすノーティスの姿を見た少年は絶句するしかなかった。赤黒い血溜まりの中心に打ち捨てられている、ズタズタに引き裂かれた大型ギアの死体と、全身を返り血で染め上げた生き残りの少女。彼女が持っていたのは、写真の切れ端が張り付いたメダルの欠片。言葉を交わすこともなく、少年はこの場所で何が起こったのかをおおよそ理解する。
しかし、ともすれば火に油を注ぐ結果となりかねず、また彼自身の未熟さも相まって、少年からは彼女自身の身を案ずる言葉を掛けることが精一杯であった。

「……ご苦労様です、ノーティス。遺留品の回収は我々で行います、貴女は休んでいてください」
「団長。……救援に向かった私の隊は、どうなりました？」
「……」
　光を失った瞳が、カイの方へと向いて問いかける。長く続いた重苦しい沈黙を破った彼の答えは、手放しで良いと言えるものではなく、ともすれば少女の精神に追い打ちを掛ける物にすらなり得た。
「ニューデリーで交戦していた隊の約半数が負傷、戦死しました。貴女の隊の損耗率は六割、その内八割強が戦死。……出来るなら貴女自身が、見送ってあげて下さい」
「……どうして、責めないんですか」
「それは」
「足元の大型ギアに気を取られて、飛行型を見落として……私の判断ミスで、死ななくて良い人間が死んだの。なのに、どうして」
　カイが小さく首を振り、短く整えられた金髪がそれに伴って揺れる。悲しみや怒りの混じる、しかし明確な決意が籠った瞳に射貫かれ、彼女は言いかけた言葉を飲み込む。
「相手がギアである以上、必勝も常勝も有り得ない事は皆理解しています。生き残った我々が出来るのは、後悔で足を止める事ではなく、この戦いを終わらせるために前に進むことです」
「でも」
「……幸いにも、避難をしていたからか襲撃にあった村での人的被害はありませんでした。貴女達が別動隊を追撃してくれたおかげですよ」
　やがて慰める様にカイが口にした言葉は、少女の心を折るのに十分な力があった。彼女らは、別動隊の最後尾にいた大型ギアと、飛空艇を襲った幾らかの飛行型ギアをかろうじて倒せただけに過ぎず、村にギアが到達することを伝えられた訳でもなければ、村に向かうギアを殲滅出来た訳でもないのだ。
　つまり、少女がその身を挺し部下を失ってまで戦わずとも村人は避難していたし、聖騎士団の手を借りずギアの大群を倒せるだけの何者

かがその場にいて、少女らが手を出すまでもなく村は守られていたのだと。カイの口から告げられた事実は、そのような結論を導き出してしまった。
「……ノーティス？」
「『そこ』は、私が手を伸ばそうとして、届かなかった場所なんです」
震える声が、カイの耳孔を叩く。
「何の、話ですか」
「伸ばされた手を端から掴んでいけるような天才サマには、ずっと分かんないでしょうね」
そう吐き捨てて、血塗れの破片を握りしめたまま少女はふらふらと歩き出す。血で描かれた足跡を残し、カイの呼びかける声を無視して進む。とにかく、此処から一歩でも遠く離れたかった。
ただ単にそちらの調査が行われていないせいで、気付いていないだけなのかもしれない。そこへ行けば、今のような発言はしなかったかもしれない。だが、少年は、自分がこれまで『そうしてきた』ように彼女たちも『そう出来たもの』として今回の戦闘を語った。
そしてそれは、戦うしか出来ず、その戦いすら満足にできないと悔いた少女の自尊心を、あっけなく砕いてしまったのだ。結局、カイは無理矢理にでもノーティスを止める、という手段をとることが出来ずに離脱を許し、この時を境に少女は聖騎士団という組織から姿を消すこととなる。
「……要するに、私に着いてきた連中は無駄死にって事じゃないの」
「なるほど、君があの大型ギアを倒したのか。その体躯に似合わず剛毅な事だ。ああいや、ギアか、それならば納得だが……彼といい君といい、自覚の有無はともかくとして近頃の聖騎士団は毒を以て毒を制すがモットーらしいね」
血に塗れたまま街道沿いを一人歩く少女の前に、黒い影と紅いマントが姿を現す。蝙蝠のようなシルエットをとったマントの中から、一人の男がひょっこりと顔を覗かせた。モノクルとタキシードが特徴的な、髭を蓄えたその紳士は柔らかな口調で彼女に語り掛ける。
「アンタは」

「いやなに、君の敵ではない事は確かだ。ただ一つ、礼を言わせてもらおうと思ってね」
「……礼？」
訝しむノーティスを気にする様子もなく、紳士はパイプを手に口を開く。
「君と、君の部下のお陰で村に怪我人や死者を出さずに済んだ。有難う」
「……大型ギアが一つ減ったくらいで何が礼よ。冗談じゃないわ」
「その大型ギア一つで戦闘の影響が何倍にも大きくなるだろう？　理性も品性もない兵器などに負ける道理は無いとはいえ、生身で出来る事には限度というものもある」
そう穏やかに語る紳士の表情は至極真面目なもので、その態度にノーティスも少しずつではあるが警戒を緩めてゆく。信用するには情報が不足しすぎているが、かといって敵として攻撃に移るにも決め手に欠ける、という調子だった。
「何それ。慰めてるつもり？」
「まさか。君がどう受け取ろうと勝手だが、私は伝えるべき事を伝えにきたに過ぎんよ」
「……ああ、そう」
投げやりな返事をして男の横を抜ける様に少女は再び歩き始める。足取りの覚束ない彼女を見るでもなく、紳士は靴音を鳴らして街道をノーティスとは逆の方向へと進み始めた。そして数歩進んだところで二人は足を止め、彼はどこへ向かうともしれない少女へと声を掛ける。
「無力感から逃れられないというなら、まずは自分の手の届く範囲を知るところから始めるといい。その上で折れるような事がなければ、いずれボタンではなく腕そのものを取れる様になるだろう」
「忠告ありがとう。その時は改めてこの鬱憤をぶつけさせてもらうわ」
「礼には及ばんよ。観察者のたまの気まぐれだ。あと、気まぐれついでに一つ教えておこうか」

「……何？」
「復興が済んだら、君が守ろうとした村の酒場に行きたまえ。美味い酒が飲めるぞ」
『スレイヤー』別れ際にそう名乗った男の袖から毟り取ったボタンを弄びながら、少女は不愉快そうに呟いた。
「『Ｄａｎｄｙｉｓｍ』、ねえ……ていうか、一応見た目未成年なのに酒勧めんじゃないっての」

一際大きな揺れに、少女の意識は現実へと回帰する。未だ走り続ける馬車の中でまどろむ少女は、インナースーツの胸元に手を差し込み、その中からチェーンに繋がれたメダルの欠片を取り出す。星と月の光に照らされて光るそれを見ながら、ノーティスは小さく息を吐き出した。
段々と小さくなる馬車の揺れが目的地へと近づいている事を示し、迫ってくるその時を思えば、自ずと意識が自分の今置かれている状況へとシフトしてゆく。あの時とは違う。自分の手の届く範囲ならば取りこぼさない、と。
「今ならあのオッサンの腕くらいは取れるのかしら」
「あん？」
「何でもないよ」
ソルの訝しむような声に端的な言葉を返して、少女はメダルに視線を落としたまま男へと問いかける。
「……そういえば、何であの時殺さなかったの？」
「殺せと頼まれたわけじゃねえからな」
一言答えてまた黙ってしまうソルに対して、どう声を掛けようかと迷い、やがて諦めたように首を振る。奴等の仲間からこの馬車を奪う直前の発言といい、先程のやり取りといい、ほぼ間違いなく彼はカイから事の顛末を聞いており、そして自分たちが向かう先に彼もいるのだろうなと考えると。
自業自得ながら、彼女の気分はより悪い方へと転がってゆくのであった。

やがてしばらくの時間が過ぎ、街の一角で馬車はゆっくりとその動きを止める。そのまま搭乗席から降りて封炎剣を提げるソルと、まだ癒えていない傷があるのか、胸元を腕で抑えたまま幌の中から降りてくるノーティスの姿が街灯に照らし出される。
「で、どこのカジノって？」
「中心街だ。とっとと行くぞ」
「まだ肋骨痛むんだけど」
「知るかよ。走ってる間に治せ」
アンタが折ったんでしょ、と毒づきながら少女は男の後を追って進み続ける。そうして目的の場所へと近付くほどに、何時からか少しずつ耳鳴りのような音が聞こえ始めた。始めは単なるノイズのようだったそれが、二人の足が速くなるにつれ、明確な音と声になり。やがて歌声となってその耳をくすぐる。
―ＬＡＬＡＬＡ―
声質や音程といった部分ではなく、もっと根本的なところで不快感を煽る歌声。そして、それが聞こえていたのはノーティスだけではなかったらしく。
「チッ、まだ残ってやがったか」
「ねえ、この声」
「……ブラッカード社の連中の置き土産だ」
数メートルほど先を早足で駆け抜けるソルが、表情を歪ませ忌々しげに吐き捨てる。そして夜明けのまだ見えない街の中心部から、微かに火の手が上がるのが、二人の目に映った。

Chapter 4 ”Reminiscence” Part B

Chapter 04
Reminiscence
B

ノーティスとソルの二人が街の中心部から上がる火の手を見る、その数十分ほど前の事。その類い稀なる法術をもって監視の目をすり抜けたカイと、彼に同行していたブリジットは、カジノの最奥部にあると思われる研究施設を探して進んでいた。

「……なかなか見つかりませんね」

「先程捕らえた男の話を聞く限り、誘拐された人たちがこちらの方へと送られているのは間違いないはずなんですが……」

廊下をどれだけ歩き、いくつ扉を覗いても、一向にそれらしい施設は見つからず、焦燥感が二人の背中を強く押す。やがて、全く進展の見えない状況に、二人の表情が陰りはじめた頃、ブリジットが他とは違う意匠の扉を見つけて声を上げる。

「あっ、あれじゃないですか?」

その言葉に遅れて少女が指さす方向を見ると、そこにはスライド式の扉が二つ並んで壁に埋め込まれるような形で設置されていた。一目見てカイはそれが昇降機の扉であることに気付き、早足で扉の前へと駆け寄る。

そして扉の中間地点にあるパネルに手を触れ、下方向の矢印が描かれたボタンを押す。しばらくの時間をおいて、昇降機がフロアへと到着した事を示す音が二人の立つ空間に鳴り、その直後、二つ並ぶ扉の内の右側がゆっくりとその口を開いた。

「な、誰っ……!?」

「失礼!」

扉を出ようとした男が反応する間もなくカイが突き出した肘が鳩

尾に食い込み、たたらを踏んだ男の口から苦悶の声が小さく零れる。そして続けざまに封雷剣の柄を後頭部に打ち付けられ、悲鳴を上げる事すら許されず崩れ落ちる。
　動けないままの男を昇降機の端に追いやり、二人は中からその扉を閉じて更なる下層階へと向かった。
「お、お前達、は……？」
「旅の賞金稼ぎ、といった所です」
「……時間がありません、攫ってきた者達の居場所を答えなさい。警察機構もそうしない内に踏み込んできます。貴方達に逃げ場はありませんよ」
「何だと、」
　反射的に身を起こそうとした男の喉元に、青白い電気を帯びた剣先が突きつけられる。思わずその首を引き、後頭部に触れた感触から自分が壁際に追いやられていたことを思い出したのか、諦めたようにうなだれて男はその口を開いた。
「……わかった、案内しよう」
　男から言われるままに階層ボタンを押し、静かな駆動音を聞きながら三人はカジノの地下深くへと昇降機に乗って降り続けて行く。やがて降下速度が小さくなり、昇降機に載った時と同じ合図の音を、今度はその籠の中から聞く。開かれた扉を先導に従って進み、真っ暗な室内を歩いて行った先で、仄かな光が見えた。
「これは……」
　男を追い越すように駆け出し、光の漏れていた扉を開いた先にあったのは、目を覆いたくなるような惨劇の現場であった。元々は打ちっぱなしであっただろう壁や床と、それを赤黒く染める返り血の痕。鼻を突く饐えた匂いと、靴越しでも感じる、粘ついた足元の不快感が、そこで何が行われていたのかをカイの脳髄へと克明に刻み付けた。
　後を追いかけて室内へと飛び込んだブリジットの背中で、扉の閉まる音が不意に聞こえる。
「カイさん、ドアが！」
『……はっ、約束通り連れてきてやったろ。お前等の探してる連中は

みんな此処に来た。生きてる、とは一言も言ってないがな？』
　してやったり、という表現が最も近いか、実力に開きのある相手を閉じ込める事が出来た、という事実に扉の向こうの男の声が明らかに興奮を含んだ声色へと変わってゆく。扉を叩いて声を張り上げるブリジットの言葉に耳を貸すこともなく、言葉を失い立ち尽くすカイを見ることが出来ていたなら、より一層弾んでいたであろう声で、男は二人を嗤った。
　そして、黙っていればいいものを、得意げに彼は扉越しの二人へと語りだした。ここで彼らによって何が行われたのかを。
　そして、二人を何が待ち受けているのかを。
『上の連中の実験の副産物だ、遊び終わったヤツは全部そいつに食わせてやったのさ。これからお前等がそうなるみたいにな！』
　正面の扉が開き、そこから現れたのは一体の中型ギア。何らかの脊椎動物を媒体にギア細胞を埋め込んだのだろうが、素体の生物が弱り切っていたのか、そもそもの細胞に問題があったのか、おおよそ動物と呼ぶには不適切で、文字通りの化物（クリーチャー）と言っていいような、骨格も筋肉も歪な何かの姿がそこにはあった。
　そしてそれは、玩具でも見つけた子供のように表情を歪ませ、唸り声を上げながらその腕を大きく揺らした。
「……なんて、事を」
「戯言は、それで終わりか」
　冷たく通る声が、扉越しに勝ち誇る男の心根を凍らせる。震える声が、鉄の扉越しに何が出来ると精一杯の虚勢を張る。男の恐怖心を代弁するかのように、二人の目の前に立っていたギアは慄き、地面を砕いて恐ろしい速度でカイへと襲い掛かった。
　その直後。構えを取り、攻撃を避けてヨーヨーを投げようとしたブリジットの目に映ったのは、感情のない能面のような表情をその顔に張り付けたまま、流れるような動きでギアの背後を取るカイと。
「ライド・ザ・ライトニング!!」
　その手に握った封雷剣から放たれた巨大な光球が、強力な電撃を伴ってギア諸共扉を粉砕する姿であった。

黒い煙と火花を散らし続けるひしゃげた扉を踏み越え、その形相に小さく悲鳴を上げた男を見下す。幸運にも扉越しの直撃を避けられたのか、いつの間にか水浸しになっていた足を縺れさせて逃げようとする惨めな姿にすっと目を細め、カイはその左手に再び雷を纏った。
「だ、ダメです！」
ブリジットの制止も空しく男の腕は空を切り、一瞬のうちに走った閃光が男の体を焼く。呻き声を残して廊下の中央で男は倒れ、それを一瞥しカイはそのまま廊下を再び歩き始めた。
「カイさん」
「……殺してはいません。私が感情に任せて殺してしまえば、それこそ法の意義が無くなってしまいます」
「……殺せるなら殺してやりたい。そういう顔、してます」
ブリジットの畏れがうかがえるような言葉に、『だとしても、そこに正義はありませんから』と困ったように笑みを浮かべて、彼は普段通りの決意の籠った瞳で、再び正面を見据える。こうなってしまった以上、更に騒ぎを派手にして、なおかつそれを聞きつけてやってくる者たちから話を聞くのが一番確実かつ手っ取り早い、と思考を切り替え。
せめてクリスがあの血糊の中に居ないようにと祈って、彼は剣を握る指に力を込めた。

「こちらです！」
「はい！　っく、……ロジャーお願い！」
戦闘を繰り返しながら進むうちに、二人を迎え撃つために出てくる賞金首や、逃げ惑う研究者の姿がちらほらと姿を現すようになり、探している場所への距離が確実に近づいているのではないか、という感覚が強くなる。そしてその予想を証明するかのように扉や区画を隔てる警備は厳重となり、強い法力を段々とその肌に感じるようになる。
「また防護扉か！」
「ウチがやります！」

展開されたヨーヨーのシリンダー部分から、空になった薬莢が金属音を立てて散らばり、ポーチから取り出したローダーと、それに装着された新しい薬莢が先客の居なくなった薬室へ滑り込む。再び閉じられたヨーヨーを振りかぶり、彼女はそれを扉に向けて投げ放った。扉の結合部で炸裂した炸薬が法力によって増幅され、強い爆発を伴って扉に大きな穴を開ける。

人一人が余裕をもって通り抜けられる程度の穴を先んじてくぐり、カイは待ち構えていた数人にその指先から雷を落とす。泡を吹いて倒れる者もあれば、麻痺したまま動けなくなっている者もいるその全てを封雷剣で打ち倒し、遅れてくぐってくるブリジットを待って進軍を再開した。

「クリスさんが連れて行かれた場所はこっちだって言ってましたけど、やっぱりさっきのギアと何か関係があるんでしょうか？」

「気になるのは、あのギアが我々を閉じ込めた男の感情と連動して行動した点です」

「……連動、ですか？」

電撃で襲い来る者たちの行動能力を奪い、照明を落とし、瓦礫や気を失った者たちを踏み越えながらカイは呟く。

「始めは、剣気に中てられて反射的に攻撃を掛けてきたのかとも思いましたが、そうだとすると姿を現した時のあの表情が不自然なんです」

「そういえば、嫌な感じの笑い方をしてたような……」

「指揮個体の命令に従い戦闘を行う量産型のギアに感情はありません。あるとすれば何らかの要因で自我を得たか、そもそも指揮個体として自我をはじめから与えられていたかのどちらかしかありえません」

何時からか、周囲から人の気配も消え去り、しんと静まり返った扉の前で、小さく深呼吸をして息を整える。先程から続けられる話の内容に疑問を覚え、おずおずと口にしたブリジットの問いかけに、掌へと法力を集中させていたカイが答える。

「じゃあ、さっきのギアは……」

「……恐らく、扉の向こうにいた男の感情を読み取り、それを再現していた」
『ご名答。それが我々が生み出したモニター、そしてエフェクターの効力だ』
　何処からか聞こえた男の声を気にする事もなく扉を打ち破り、微かな明かりの差す部屋の中央へと二人は歩みを進める。一歩、また一歩と進むごとに得も知れぬ不快感は強くなり、やがて足を止める頃には、それが明確な形をもって二人の体にまとわりついた。
「人の感情を利用して、自我を持たず単純なプログラムに沿うしか出来ないギアを高精度で制御する。素晴らしいとは思わないかね？」
　広々とした空間の奥に立っていたのは、猛禽類を思わせる目付きの鋭い壮年の男と、キャスター付きの手術用ベッド。シーツを掛けられており、何かが横たわっているというところまでは分かったものの、顔や髪など個人を判別しうる情報を得られず、そこにいるのが誰なのかまでは分からない。
　武器を構え直す二人を余所に、ガラスの壁を背にした壮年の男は、自分の行いをまるで偉業でも語るかのように口にした。
「これさえあれば、メガデス級などという制御不能の怪物を使わなくとも、中級程度のギアが戦術を知る兵隊となり、奴らの法力が魔法使いのそれを遥かに超えるのだ。ただ眠らせておくより、よほど価値のある使い方だと思うがな」
「……そんな物の為に、あんな酷い事をしていたんですか」
「あんな？　アレはあのクズ共が勝手にやったことだ、私の与る所ではない。特に見境の無い者はアレと同様に処分したがね」
「……これまでの話は、全て自白ととって構いませんね」
　カイの毅然とした物言いに、余裕ぶっていた男の眉がピクリと跳ね上がる。歪んだ眉越しに彼を見るその瞳には、呆れや、怒りといった感情がない交ぜとなっているのがありありと見て取れた。
「自白だとしたらどうなんだ？」
「ジェイムズ……いえ、リーガル。賞金首の討伐偽装、誘拐に殺人、そしてこのギア研究の一件。貴方はこれらについて法の裁きを受けな

ければならない。もうこの場に貴方を庇いだて出来る者はいません、大人しく投降しなさい」
「……それはどうかな？」
男の背後のガラスが、けたたましい音を立てて砕け散る。同時にどこからか流れ込んできた水が部屋中を巻き込み、割れたガラス壁の隙間から伸びてきた茨によく似た何かが、ベッドの中身へと我先に飛び込んでゆく。やがて水の流入が止まり、いつしか水浸しとなった部屋の奥で、ベッドの中から誰かが茨に絡めとられ、そのまま籠のような構造物の中へと飲み込まれてゆく。
そして、それに遅れて茨を纏い現れた何者かの顔を見て、二人の思考が一時止まった。
「クリス、さん……？」
「モニターとはなにも、ギアにのみ作用する訳ではないのだよ」
「貴様ッ！」
「おっと、よしておいた方がいい。何せセイレーンの素体はまだ生きているのだからな、警察機構の人間が人殺しなどをする訳にはいかんだろ？」
その言葉にためらいを見せたカイの横を駆け抜け、ブリジットがヨーヨーをその手から放つが、しかしそれは男へと届く前に茨に遮られて力なく少女の手の中へと帰ってきてしまった。遅れてカイが電撃を放つも、軌道が天井や床、壁へと逸れ、コンクリートを吹き飛ばすだけで足止めをすることも叶わず、ガラスの壁があった向こうへと男を取り逃してしまう。
男が逃げ去った場所を塞ぐように立ちはだかる、茨を纏った少女に剣を向けながら、二人は相手と一定の距離を保つ。
「早く追いかけなければ……！」
「でも、あれってクリスさんじゃ……」
確かにブリジットの言葉通り、目の前に立ちこちらを無感情に見つめるその姿は、髪の長さこそ違えど、ノーティスやブリジットが行動を共にしていたクリスそのものと言って相違ない程に、記憶の中の姿と合致していた。

しかし、幾度もの死線を超え、ギアとの戦いに明け暮れたカイの本能が、その記憶とブリジットの言葉を否定する。あれはクリスではないと。そしてその本能が、クリスに似た何かに近づこうとしているブリジットを狙う動きに気付いた。
「下です！」
「え？　うわっ!?」
不意に突き刺さるカイの叫び声に遅れてブリジットが飛びのけば、彼女の足元のタイルを打ち破った何かがそのまま天井に小さくない穴を穿つ。体勢を立て直して視線を向けた先には、鋭利な刃物のような何かが地面から三本、天井へと突き刺さっており、それはそのまま穴を爪痕へと変えながらブリジットの方へと振り下ろされた。
「くっ！」
「ブリジットさん！」
言うが早いか、振り抜かれた封雷剣が青白い光を放ち、稲妻が迫りくる切っ先を打ち貫く。その間隙を突いてカイへと向けられる刃を、返す切っ先で切り払い、そのまま彼は水浸しの地面を蹴って少女の懐まで飛び込む。
目の前に飛び込んできた血袋を破裂せしめんと少女が振るった両腕は空を切り、彼女の頭上をそれは身を翻して飛び越える。
そして、回転する身体の勢いを乗せて振りおろされる封雷剣は、蒼や碧の雷光を伴って少女の背後にある茨の籠を切り裂いた。
「やはり、そういう事か……！」
ほつれた籠の隙間から見えたのは、彼らが助けようとしていた少女が、身体に食い込んだ茨に囚われている姿であった。その四肢には血が滲み、顔色は悪く呼吸も心なしか浅い。少なくとも、彼女と同じ顔をしたギアに囚われた結果そうなっていることは明白で、それはそのまま、二人に残された時間がそう長くないであろうことを表していた。
「カイさん！」
セイレーンと呼ばれていた少女の背中から飛び出す、茨のような棘をロジャーが拳で打ち落とす。遅れてカイがそのギアから距離をと

れば、その横に並ぶようにブリジットがヨーヨーを引き戻して構えをとった。
「あれって、やっぱり」
「クリスさんがこのギアの生体ユニットとして拘束されている、というのは間違いないでしょうね」
「でも、彼女が素体なんだったらどうしてウチ達を……？」
「それがあの男がモニターと言っていた物の役割なのでしょう。恐らく、彼女が抱いている恐怖心を攻撃衝動へと変換してアレは攻撃を行っています」
　先程の数度のやり取りで、彼はあの少女が『自分に近づこうとする者、攻撃を仕掛けてきた物を優先して狙う』傾向に気付いた。そして、彼の推測が正しければ、あのギアは自分の制御下にある者の感情ベクトルを、指揮個体同様に制御できるのではないかと。
「ギアにのみ作用するわけではない、か」
「……カイさん？」
「難しい事を言っているのは承知の上ですが……あのギアの攻撃を、なるべくかすり傷であっても受けないようにして下さい」
「それって……」
　アレは、自分のギア細胞を攻撃などから他者の体に混入させる事で、コントロール対象をギアのみならず他の生物にまで拡大する事が可能なのではないか。カイの言葉は、言外にそのような予想を示していたのだった。

「……これはまた派手にやってるね。あの声もかなり強くなってる。ギアそのものが、って言うよりギアの中にいる何かが呼んでるって感じなのかな」
「ちっ、あの坊や、結局テメエが一番目立ってんじゃねえか」
　突如地下より発生した火災から逃げ惑う人々を掻き分けながら、ソルとノーティスの二人はカジノの正面入口へと近付いてゆく。街外れからここまで走っている内に一通り傷が治ってしまったのか、煩わしそうに人の間を縫うノーティスの足取りはそれまでと比べても比

較的軽い様に見える。
　やがてガラスの割れた扉をくぐり、利用客がすべて逃げ出したのか、非常ベルの音だけが鳴り続けているホールに足を踏み入れる。その辺りで、二人の前に幾つかの人影が『関係者以外立ち入り禁止』という旨のアナウンスが描かれた扉から飛び出してきた。
　青ざめた表情を浮かべている男達と、その中で一人だけ余裕の窺える人物とを見比べて、少女は小さく笑みを浮かべた。
「ビンゴ。割といいタイミングだったみたい」
「……みてえだな」
　ノーティスの言葉を受けてそう呟き、ソルはため息とともにその手の封炎剣を小さく後ろに引く。二人の姿を見て訝し気な表情を浮かべるのは、二人にとっては良く見覚えのある顔ぶれと、カイがリーガルと呼んだその男であった。ソルより先んじて数歩前に出るノーティスを見て、男達は明らかに動揺したそぶりを見せる。
　その内の一人、集団の後ろの方にいたリーガル本人が人影を押しのけて前に立ち、努めて冷静な声を保ったまま正面に立つノーティスへと問いかけた。
「……ここに何の用かな。見ての通り火災で火の手が回り始めている、君達も急いで避難した方が良いのではないかね」
「うん、確かに炎にはあんまりいい思い出無いし、そうしたいのは山々なんだけどさ」
「残念ながら、俺達が用があるのはテメエなんでな」
　ソルの言葉に反応して、慌てて男達が懐からナイフや拳銃など、思い思いの武器を取り出して構える。
　明らかに場慣れしているように見える後ろの男はまだしも、目の前にいる手ぶらの小娘程度ならどうにでもなる、叩きのめしてその隙に逃げてしまおう。そのような事を、無意識の内に彼らは考えた。
「……毎度の事だけどさ、アンタ等みたいな連中に舐められるのって正直かなりムカつくんだよね」
　だがその無意識は、少女が一人目の利き手や足をへし折るのに十二分な時間を与え、そちらに気を取られて反射的に攻撃しようとした者

は、間髪を入れずに飛び掛かってきた男の振るう封炎剣で容赦なく薙ぎ払われ、その身を焼かれる。ジェイムスという賞金稼ぎを騙り、賞金首を抱き込んでまでギアの研究に明け暮れていた男は、あっという間に自分の盾になる存在をすべて失ってしまった。

　そして、立ち尽くす彼の目の前で面倒臭そうに封炎剣を構え、冷たい目をして炎を纏った男は死刑宣告を言い放つ。しかしなぜか、リーガルの表情に絶望という文字はなく、ソルの言葉に態度を崩さないまま彼は口を開いた。

「悪いが終いだ」

「終わるのは貴様だ、ソル・バッドガイ」

　ソルの言葉に答えた銃声は、彼の肩と、その近くにいたノーティスの腕にそれぞれ小さな穴を穿つ。そして、男がひるんだ一瞬の隙を着いてリーガルは二人から離れ、勝ち誇ったように高らかな笑い声を上げた。

「ふ、ふふっ、ふはははは！　これが凄腕の賞金稼ぎとは笑わせる！　所詮人間に過ぎない身でブラックテックにかなう訳がないだろうが！」

「テメエ、は」

「……ほう、まだ喋るだけの元気があるのか」

　そう歪んだ笑みを浮かべる男の顔から、どんどんと肌色の皮膚が剥がれ落ちて行き、遂には石膏のような白い硬質の外皮に覆われてしまう。そしてその鋭い顔つきはそのまま獣のそれへと変貌し、声も変声機を通したようなノイズが掛かった物と成り果てる。

　二人の前で勝ち誇るそれは、自分の身を自分で改造した結果生まれた、紛れもないギアだった。

「だが、手遅れだ。貴様は自分の手でその小娘を殺し、そして自分の命を自ら断つのだからな」

「んだと？」

　ソルが問いかけた直後、封炎剣が極大の炎を放つ。そして、彼は目の前のギアが勝ち誇った意味をその身で理解し、背後で起ころうとしていることを一瞬のうちに察した。だが、その時には既に彼の背後は

業火で埋め尽くされ、ノーティスの声はおろか、その姿さえ炎に隠れて見えなくなってしまっていた。
そして、身体に感じた異変が、正面で此方を見下すそれの言わんとする意味を雄弁に語り、やがてソルの腕は、彼自身とは別の意思に従うようにその手の剣を掲げる。
「終わりだ。死にたまえ」
「クソがっ……」
吐き捨てた言葉と共に、弾痕の残る男の肩口へと深々と刀身が食い込んだ。だが、ソルを殺すために振るわれたはずの剣はその役目を全うすることが出来ず、また、明らかに健や骨を断たれた筈の男は、そのような傷など初めから無かったかのように、突き立てられた筈の腕で封炎剣をゆっくりと抜き取る。
「面倒くせえ真似しやがって……!」
リーガルにとってその光景は、あってはならない物であった。モニターの支配下にあるにも関わらず、自死に抵抗するようなことなど。
そして、法力の制御を奪うはずのエフェクターが抑え込まれ、彼の後ろで業火が更に勢いを増して渦を巻いていることなど。
「……覚悟はできてんだろうな?」
ソルの一方的な問いかけに、彼は答えることが出来なかった。
ソルを恐れていたからではない。
ソルが彼の支配を脱したことが許せなかったからでもない。
ましてや、ソルの手によって自分の研究成果が打ち砕かれたことへのショックなども有り得ない。
「一つだけ教えてあげる。切り札(ガンマレイ)ってのはこう使うの」
ただ彼は、炎の中を裂いて放たれた光条に五体を焼かれたに過ぎないのだから。

Chapter 5 ”Termination”

Part A

Chapter 05
Termination
A

身体を未だに焼き続ける痛みの中、二人に向かってそれは問いかけた。その単語に、どれほどの意味が含まれていたのかはわからない。

だが、瞳に映っていた恐れの感情を的確に読み取り、男は呆れたようにその口を開く。

まだブラッカードの野郎の方が上等な出来だった、せいぜいが中型程度までを制御するようなシステムなど、ギア細胞の兵器転用初期から既に完成していた、と。

そして、命令を無視すること位は出来たが、摘出する方が楽だから従ったと平然と吐き捨てる彼の言葉は、僅かに残っていた男の自尊心を打ち砕くのに十分な破壊力を持っていた。

「そんな、馬鹿な……ならば貴様らは」

「どうでもいいでしょ。悪いけど急いでるから、早くアンタ達がさらってきた娘の居場所教えてくれない？」

「……教えない、と言ったら？」

「ならクタバれ」

言うが早いか、ソルの右足が辛うじて焼け残った男の右腕を何のためらいもなく踏み抜く。ギア細胞によって自身をギア化していたとはいえ、もともとは人間であったその身に、遠慮も躊躇いもないその一撃は彼の心身に強烈な痛みと、恐怖心という名の深い爪痕を刻み付けた。

そして悲鳴にも似た怒声が、腕を踏み潰され苦悶の表情を浮かべるギアの口から放たれる。

「なっ、何故だ!?　なぜ警察と協力してまで小娘一人を助けようとす

る！　貴様のような賞金稼ぎには無関係の事だろうが!?」
「……何訳の分かんねえ事言ってんだテメエは」
「……あのさ」
　ソルを制するように腕を差し出し、ホール内にある扉の内一つを顎で指したノーティスが男の側にしゃがみ込む。ため息と共に後ろに一歩下がり、ソルはそのままリーガル達が出てきた扉の方へと足を向ける。先へと進もうとするソルを一瞥し、少女は再び足元へと視線を落とした。彼女は、ウエストポーチから折り畳まれた一枚の紙を取り出し、息も絶え絶えなリーガルの眼前へと開いてみせる。
「アンタが賞金首の討伐を偽装してる事も、此処でその賞金首がのうのうと生きてるのも、全部知ってるんだよ。実利って意味じゃ並の賞金首狙うより美味しいわけ」
「それだけでこのような大きな騒ぎなど」
「後は個人的な理由。アンタみたいな連中大嫌いだからさ」
「くっ、化物が聖騎士団（正義の味方）気取りか……！」
「……何ですって？」
　蔑むような男の言葉に、ノーティスの眉がピクリと吊り上がる。不愉快そうに歪む表情を見て嗤いながら、男はそのまま言葉を続けた。猟奇殺人者が警察の真似事などしてどうする、聖騎士団じみた格好で人間に取り入るつもりなのか、化物が人と協調など出来るわけがない、そのような苦し紛れの罵倒を反論一つなく聞いていたノーティスが、ある一言を受けてその目を見開く。
　仮に貴様が聖騎士団だというならば、私を撃った時にあのような表情をしてはならない筈だ、と。鈍い音と共に、男はその口角を歪ませた。
「……聖騎士団の人間が、人を討って笑う筈がないだろう」
　右胸を貫く痛みの中、勝ち誇ったようにふらふらと立ち上がりながら此方を見下し嗤うギアを見据える。ふと下に視線を落とせば、地面から伸びた触手がその先端を銛のように硬質化させて、背後から少女を刺し貫いていた。
　だが、まるでさしたる問題ではないと言いたげに、胸部から飛び出

しているそれを右手で鷲掴みにし、ノーティスはゆっくりと息を吐いた。
「……アンタは、二つほど勘違いしてる」
その指に一寸の力を籠め、まるで果実を絞るように握り潰す。みちみちと肉や皮の裂ける音と悲鳴を聞きながら、彼女は一歩、地面を踏み砕いて前へと進む。一歩少女が前に進めば、ギアは一歩後退る。
しかし、触手を抜き取ることも許されないまま段々と距離は詰められ、苦し紛れに突き立てた残りの触手も歩みを止めるには至らず、やがて四、五歩で手が届きそうな距離まで近づいた時、瞳を紅く光らせた少女は。
「私は単に、アンタみたいな連中が大っ嫌いだからこの事件に首を突っ込んだ」
一息に引き抜いた触手の一つを手前へと引き寄せ。
「それから」
それにつられて浮き上がり、少女の眼前へと投げ出される肉体を目掛けて。
「人間は、ギアを討伐できたら喜ぶものなの」
両刃の大剣のような姿と化した己の右腕を、相手の心臓を貫くように深々と突き立てた。

「どう？」
「……テメエか」
昇降機乗り場の前、火災に反応して動作を停止したらしい昇降機を見ているソルに、あとから追いついてきたノーティスが問いかける。しかし、返ってきた言葉は芳しくなく、数回の押し問答の後、二人は炎の中階段を駆け下りるか、無理矢理に扉を抉じ開けてシャフトを飛び降りるかの二択を迫られる羽目になった。
「階段でいいでしょ？　飛ばし飛ばし降りれば速度は出るし、団長と居るならそう危ない事にはならないし……」
「飛び降りた方が早い」
「……あの、私素手なんだけど」

少女の抗議もむなしく、ソルは当たり前のように扉を蹴破り、炎渦巻く昇降機のシャフトの中へとその身を流れる様に投げ出した。程なくして炎の中へと姿を消したソルを見送り、幾ばくかの迷いを経て、やがて諦めたように少女もその炎の中へと足を踏み出す。

髪や服を焼かれない様に法力を制御し、炎の熱に汗を滲ませながら落ちてゆく内に、ワイヤーに繋がる構造物が見え、背後を減速を始めているソルの姿が通り過ぎた。

その一瞬の出来事が意味するところを理解したのか、助けを乞うように上方へと声を投げ掛けるが、返ってきたのは素っ気ない返事が一言のみであった。

「え、もうすぐ？」

「みてえだな」

慌ててフロートを練ろうとするも間に合わず、壁面に爪を立てながら強引に速度を落として、少女は最下層に位置する昇降機の天井へと轟音と共に着地する。点検用扉の近辺に落ちたらしく、上体を起こそうとする間に底が抜け、体勢を崩して昇降機の中へとノーティスは転落してしまった。

その際に後頭部を強打したらしく、ソルが悠々と着地し、扉から体を滑らせて降りてくるまでの間、彼女は着地地点のすぐそばで頭を抱えていた。

「いったた……」

「馬鹿かテメエは」

「階層分かるんなら教えてくれてもいいでしょ……っ！」

言いながら扉を抉じ開け、廊下へと出た二人の耳を再びあの歌声が撫ぜる。そして、その声に呼応するように、炎の中からギアのものと思われる唸り声が聞こえてきた。

無意識の内に拳は握られ、二人の足が歩調を段々と速める。目的地はそう遠くないらしい。

「……急ごう」

「面倒くせえ……」

響いてくる歌声に操られるように二人に襲いかかるギアを打ち倒

し、身体中を這い回る嫌悪感に歯を食いしばり、少女は歌声の元を探して走り続ける。しかし、そうしている内に、彼女の心に一つ違和感が生まれる。意思を持たず、命令に従っているだけの筈のギアが、私を恐れている、と。

二人の行く手を阻むために現れるギアは、ノーティスの比ではない程に容易くギアを屠り続けるソルではなく、何故か少女の方を過剰に恐れ、時にはソルを置いてでも彼女を狙いその牙を剥いていた。

だがその理由を考えるだけの余裕はなく、段々と膨れ上がってくる不安だけがひたすらに少女の脚を動かし続ける。

「多分、あの扉の先だと思う」

「らしいな」

施設の奥は被害が少ないらしく、いつの間にか微かに見える残り火と消火装置の類いが起動したと思しき水浸しの地面ばかりが目に映るようになってきていた。やがて行く手を阻む物が、ギアの個体から何かの一部らしき茨へと変わり、その茨の数が過剰と言えるほどに増えた辺りで、鉄の扉が軋みを上げた。

「そこっ!!」

それまでの加速と体重を乗せて少女が放った蹴りは、歪んでいた扉を打ち砕き、目的の部屋への道を開く。そして彼女が目にしたのは、カイとブリジットの二人が助けるべき相手であるはずの少女と対峙し、その剣を振るう姿であった。

その様を見てからのノーティスの行動は早く、着地後すぐさま体勢を立て直して駆け出し、明らかにこちらを優先して襲い来る茨を掻い潜ってクリスに瓜二つのそれへと近付く。

少女と同じ姿をしたギアだと判断してその腕を振りかぶったノーティスの目は、やがて驚愕に見開かれた。

「なん、で」

「い、や……」

少女の耳に、恐怖心で上ずった声が聞こえる。それは紛れもなくクリス自身の声で、その言葉を放ったギアは、寸分の狂いもなく、クリスと同じ表情をしていた。そしてその現象は、少女を襲っていた違和

感の正体に気付かせるには十分に残酷なものであった。
ノーティスの体には、ソルと同様のモニターがあの時撃ち込まれていた。そして、ソルのように摘出されることのなかったそれは、指揮者であるクリスを素体としているギアの感情や、それを利用した外部からの命令を流し込んでいたのだ。やがてクリスとノーティスの距離が近づき、ギアが彼女の存在を明確に感知した時、その感情は行き先を得た直接的なものとなった。
ギアが、素体であるクリスがノーティスを恐れていたから、彼女の感情の影響を受けたギアは少女を優先して襲ったのだと。
「嫌あああああっ!!」
悲鳴と共に振るわれる力が、少女の体を強烈に弾き飛ばし、部屋の隅へとその身を打ち付ける。続けて襲い掛かる茨の槍を避けて距離をとるノーティスに向けて、ブリジットの叫ぶ声が響き渡る。
「ノーティスさん!?」
「来ないでっ!!」
駆け出そうとしたブリジットを制する声にぴたりと脚が止まり、その隙を狙って茨が地面を打つ。弾けた水飛沫は刃物となって、反応が遅れた少女へと降り注いだ。逃げられないと悟ったか、瞼を固く閉じ、急所を守るように腕を辛うじて差し出した彼女は、一向に現れない痛みに疑問を抱いて瞳を開ける。そうして開けた視界の先にあったのは、真っ赤なベストに覆われた背中と、一瞬のうちに蒸発した水の刃が霧となって男を覆う様であった。
「……事情は知ってんだろうな?」
「ソル、さん……?」
「ソル! すまない、手間を掛けた」
「んな事言ってる場合か」
遅れてカイがソルの隣に並び立ち、それぞれがギアの少女と一定の距離を保って構えを維持する。ノーティスと接触してからの一連の行動と攻撃パターンとを思い出し、カイは険しい表情を浮かべて息を吐く。そして、ソルに向けて彼は小さく呟く。『ノーティスを狙ったのは素体として囚われているクリス自身の恐怖心からくるもの』であ

り『彼女と接触した途端攻撃が苛烈さを増した』と。
　そして、その言葉を聞いたソルが最初に示した反応は舌打ちであった。
「ちっ……何をやらかしたんだ」
「恐らく広場での賞金首惨殺が原因だろう。……現場の状況を見る限り、普通の少女が目の当たりにしていいものではなかった筈だ」
「厄介事しか持ってこねえのかアイツは」
　そう言うな、と呆れたようにため息を吐き、カイはその手の剣を構え直す。茨の籠に囚われている少女を開放できれば、おそらく素体と切り離されたギアは活動を停止するはずだと短くソルに伝え、彼は再び封雷剣を翻した。
　正面からそれぞれを狙って襲い来る茨を切り裂き、躱し、籠へと向かうカイとは別にノーティスはギアの至近まで踏み込む。迎え撃つ棘を彼女は上体を捻って掻い潜り、不安定な体勢のまま腕を振り伸ばした爪でギアの表皮を引き裂いた。
　そして、怯んだ様子のギアに勝機を見出し、立て直す隙を与えぬように飛び出したソルは封炎剣に炎を纏わせる。
「っ……！」
「喰らいな！」
　だが、ギアの身体を引き裂こうとした剣は、不意に後ろから引かれるような抵抗を受けてその動きを止めた。その隙を突いて繰り出される攻撃を炎で焼き払い、ノーティスと共に飛びのいた男は、攻撃を中断した原因へあからさまに不愉快そうな視線を向けて毒づく。
「……何のつもりだ」
「それは……カイさんから指示があったんです」
「ああ？」
「……どうやら、悪い予想が当たってしまったらしい」
　服の裾を解れさせ、弾んだ息を整えながら構えを維持したままのカイが答える。目の前で再びこちらの様子を伺っているギアは、本体が受けた傷を素体に肩代わりさせていると。ノーティスがギアの体表を裂いた直後にクリスの体に傷が現れたため、ブリジットにハンドサ

インを出して攻撃を制止させたと男は険しい顔のまま続ける。
　つまり、ギアに与えたダメージはそのままクリス自身のダメージとなり、衰弱を始めている彼女ではそれに殆ど耐えようがないと、カイはそう言うのだ。疑念は抱かないでもなかったが、主たる目的の一つとして『クリスの救出』が存在している以上はそれに背くこともできず、苦々し気に彼等は表情を歪ませる。
「……面倒くせえな」
「同感。繋がってる茨切って終わりってわけじゃないの？」
「何度か試したが、一か所や二か所切った程度ではすぐに他の部位が彼女を再拘束してしまった」
「それに、一度カイさんが全部の茨を切ってくれた隙に、クリスさんを助け出したんですが、その時はクリスさんの身体からも茨が伸びて、その……またあの状態に戻っちゃったんです」
　ブリジットがカイの言葉を継いで話した内容を受けて、ソルとノーティスが不快感を露にする。二人がギアとの戦闘で把握して遅れてきた彼女らに語った事実は、結局のところ、クリスを死なせずにギアの方だけを殺してしまわなければ、クリスが衰弱して命を失うまでこの状況がずっと続くのだという宣言に他ならないのだから。
「……ホント、首突っ込むんじゃなかったよ」
　諦めたように呟く言葉は誰の耳にも入らないまま、再び始まった剣戟の音に紛れて消えていった。

　それから、どれだけの時間が経過しただろうか。囚われたままの状態となっているクリスの事もあって本体への攻撃を中々できずにいる四人と、放つ攻撃のことごとくをソルやカイに迎撃され、有効打らしい有効打を一切与えられていないギア。互いに無傷のまま続いていた戦いは、いつしか千日手の様相を見せ始めていた。
「団長、何か心当たりとかないんですか」
「……お前はどうなんだ」
「……残念ながら、特に思いつかないですね」
　襲い来る茨や殺傷力を得た水流などを捌きながら、カイとノーティ

スは一向に気の休まらない話を続けている。数秒ほどの迎撃を経てノーティスは前進し、そして何度目かの近接戦に突入する。振るう拳や脚を、ギアの肉体に直接危害を加えないように軌道を調節しつつ、なるべく相手の攻撃能力をそぎ落とそうと立ち回るうち、ふと視界に映ったある物に、少女の瞳は一気に意識を奪われた。
「なっ……!」
　そして、動きが鈍ったその一瞬にギアの両腕が振るわれ、夥しい量の水が刃となってノーティスの肌を引き裂く。そのまま水流で弾き飛ばされた少女を庇うようにブリジットが前に立ち、二つのヨーヨーを同時に熊のぬいぐるみへと変質させる。普段の攻撃などと比較しても三、四倍は大きいであろうその巨体を盾として、ブリジットは止めを刺そうとしていたギアの攻撃をどうにか防ぎ切った。
「大丈夫ですか?!」
「う、ん、まあ。……あと、一応突破口、は、見えた……かも」
「言ってみろ」
　未だに盾として在り続けるロジャーに守られながらゆっくりと立ち上がり、ノーティスは自信なさげに口を開く。ギア本体の胸元に発光体が見えた、という言葉を聞き、その発光体の色や形、光り方などの情報を可能な限り思い出させ、それらを反芻したソルとカイは一つの推測に辿り着いた。
「……坊や、ガキの方に同じ発光体が取り付けられてないか探せ」
「ジルポッドを利用したペアリング、か」
「もしくは被検体の抵抗を効率よく奪ってギアの指揮能力を強める為のバインドとバフだな、せいぜい欠陥品がいい所じゃねえか」
「だが、彼女を助けるには好都合だ」
「上等ッ」
　ソルとカイの二人がロジャーの背後から左右に飛び出し、それぞれに狙いを変えて迫りくる攻撃を掻い潜りギアの懐へ向けて駆け抜ける。危なげなく茨を躱して、向かい来る水流や水の刃に正確な電撃を浴びせて相殺しながら距離を詰めるカイと、一息に振るった封炎剣とその業火で正面からくる攻撃全てを焼き払いながら駆け寄るソル。

その体捌きや立ち回りは正反対ながらも全く同じ速度でギアへと迫り、そして迎撃を行うギア本体には目もくれることなく、二人は籠の前へと躍り出た。
「グランドッ……ヴァイパー！」
炎を纏って切り上げられた剣が、固く閉ざされた茨を燃やしながらその口を大きく開かせる。その勢いのまま、まだ火の移っていない箇所を蹴ってギアの本体へとソルは剣を振り下ろす。その攻撃を躱した少女は、ソルの着地で跳ね上がった飛沫を針へと変えて此方に刃を向ける男へと放ち、いつ来るともしれない必殺の機会を狙い続けている。
その間に、茨の再生が始まる中に飛び込んだカイが腕全体へ雷光を纏い、八方へとその光を放つ。真っ黒な炭と化し、再生する起点を失ってボロボロと崩れて行く茨の中央でクリスを抱えながら、カイはその時を待っていた。
だが、ギア本体も危険を本能的に察知したのか、ソルを攻撃していた手を不意にカイの方へと向け、四方から茨と水流での攻撃を仕掛ける。
「ちッ！」
「そこかっ!!」
やがてクリスの背中、そのある一点から茨が伸びるのと、カイが少女を突き放して封雷剣を翻すのは同時であった。カイの一閃は、彼を迎撃しようとした棘や、素体を自らの手で奪い返そうと伸び始めていた茨を切り落とし、茨の起点にあった発光体を切り裂き、淡く光る飛沫を舞い散らせた。
だが、続けて返す切っ先は迫りくる茨の全てを切り落とすには至らず、残った数本がそのままカイの肉体を突き破らんとして勢いを増す。味方の援護も届かず、全てを回避することも叶わない状況を察したか、少なからず傷を負う事を覚悟して、彼は両脚と、その身を守る両腕に力を込めた。
「くっ！」
だが、それらは決してカイに届くことはなかった。カイの攻撃に合

わせて発光体の破壊を成功させていたソルが迎撃をも合わせて行っていたわけではなく、クリスの救出に動いていたブリジットが守り切れる状況でもなかった。

しかし現実に茨はカイの数ｃｍほど手前で動きを止め、放たれるはずであった水流などは勢いを失い、重力に従い落下し、それぞれが元の水溜まりへと姿を変えてしまっている。

そのギアは、自分が動けなくなった理由が分らなかった。素体の少女が切り離されたことが直接の原因ではないか、とまず考えた。彼女自身は知る由もないが、素体の少女はあくまでバッテリーに過ぎず、相性が良ければ良いほど稼働効率が大幅に上がり、自分の肉体の損傷を共有する盾となる。素体と切り離されることは、稼働その物を妨げるものにはならないのだ。事実、ソルとカイが素体であるクリスとギアとの接続を断ち切った後も、彼女は二人を殺すために攻撃を仕掛けていた。

しかし、素体との接続が原因でないとするならば、尚更彼女に心当たりなどある筈もなかった。だが現実に体は言う事を聞かず、上位者が発した『侵入者を殺す』という単純な命令を完遂できずにいる。なぜ、どうして。

―ＬＡＬＡＬＡ―

その時、ギア細胞の中にわずかに紛れた何かが、歓喜の歌声を奏でる。少女が生まれた頃から、時折耳の奥で聞こえた歌声。もし彼女に明確な自我というものが存在すれば、その歌声の意味が分かっただろう。もし、彼女が様々な経験を経て自意識というものを持ち得ていたのであれば、自分の動きを妨げるものが何かを知ることが出来ただろう。

ただ一点の目的のためだけに生まれた指揮個体型のギアは、驚くほどに歪だった。

「やっと、捕まえた」

ノーティスの身体の自由を奪おうとしていたはずのギア細胞は、僅かずつ紛れていた共鳴基（アモレット）によって自分より大きな権限を持つ個体と共鳴を起こし、結果として命令系統を全て奪われる形となった。

金色だったはずの瞳を紅く染め、その身に浴びた裂傷による出血を腕で拭い、少女は一歩、二歩とギアへと近付く。動けなくなったギアは、ゆっくりと近付いてくる足音の正体が何であるかを、彼女に命令を下した者の識別信号で知る。その少女が生まれる前に起こった聖戦その元凶であり、全てのギアの頂点に立つ指揮個体。

彼女を制した少女は、正義の名を冠した者とよく似た信号を放っていた。

「紛れ……込んでた、共鳴基使え無かったら、ちょ、っとキツかったかな……」

「ノーティス、大丈夫なんですか」

「平気です、一応」

カイの問いかけの意図も分からぬまま、ただ相槌を打つように答えて少女は進む。指揮権限は奪い取った、ソルとカイの二人がクリスとギアを分断することに成功した、ならば、残るはこのギアを。

私がそこで座り込んでしまっている彼女を殺せば、それでこの事件は終わる。

ようやく全て終わる、という安心感よりも心を占める不快感が勝ち、その足取りを重く鈍いものへとどんどんと変えて行く。永遠に思える距離を超えて、少女は自分が自由意思を奪ったそれの目の前に足を止めて立つ。

「……？」

「……ねえ、アンタの名前は？」

彼女に感情を与える素体も今はなく、そして、ただ言われるがままに少女を依り代として生きただけの少女は、ノーティスの問いに答えるだけの知識も、経験も、自身を定義するだけの確信も、何ひとつとして持ち合わせてはいなかった。

膝をついてしゃがみ込んだノーティスは、ぼんやりと視点の定まっていない少女と自ら目線を合わせる。ゆっくりと腕を伸ばし、血に塗れた指が白い肌をした頬に触れ、やがて撫ぜる様に首筋へと赤い線を引いてゆく。

「分からないんだ。じゃあ、教えてあげる」

そして彼女は、自分が制御を奪った少女の名前を、自身もまた指揮個体型ギアである故に知ることが出来た名前を少女に告げて、慈しむようにその命を手折った。

Chapter 5 ”Termination”

Part B

Chapter 05
Termination
B

「……戻りましょうか」
　動かなくなった少女を床に寝かせ、彼女の瞼を下ろしてノーティスは口を開く。ゆっくりと立ち上がり、汗や水、血で塗れて肌に張り付いていた髪を指で払ってこちらの方へと振り向く少女の顔には、どこか疲れたような微笑が浮かんでいた。
　一時の間をおいて封雷剣を鞘へと仕舞い、カイは言葉とは裏腹に一歩も動こうとはしない少女の方へと歩み寄る。
「有難う、ノーティス。お陰で助かった」
「なんで殺したって聞かないんですね」
「……このような言い方はしたくなかったが、あのギアに拘束され衰弱していくクリスさんや、此処に来るまでで得た情報から討伐対象になり得ると判断した。あの時抵抗するようであれば、私が自分で討つつもりだったんだ」
　渋い表情を浮かべてギアの亡骸へと視線を移すカイ。表情を変えず片眉を跳ね上げる事で疑問と不快感を表明した少女をちらと見て、彼はソルやブリジットには聞こえない程度の声でノーティスの問いに答えを提示した。
「恐らく彼女は、人間の命をエネルギーにして稼働するギアだった」
「……自我とか善悪とか以前に、人間を餌にするのとは共存できませんってわけか」
「……不服そうだな」
「別に。子供じゃないんだから、その辺りの事情くらいは分かりますよ」

悪魔の棲む地に居た彼女（ディズィー）のような存在こそ希少であり、多くのギアは人の敵であるか、自我を持つ事すらままならない道具であるかのどちらかしかない。そんな事は今更誰に言われるでもなく理解している。彼女自身がその希少な存在の一人であり、人の敵であるギアを討って生きていたのだから。

しかしそれでも、人とさして変わりない姿のギアを殺すことが平気か、無抵抗の相手を嬉々として殺せるのかという事は別の軸に依って立つ問題であり、それこそカイが『自分の手で討つつもりだった』と発言した大きな理由でもあった。

「いっそ敵らしい姿をしていてくれれば、と思うのは傲慢なのだろうな」

「……見た目で絆されるようなタマかよ」

「……ただの感傷だ。誰もがみな、お前のように敵は敵だと割り切れる訳ではない」

思わず呟いた言葉に悪態をつくソルを横目で見、そのまま男は踵を返す。その後、先に壁際に寝かされていたクリスを抱き上げ、未だに遠くで鳴り続ける警報の音を聞きながらカイは三人を促すように口を開いた。

「頑丈な施設のようですが、あまり長居はできそうにありません。今は脱出を優先しましょう」

「そっちのガキは？」

「私が連れて行く。先導を頼めるか」

「……しゃあねえな」

ソルを追い掛ける様にカイが駆け出し、先行した二人に着いて行くようにブリジットが一歩を踏み出す。だが、一向に動こうとしない少女に気付いたのか、扉の前まで進んだ足を止め、心配そうな表情を浮かべたまま振り返る。

そこには、初めて会った時のように、まるで何事も無かったかのような表情を顔に張り付けたままギアの亡骸を見つめるノーティスの姿があった。

「……逃げないんですか？」

問いかけられた言葉に無言で従い、少女はゆっくりとギアから離れる。そして扉へと歩き始めた少女と、扉の前で彼女を待つブリジットの距離が縮まり、ノーティスがその横を素通りしようとした時、ぴたりと止められた歩みと共に金色の瞳が伏せられた。
「何で残ったの？」
「あの時の事を、一言謝りたかったんです。触れられたくない部分だったことに気付かなかったのは、ウチが迂闊でした。ごめんなさい」
そう言って頭を下げた少女を見て、ノーティスはきょとんと目を丸くして、そして少しの空白の後、呆れにも似た表情の中に、どこか救われたような色を浮かべて小さく笑う。
「その話なら、いきなり引っ叩いちゃった私も悪いしお互い様でしょ」
私の方こそ、と頭を下げる少女と小さく笑いあい、踵を返し脱出のために二人は歩き始める。今更防火装置が稼働したのか水浸しになっている廊下を歩き、力尽くで抉じ開けられた防火扉などを潜り抜け、火の勢いの弱まる中で無言のまま歩いていたブリジットが、やがてその小さな口を開いた。
「それに、前にも言いましたけど、放っておけなかったんですよ」
「……なんで？」
「助けてくれた時の言動とか、話し方とか。なんとなく、不安定に見えたんです」
地上階へと向かう階段に差し掛かった辺りで、再び二人の足が止まる。
「最初はそれだけだったんですけど、取捨選択、ってノーティスさん言いましたよね。最初に言われたとき、本当に腹が立って。選択しなくても良い人がどうしてそんな事を言うんだ、って思いました」
「……」
だからという訳ではないけれど、そう言われると尚更気になって。状況が状況だけに手を切るわけにも行かなかった。ブリジットは続けながら、その体を前に進める。
「でも、気付いたんです」

一歩階段に足を掛け、続けて二つ、三つと脚を進めた少女は踊り場まで上ると、振り返ってノーティスの方へと顔を向ける。未だ消えない炎の色にその白い肌を染めて、追い掛けてきた少女に手を伸ばして彼女は声を上げた。
「どんなに強くても、どんな力を持ってても、手の届かない場所は絶対にあるんですよね。ウチ達がこの事件の被害者たちを……あのギアを助けられなかったみたいに」
「っ」
「確かに、ウチには皆さんほどの力もありませんし、貴方の言うとおり、馬鹿で、無鉄砲なのかもしれません」
差し出された手に指を触れ、その手を離さないようにぎゅっと握り締める。彼女の事を詳しく知るわけでも、彼女と長い時を過ごしたわけでもなければ、彼女に対してそこまでの感情を向ける理由だってありはしない。だが、その少女は。
事もあろうにこの馬鹿（おひとよし）は、たった一つの単純な理由で、少女へとその手を伸ばしたのだ。
「でも、届かないからって、目の前で苦しんでいる人に手を伸ばす事をやめたくないんです」
「馬鹿じゃないのって言ったけど、訂正する。……アンタ、大馬鹿だよ」
呆れたように笑うノーティスを見て、やがて彼女は気恥ずかしそうに視線を逸らす。口籠るようにもごもごと動かされていたその唇から、やがて諦めを伴って吐き出された言葉に、今度はノーティスが同じような表情を浮かべる事となった。
「……表情を変えずに泣く人に気付ける様になったのは、多分進歩だと思いますけど」
「……恥ずかしがるくらいなら言わなきゃいいのに」
火の気の弱まった個所を辿るように地上階のホールに出た二人が目にしたのは、警察機構の関係者らによって制圧、拘束された賞金首や研究者らと、ノーティスが討ち取ったギアの亡骸を調査するカイや

その部下の姿であった。
「ノーティスさん、アレって……？」
「ああ、リーガルっていったっけ。此処の親玉だよ」
　ノーティスがさも当然のように語った言葉に、少女が愕然とした表情を浮かべる。ブリジットの反応の理由が分からずに首を傾げるノーティスであったが、その後数度のやり取りを経て、彼女の反応がどこから来たのかを少女は知った。
「自分の身体もギア化させてたみたい。あの子を経由して自分が命令系統のトップに立ちたかったんじゃないかな」
「そう、なんですね」
「……ギアになんて好き好んでなるもんじゃないのにね」
「ノーティスさん……」
　ため息とともに吐き出された言葉に一抹の不安を抱きながら、ブリジットは少女の視線の先に在る、かつては人間だった者に視線を移す。その側で部下と共に現場検証を始めていたカイがこちらに気付き、その瞳に小さな驚きを湛えて二人の方を見据えた。
「二人とも無事でしたか」
「施設も思ったよりは無事だったんで、そんなに脱出には苦労しませんでしたよ」
「それなら良かった」
「あの、カイさん。クリスさんの容体は……」
　おずおずと切り出したブリジットに、カイは険の取れた柔らかな笑みを浮かべて答える。命に別状はなく、しばらくの療養が必要にはなるが、後々に引きずる様な外傷などもなかったと。そのカイの口ぶりに安心したのか、ブリジットはほっと胸をなで下ろして隣に立つ少女に笑いかける。曖昧な微笑をもってそれに答え、ノーティスは誰かを探すように視線を左右に振った。
「アイツなら此処にはいないぞ」
「……相変わらず好き勝手に行動してるんですね、あの人」
「リーガルの事について話を聞こうと思っていたんだが、逃げられてしまったよ」

苦笑いとため息とを口にして、呆れたように肩を竦めるカイの視線を受け、少女は小さな後悔を覚える。あの男と同じように逃げるべきだった、と。

当然ながら出足の遅れた逃走を彼が許すはずもなく、その後彼女はカイから尋問という名の説教を受けることになってしまった。

おおよそ数十分、という立ち話にはいささか長すぎる様に思える時間を拘束され続け、明らかに消耗が見え始めたノーティスの様子を確認すると、カイは不満げな表情を浮かべつつもため息と共に追及を打ち切った。

「これに懲りたら、少しは人を頼ることを覚えなさい」

「肝に銘じておきます……」

「ええと、大丈夫ですか？」

延々と説教されて大丈夫な訳ないでしょ、と悪態をつきつつも彼女の表情に毒気は見えない。だったらもう少し付き合ってもらおうか、などと嘯くカイから距離を取るように後退ったノーティスを見て、彼は小さく笑みを浮かべて冗談だと少女を引き止めた。

「捕らえた者達の尋問や後の調査は我々で引き継ぐ。クリスさんについても家族への連絡は済んでいる、容態が回復し次第家族の元へと帰すことになるだろう」

「じゃあ、あとは任せます」

「ああ。後は報奨金についてなんだが、直接貴方達が討伐、逮捕した賞金首の賞金と謝礼金を含めた額を用意させてもらうつもりだ」

そう言いながらメモを取り出すカイと、慣れた手つきで渡されたメモに英数字の羅列を記してゆくノーティス。

「今すぐ用意できる訳じゃないでしょうし、口座教えれば大丈夫ですよね？」

「ああ。ブリジットさんもお願いできますか」

「あ、はい。でもいいんですか？　あんまり戦いでは力になれませんでしたけど……」

「そもそも、貴方の行動が無ければこの事件に気付くのが更に遅れていました。その事を考えれば我々が謝礼を用意するのも当然の事で

す。なのでお気になさらず」
　戸惑いながらも、ノーティスに倣って少女は自分の口座を示す文字列を、名前と共に書き記し、四つ折りに畳んでカイへと返す。それを手にしていた用箋挟に留め、呼びつけた部下へと手渡し、彼は振り返って二人へと真面目な表情と視線を向けた。
「お二人は、これからどうするつもりですか？」
　カイの問いかけに、二人は顔を見合わせ、それぞれ首を捻って考え込む。回答を急がせるでもなくただ黙って待つカイに対して、しばらくの沈黙の後最初に口を開いたのはブリジットであった。
「もう少し滞在してから、また他の街に行ってみようかと思います。目的はありますけど、すぐにここから離れなければいけないわけじゃないですし」
「でしたら、滞在期間中にまた会う事もあるかもしれませんね」
「そうですね。……次は偽手配書騒動とか、そういう事件関係なしにお会いしたいです」
　そう言って二人は握手を交わす。そしてカイの視線は、所在なさげにぼんやりと立っていたノーティスの方へと向けられた。
「私も、同じような所ですね。用事があって此処に来てたわけでもないですし、剣とかバッグとか、色々準備済ませたら出るつもりです」
「……そうか。ここに残るのなら、頼みたい事もあったんだが」
「あー、ええと……一応考えときます」
　そう早口で言い切り、カイが手渡したメモをひったくるように手に取りノーティスは足早にその場を立ち去った。その様子を見て不思議そうに首を傾げるブリジットと、ため息を吐いてその後姿を見送るカイ。追わなくていいんですか、と問いかけた言葉は彼の気の抜けた言葉で霧散し、やがてどちらともなくその場を離れるまで、険の取れた空気が二人を包んでいた。
「ここに居たんですね」
「……そりゃ、剣ほったらかしておくわけにもいかないしさ」
　水浸しになっていた服をハンガーに掛け、シャワーで濡れた髪を乾

かしながら軽装の少女がシャワールームから顔を出す。
テーブルを囲うように並んだ椅子にそれぞれ腰掛け、初めて会った日の夜のようにそれぞれマグカップを手に取り口を付ける。時計の針の音だけが鳴り続ける中、どちらからともなくカップから口を離し、コトリという音が二つ重なった。
先に口を開いたブリジットは、カイと別れる直前の話をふと思い出し、一つの疑問を口にした。
「カイさんの言ってた頼み事って何だったんですか？」
「……んー、ボディーガード、かな」
「ボディーガード？」
思わずオウム返しをした少女を気にすることなく、ノーティスはカイから受け取った一枚の紙をポケットから取り出す。
「ロンドン市街で私塾を開いてるマリーナって人と、その妹のソラリアって子の手伝いをして欲しいってさ」
「私塾、ですか」
「ちょっと訳アリらしいんだよね。一応両方の都合が合えばって事だからこっちが受けてすぐって訳じゃないみたい」
微妙な表情を浮かべるノーティスに対して、彼女が言葉を濁した理由を求める様に思索にふける。単純に女性だけでの生活を気にして、とすると十分に越権行為として認められるし、そこに別の意図や関係、思惑があったとしても、個人を贔屓して彼女のような人物を護衛に付けるほどに、カイは公私混同するような人物ではない筈だ。
であれば、ノーティス自身が口にしたように、彼女のような人物が側にいた方がいい、と考えるだけの明確な理由があるということになる。それは何だ。
そこまで考えた当たりで、一つの予測にたどり着いた。
「ええと、ひょっとして、なんですけど」
「何？」
「その、マリーナさんかソラリアさん、どちらかがギア、だったりします？」
ブリジットの言葉に、ノーティスは思わず目を見開いた。

「……いつの間にそんな鋭くなったの？」
「人をバカみたいに言うのやめてもらえませんか？」
「ごめん、まあ正解。ソラリアの方が人型ギアで……ヒュドラ事件の時に保護されたみたいでさ」
　ギア細胞の抑制装置は付けてるようだが、肝心の制御そのものを知らないらしく、可能であれば制御の方法を教えてやって欲しい。そういう主旨の書面をカイから預かってきた、そうノーティスは続ける。それに対して微妙な表情を浮かべるブリジットに眉をひそめ、ノーティスはマグカップに手を伸ばした。
「今回の子を殺すしかなかったのは特性の問題。取捨選択って言ったでしょ」
「分かってはいるんですが、やっぱり簡単には納得出来そうにないですね」
「普通はそうじゃないかな」
「……ノーティスさんは」
「今度は何？」
　どれくらい、そうやって拾えなかったものを見てきたんですか。そう喉まで出かかった言葉を押し込め、何でもないですと首を横に振る。それを聞いたところで自分に何が出来る訳でもなければ、思い出したくない事や、秘めておきたい事を無理に聞き出すことに繋がりかねないのだから。
　そう結論付けて、しかし一つだけ、聞かなければならない事がある、と彼女は思い直した。
「クリスさんとは、会っていかないんですか？」
「……そのつもりだけど」
　どうしてとは聞けない。彼女らがあのギアと対峙していた時、クリスと繋がっていたギアがノーティスとの接触で恐怖からくる悲鳴を上げた事、ノーティスへの攻撃が他の三人と比べても明らかに苛烈であった事、そして、ソルとカイの二人が交わしていた会話がブリジットには聞こえていたのだ。だから会おうとしない理由を聞くことはできなかった。

だが、ノーティスが立ち去った後、意識を回復したクリスと少しだけ話すことが出来た。そして彼女との会話を経て、少女の心にある決意が芽生えた。
「せっかくですし、会っていきましょうよ」
「なんで」
「やっぱり、挨拶はしていくべきじゃないですか？　取捨選択っていうなら尚更ですよ、拾えたものは大事にしなくちゃ」
結局、人の話を聞こうともせずに押してくるブリジットの圧に負けて、少女は諦めたように大きなため息を吐き頷いた。

「それでノーティス、考えは決まったのか？」
「……やっぱり悪いんですけど。まだ、賞金稼ぎやってようかなって思います」
「……そうか。もし腰を落ちつけたくなったら私の方まで連絡してくれればいい、マリーナさん達も歓迎する、と言っていたよ」
数日後の朝。カイの言葉に礼を返し、大剣を背負った少女は、新調したバッグを肩に提げて笑みを浮かべる。そして踵を返し、宿場の前を離れようとしたノーティスの背中を、カイとは違う人物の声が呼び止めた。声のする方へと振り返ってみれば、ブリジットに手を引かれ、戸惑いながらこちらを見つめる一人の少女の姿がそこにはあった。
「クリス？」
ノーティスの方へと向けられている視線に含まれる感情に、彼女は覚えがあった。少女を助け、ブリジットを含めた三人で居た時には無かったもの、そして、カジノの地下でギアと対峙した際、あのギアから向けられたもの。少しの間を経て、ノーティスはそういう事か、と得心する。
ベッドで目を覚ました彼女が此方を何か考え込むように見ていたのも、その後もこちらを特に恐れる様子が無かったのも、決してノーティスが賞金首を屠る姿を見て平気だったわけではなく、単に恐怖心からその記憶を思い出さないようにしていただけなのだと。

「もう回復したんだ」
「……はい」
「ごめんね、危ない目に合わせちゃって」
「いえ、そんな事、は……」
　言い淀む黒髪の少女を見て、ノーティスは困ったような笑みを浮かべる。クリスに非がある訳ではないという事は理解している。自分を助けてくれた人物とはいえ、人間離れした力を振るって人を殺していたような者と笑顔を浮かべてやり取りが出来るような人間など、そうは居ないのだから。
　ましてやそれが、賞金稼ぎや聖騎士団といった戦場を知る者ではなければ尚更。
「……えっと、その、助けて頂いて、ありがとうございました」
　だからこそ、恐れや戸惑いこそすれ、嫌悪を見せない少女の行動がノーティスには不思議に映った。ノーティスには知る由もないが、クリスは銃によって撃たれて平然としていた少女が、大剣を振るって賞金首を真っ二つにしたところで気を失っていたのだ。
　人並外れた頑丈さや怪力によってもたらされる行為を恐れはしても、『人の形を外れた化物』としての彼女を恐れられるはずはないのだから、クリスがノーティス（話が通じる人物）を過剰に恐れ、嫌悪する事にならないのも当然であった。
「どういたしまして。もうちょっと露骨に避けられるかと思ってたよ」
「でも……助けてもらいましたし、お礼も言わないのは良くないと思って」
「気まぐれみたいな物だし、そんなに気にしなくて良いんだけどね」
　そう言いながら彼女は、正面に見える黒髪にぽんと手を触れ優しく撫でる。突然の事に瞬きを忘れていたクリスは、やがて告げられたノーティスの科白に言葉を詰まらせた。
「元々黙って出ていくつもりだったんだけど、最後に話せて良かったよ。元気でね」
「……最後、って」

クリスが見せた明らかな動揺に、そういう意味じゃないんだけど、と肩を竦めて少女は淡々と事情を話す。遅れて納得を示した少女に改めて笑いかけ、ノーティスは今度こそと別れを告げて踵を返した。

これから何処へ行こうか、そういえばあの時朝食を食べ損なってたな、そう益体もない事を考えながら街並みを横目に歩き、やがて街の出口まで差し掛かった辺りで背後から息を弾ませ駆け寄る人影に気付いて立ち止まる。

「……ブリジット？」

「はいっ」

弾んだ声が追い掛けてきた少女の口から飛び出す。当然のように隣に並んで歩き始めた彼女の姿を見て、ノーティスの口から出たのはため息であった。

「いや、はいじゃなくて。事件も終わったし別に一緒に行動する理由って無くない？」

「それはそうなんですけど、どっちにしろ二人とも行く当てはないですし。だったらもうちょっと一緒に行動するのも別に良いと思うんですよね」

「……そうかもしれないけどさぁ」

呆れた顔をこちらに向けるノーティスを一切気にする様子もなく、ブリジットは笑いながら続ける。いつぞやと同じ言葉を、いつぞやとは違う心持ちで。

「それに、ウチだって言いましたよ。危なっかしい人は放っておけない、って」

そう言ってニヤリと笑う少女と、その言葉に諦めたようなため息を再び吐いた少女は、街道を歩き続ける。途中で通り掛かった馬車を呼び止めその客車へと乗り込み、二人は荷物を置いて腰を落ちつける。

先程までとは明らかに流れる速度の変わった景色を見ながら、ブリジットは隣に座る少女へと問いかけた。

「これから何処に行きましょうか？」

そして、金色の瞳の少女はふと何かを思い出したように目を見開き、隣へと悪戯っぽい笑みを浮かべて答える。

「そうね、だったら一か所だけ行っておきたいところがあるんだけど、一緒に行く？」
「構いませんよ、どこなんですか？」
あれからもう四、五年は経つというのに、向き合う事を恐れてまだ弔いにすら行くことが出来ていなかった場所。彼女がついてくると言い張るのならば丁度いい。黒海を越え、大陸を渡る大移動、遥か遠い国までの道程に付き合ってもらおうじゃないか。
美味い酒もあると聞いたし、何ならそこで数日過ごすのも悪くはない。
「ニューデリー」
「インドですよね。明らかにカイさんに飛空艇の段取りを融通してもらった方が早かったですよね」
「港町まで出れば民間のも出てるし大丈夫でしょ。別にお金に困ってるわけじゃないし？」
そういう事を言ってるんじゃないんですよね、と呪詛のように吐かれる言葉をいなしつつ、少女はこれから向かう先へと思いを馳せる。随分と遅くなってしまったが、今度こそはちゃんと彼女らに詫びよう、死にたがりに付き合わせてしまった埋め合わせはしなければならないと。
首からチェーンを伝ってぶら下がるメダルの欠片が、隙間から差し込む日差しを受けて、一際まばゆい光を放っていた。

ニューデリー郊外、街道沿いのとある村。同行していたブリジットと一度別行動をとったノーティスは、ある酒場へとその足を向け、入口の扉に手を掛け建物へと足を踏み入れた。
怪訝そうな表情をあちらこちらから向けられるも、一切気にした素振りを見せずにカウンターへと歩いてゆき、マスターと思しき女性の正面へと腰掛ける。
「いらっしゃい、初めて見る顔だけど。その恰好、元聖騎士団の人？」
「うん、まあそんなところ」
手荷物を床に置き、氷水やおしぼりを差し出したマスターに会釈を

返した。
　おおよそ二十代半ばといった所だろうか、整った顔立ちの女性はノーティスの姿を見て少し迷いを見せた後、おずおずと確かめる様に口を開く。
「一応確認したいんだけど、お酒は飲める年齢よね？」
「じゃなきゃ酒場に来ないでしょ」
「それもそうか。それじゃあ、何にします？」
　人当たりのよい笑顔を浮かべて問いかける女主人に、少しの間をおいて少女は答える。
「知り合いから美味しい地酒があるって聞いてるからさ、それ貰える？」
「……ウイスキーですけど、飲み方はどうしましょうか？」
「えーと、一人でこの村に来てる訳じゃないしシングルで、氷はいいや。あとチェイサーはミネラルウォーターでお願い」
　注文を受けてその場を離れようとした女性に対して、それまでの反応から何らかの予想がついたのか、引き留めるでもなく少女はある人物の名前をポツリと口にする。
「その知り合い、スレイヤーって言うんだけどさ。知ってる？」
「……父の代からお世話になってる常連のおじ様ね。どういう関係なの？」
「聖戦中に結構大きな借り作っちゃったのよ。だから一つだけ伝言お願いしたいんだけど、良いかな？」
　ノーティスは、ポーチから小さなボタンを一つ取り出し、バーカウンターに置く。そして、吹っ切れたような笑みを浮かべて言い切った。
「次会ったときはその腕を毟り取ってやる、って伝えて」

Ｇｕｉｌｔｙ　ＧＥＡＲ　Ｘｔｅｎｓｉｏｎ　Ｅｐｉｓｏｄｅｌ－
Ｇｏｌｄｅｎ　Ｅｙｅｓ－
－ｆｉｎ－
Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　ｔｏ　Ｅｐｉｓｏｄｅ２　－Ｃｏｍｍｏｎ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　０２　―Ｃｏｍｍｏｎ　Ｃｒｏｓｓｂｉｌｌ―

Ｔｒａｉｌｅｒ―ＪＵＤＧＥＭＥＮＴ―

「ねえ、イセネ島から住人が消えたって噂なんだけど」

「……ああ、あの話か」

――それは、ある噂話から始まった。

「本当なんですか？　住んでた人達が誰もいなくなるだなんて、普通有り得ないですよ」

「それを調べに行くのが今回の目的。何かしら大変なことになってるとは思った方がよさそうだね」

――千人にも満たない住人が住む、南海の孤島イセネ。その立地や地形から聖戦においてもギアの侵攻はほとんどなく、かつての平穏をそのまま残していた土地。

そんな島からある日突然、全ての住民が姿を消してしまったという。

――最初は皆が一様に単なるデマや都市伝説の類いであろうと高を括っていたが、噂話を聞いて島に向かった者たちが帰還せず、またイセネへの連絡がいかなる手段をもってしても通じなかった点から、彼らはそれが単なる噂話でない事と、情報が伝わって来ていた時点で既に、事態は取り返しのつかない所まで来てしまっていたことに気付いた。

「警察機構が調査隊の編成を進めてる、って話だったけど……」

「……正直、警察の人には見せられない状況ですよね、コレ」

「そうだね。いっそ討伐隊でも組んだ方が良いんじゃないかってレベ

ルだよ」

——消えた住人の捜索と『イセネで目撃されたという化物』の実態についての調査。

街で聞いた話を元に、真偽の知れぬ噂話を追いかけていた少女らが見たのは、あまりにもおぞましい光景であった。

「なるほど……コイツが今回の首謀者って訳か」

「この資料、クリスさん達を狙ってた人が持ってた物でも見た事のある記述があります」

「イヌス……何だっけ、異界の王？　でもアレって上位世界（バックヤード）絡みの与太話みたいなものだったような……」

——動物や家畜の姿すら見えなくなった町や村を跋扈するギアの群れ。僅かに残っていた者たちを襲い喰らう化物の姿。

まるで聖戦の最中に巻き戻ったかのような惨劇が、かつては平和だった島を襲う。

「プレゼントを用意しておいたよ。受け取りたまえ！」

「ッ……悪趣味な玩具持ち出して喜んでんじゃないわよ！」

「逃がしません！」

——そして、人でありながら人を超えんとし、遂には『異界』と呼ばれる世界への扉を開いた男。

「世界に君臨するのは、闇を照らし出すのは正義ではない……審判だ！」

——身の丈を越えた人の業に、罪に、無尽の刃をもって審判（JUDGEMENT）は下される。

Guilty Gear Xtention

Episode 02

|Common Crossbill|

プロローグ

とある街道から数百メートルは離れた荒野。かつて町があり、畑があり、人の営みがあった場所は、ギアとの戦いによってそれらを一夜にして失い一面を荒れ果てた大地へと変えてしまった。

そして、今となっては動くもののない筈のその一角から、轟音を伴って砂埃や石材などの破片が爆風のように舞い上がる。

風に巻かれて砂嵐が起こり、やがてそれが収まるとその中心に月明りに照らされた人影がぼんやりと浮かび上がる。既に治り始めている外傷と瞼を塞ぐ乾いた血を気にする余裕もなく、その人影は肩で息をしながらも、自身の大剣を支えにしてゆっくりと立ち上がった。

「彼のような苛烈さからは程遠く、あの青年のような優れた技も持ち得ない。正直なところ、あの時はあまり期待もしていなかったがどうして」

「っ、はあ……」

明確な敵意を湛えた瞳が、正面で嘆息する男を突き刺す。だが彼はその視線を軽くいなし、砂埃を浴びて少しだけ乱れた衣服を何事もなく整え、その指を鳴らした。

「なかなかのセンスだ、悪くない。だが力に依りすぎている、大剣の投擲は選択肢として無くはないだろう、速度も精度も十分。しかし、視線や振りかぶる動作は隠した方がいい、君のそれでは躱してくれと言っているようなものだ」

「まだっ！」

「いいや、今回はこの辺りで終わりにしておこう。残念だが、今の君に私の肘から上を取ることは難しいだろうからね」

そう言い切った男は、少女の振り下ろした剣をあっさりと受け止め、何事も無かったかのように新しく生えてきていたその腕で峰を軽く打ち据えた。

「ッ!?」

剣ごと横薙ぎに吹き飛ばされ、地面を転がってゆく少女を横目に、男は肩に掛けたマントを広げる。するとそのマントはみるみるうち

に大きな蝙蝠のシルエットを形作り、男をその真っ暗な影の中に飲み込み始めた。暗闇に完全に溶けてしまう直前、彼は目の前の少女に切り落とされた筈の腕を振って笑う。
「有言実行、良い心掛けだ。これからも忘れないようにしたまえ」
「……ご丁寧にどうも」
体を起こそうとしているうちに消えてしまった男に対して毒づきながら、少女は自身の身体を検める。不死紛いの化物程出鱈目ではないとはいえ、自分の身体（GEAR細胞）も相当だな、と自然治癒が進む肌を見て大きなため息を吐いた。
時刻は深夜の1時を回ろうかという頃、肌を刺す夜風が疲れ果てた意識を覚醒させる。
「……腕一本やった割に達成感無いなぁ」
身体に付いた砂を払い、背中のホルダーに剣を提げ、ノーティスは宿に向かって歩き始める。不満を湛える言葉とは裏腹に、脚を進める少女の表情はどこか晴れやかなものであった。

明かり一つ点いていない真っ暗な部屋。物音をなるべく立てないようにと扉を開け、微かな寝息の聞こえる中少女はシャワールームへと足を忍ばせる。汗と砂でべた付く衣服を脱衣籠へと脱ぎ捨て、脱衣所の扉を閉めてそのままノブを捻った。
少しの間をおいて頭上より降り注ぐ雫をその身に浴び、身体を覆う不快感と疲れをまとめて洗い流す。
額から瞼に掛かる髪をかき上げて髪を洗い、泡と共に排水口に吸い込まれてゆく水の流れを無意識の内に見つめてしまう。やがてはっとしたように顔を上げ、流石に疲れたんだと大きく息を吐いてシャワーのノブへと手を伸ばす。
湯の勢いも止まった後、毛先や頬を伝う水滴を拭い取り、乾き切らない髪をタオルにくるんだ少女は脱衣所で着替えを済ませて部屋へと戻った。
「……」
すっと目を細め、ベッドで寝息を立てる金髪の少女に視線を向け

る。月明りがカーテンの隙間から差し込む室内、眠っているブリジットの側に静かに腰掛けノーティスは欠伸を噛み殺した。
　このまま眠ってしまおうか、と考えかけたところでふと思い立ち、バッグに腕を突っ込んでその中からメダルを取り出す。それに唇を寄せて小さく歌を口ずさめば、メダルはやがて淡い光を放ち始めた。
「……ふーん、イセネ島の方か。そんなに離れてないし追い掛けてみても良いかも」
「ん……ノーティスさん？」
「あれ、ごめん。起こしちゃった？」
「いえ。帰って来てたんですね」
　体を起こして寝ぼけ眼でノーティスの方を見るブリジット。やがてノーティスが持っていたメダルの光に気付いたのか、不思議そうに彼女はその首を傾げる。
「それは……？」
「国際手配中の賞金首がソロモン諸島の方に逃げたって情報見掛けたから、昼間ちょっと団長に確認をね」
「……どうだったんですか？」
　ブリジットの問いかけにノーティスは肩を竦め、その上体をベッドに投げ出す。
「警察でも目撃情報は掴んでるってさ。ここでやることも大体終わったし、明日からちょっとそっち向かってみよっか」
「わかりました。じゃあ明日はハイヤーなり探さなきゃですね」
「それは今日の内に捕まえたから大丈夫。お昼前には出るから時間だけ気を付けてね」
　ノーティスさんの方こそ、と微笑み再びベッドへと体を沈めるブリジットを見て笑い、少女も眠りの海に身を投げ出すようにその体を捩った。
　しばらくの時を経て二人分の寝息が微かに聞こえ始めた室内。バッグに仕舞われていたメダルが放つ光に気付く者は誰一人として存在しない。

「お客さん、どちらまで？」
「ちょっとソロモン諸島まで。こう見えても賞金稼ぎでね、国際手配犯がそっちの方に逃げたって聞いたからさ」
　二人で旅を続けるようになってから何度目かの馬車で、ノーティスは馬を駆る男のすぐ後ろ、幌の窓から顔を覗かせ世間話に花を咲かせる。
「へえ、見えないね。てーことは一緒にいる嬢ちゃんもそうなのか？」
「そ。見た目で油断してると痛い目見るから気を付けた方が良いよ」
「怖い怖い。強盗されないように気を付けないとな」
「しないって」
　冗談めかして言葉を交わす二人の話を聞きながら、心なしか不機嫌そうに眉根を寄せているブリジット。それに気付かないまま話をしていた二人だったが、ある時不意にノーティスが口にした言葉に、男の表情が強張る。
「……それと、イセネについても聞きたいんだけどさ」
「イセネ？　あんなド田舎に何の用だ？」
「観光。と言いたい所なんだけど……村の人間が消えた、って噂聞いたのよね」
「ああ、アレか……っても俺もその噂以上の話は知らんな。行方不明者がいるとは聞いてるが、国際手配犯を追い掛けるような嬢ちゃん達にはちょいと小粒じゃないか」
　一応これから行く港町の人間が調査隊を組んでいてその中に賞金稼ぎもいる、という話をしていた男が一度言葉を止め、しばし考え込むように唸り声を上げた後に一言。これこそ嘘くさい噂なんだが、と前置きして口を開いた。
「そのイセネなんだが、化物がいた、って話もあるらしい。噂にしたって正直気味も悪いし、今行くのはやめといた方が賢明じゃねえか？　いくら腕に自信があるったって、女の力でギアだとかと戦う訳にもいかないだろ」
　目的地に到着したことを確認して、男は馬車を道の端に寄せて止める。荷物を確かめ席を立とうとするノーティスよりも早くブリジッ

トはそそくさと客車から降り立ち、戸惑う二人をよそに財布を取り出し男の傍まで歩いてゆく。
「ご忠告ありがとうございます。これ運賃です」
「おう。気をつけろよ、嬢ちゃん」
「ええと、勘違いさせちゃったならすみませんけど……ウチ、男ですよ」
不機嫌そうに呟くブリジットと、突然の衝撃に目が点になる男。そして。
「……マジ？」
「……なんでアンタが知らねえんだ」
「……気付いてなかったんですか」
予想だにしなかったカミングアウトに唖然としているノーティスの姿に、呆れる男二人の姿がそこにはあった。
その後幾らかの噂話を聞き、馬車の主に礼を告げてノーティスとブリジットの二人は港町の中へと揃って足を踏み入れる。先程の性別問題が尾を引いているのか、微妙な表情を浮かべてブリジットと若干の距離をとって歩く少女と、これといった反応はしないまでもノーティス同様に気まずい雰囲気を醸し出す少年。
互いにどうしたものか、と相手の反応を伺いながらもこれといった行動をとれるでもなく黙々と進むうちに、酒場やギルドなどが立ち並ぶ街の中心部が見えてくる。
「……じ、じゃあ、私はちょっとギルドの方に顔出してくるから」
「ウチは港に行ってます、時間とか行き先の案内書貰っておきたいですし」
そう一言ずつ、ギクシャクとした空気のままに言葉を交わして二人は別れる。そのまま街道を歩き去るブリジットを見送り、少女はくるりと踵を返した。
「ああは言ったけど、先に酒場寄ってからにしよ……」
自分の行動があまり品の良い事ではないというのは重々承知していたが、それはそれとして『旅の同行者が異性であった事』や『それに気付かず同性だと思って接していた事』をすぐに流せるかと言われ

ると首を横に振るしかなく。そして「飲まなきゃやってられるか」と思ってしまい、実際に「飲んで忘れよう」と行動に移してしまう程度には、彼女にとっては重大な失態であった。
「いらっしゃ……ウチは酒しか扱ってないぞ」
「捕まるようなトシじゃないよ。ウイスキー貰える？　バーボン、ダブルのストレートね」
「……あいよ。それで何の用だ？　ここらじゃ見ない顔だな、酔っ払いにでも来たか」
　半信半疑、といった様子のマスターらしき壮年の男がノーティスから代金を先に受け取り、手慣れた様子でボトルとグラスを持ち出す。そして注文通りに注がれたグラスを受け取り、少女はくい、とそれを傾げて一気に呷った。
「賞金首を探してててさ。えーっと、これなんだけど何か心当たりとかある？」
「ん？……コイツぁ国際手配犯か、女一人で狙うような標的じゃないぞ」
「アンタには関係ないでしょ、良いから答えてくれない？　知ってる事なら何でもいいからさ」
　不愉快そうに眉をひそめるノーティスと、同じように不信感から眉根に皺を寄せるマスター。数秒程度の睨み合いの末呆れたように彼は首を振り、ため息と倦怠感とを乗せて少女の問いに対する答えを吐き出した。
「それは構わないが、つい数日前に別の賞金稼ぎから同じ話を聞かれたばかりだ。俺の記憶違いじゃなければこの男で間違いないし、ソイツがもう討伐してるんじゃないか？」
「やってみなきゃ分かんないでしょ？　教えなさいよ」
「そうは言うがな……」
　何を思い出したのか、ノーティスの姿をちらと見て大袈裟なため息を吐く男。その様子にあからさまな不快感を示した少女に気圧され、彼は絞り出すように彼女の疑問に答えた。
「……その恰好、聖騎士団の制服の改造品だろ。前に来た賞金稼ぎが

同じような赤いジャケットの男だったんだ」
「げっ……」
「その様子だと教えるだけ無駄みたいだな……知り合いか？」
「一瞬で酔いが醒める程度の仲だけどね」
　頭を抱える様にうなだれる少女を見ながら、彼女の前に来た賞金稼ぎの威圧感や、彼に絡んだ酔っ払いの末路を思い出しもう何度目かも数えたくなくなったため息を吐く。
　やがて諦めたように、空になったグラスを片付けようとして伸ばした手が少女のものとは思えない力で押し留められる。
「な、なんだ？」
「……ねえ、イセネ島から住人が消えたって噂なんだけど」

　街の中の人間や、そうでない人々で賑わう港。周囲を見渡せば、久し振り、もしくは初めての旅行なのか楽し気に話をしている家族連れや、自分と同じ賞金稼ぎらしい屈強な男が手配書を片手に出航する便を調べていたり、はたまたギアの傷痕の浅かった地域へと移住する腹積もりか、旅行というにはやけに大袈裟な荷物の者などがあちこちに見受けられる。
　どん、と背中にぶつかってきた少女と不意に目が合い、謝る彼女を宥めすかしてブリジットは人混みを奥へと進んでゆく。
「すみません、通ります」
　そうして人の間を縫ってゆく内に、船を待つ人の中で明らかに他と様子の違う者たちが数人見えた事に気付く。不審に思い歩く速度を速めて人の壁を超えた彼は、掲示物に書かれた内容から、おおよそ船を待つには似つかわしくない表情をした人間がいた理由を理解した。
「……欠航？　しかも、イセネ島行だけって」
「貴方もイセネ行きだったの？」
「ええと、はい。貴女は？」
　振り返った先に居たのは、自分より四か五は年上であろう長髪の女性。ブリジットの問いかけに彼女はにこりと微笑みその口を開く。
「私もイセネに用事があったのよ。姉があの島に住んでいるから、久

しぶりの休暇で会いに行こうと思って」
「そうだったんですね」
「貴方はどうして彼処に？　村の人にも見えないし、かといって旅行向きな場所でもないわよ？」
「ウチは、その……」
　不意の問いに少年は言い淀む。不用意な嘘を吐こうものならすぐに勘付かれてしまうであろうし、そうなってしまえば目の前にいる女性から目的地であるイセネ島についての情報を得る事が難しくなってしまう。
　とはいえ、噂話について詳しいようには見えない彼女に「自分は賞金稼ぎで、イセネ島で失踪や化物の噂があったから調べに来た」と素直に答えてしまうのも、要らぬ警戒を生むのではないかと思えてしまう。
「んー、ひょっとして人がいなくなった、って噂の調査とかそっちの話だったりするのかしら」
　だからこそ、向こうから噂に触れてきたことを幸いに思い、彼はゆっくりと頷いた。
「は、はい。実はウチ賞金稼ぎでして、気になる噂があったのでそれを調べに」
「ふーん、そっか」
「……あの、怒らないんですか？」
　素っ気ない反応を示した女性に対して、ブリジットからの不意の疑問。彼女は一瞬「何故？」というような表情を浮かべたが、やがて理由に思い至ったのか小さく噴き出す。そして少年を安心させるように笑いながら答えた。
「ああ、変なことが起こってるらしいっていうのは聞いてるから、それを調べてくれるならそんなに目くじら立てるような事じゃないもの。貴方が素行の悪い人だったりするなら話は別だけどね」
「す、すみません、変な事聞いちゃって」
「良いの。それより貴方が賞金稼ぎだって言うなら、私の依頼を受けてくれる？」

「依頼、ですか？」
女性の言葉に、少年ははて、と首を傾げる。別に改まって依頼などされなくても調査自体はどうにかして行うつもりであったし、なにより彼女の立場からすれば土足で島に踏み込まれることを懸念しても良さそうなものなのだ。
しかし女性の言動にはそういった感情は殆どうかがえず、先程までと同様の話しぶりに疑問を持ちながらも問い返すことしかできなかった。
「そ。これなんだけど……」
言いながら女性がバッグから取り出したのは小さな紙袋。飾りっ気のない麻色の袋を流されるままに受け取り、ブリジットは首を傾げる。困惑している少年に頭を下げつつ、女性は袋を指さし話し始めた。
「便利屋みたいな依頼でごめんなさい。さっき話した姉なんだけど、もうすぐ誕生日なのよ。久し振りの帰省だからプレゼントも用意したんだけど、欠航になっちゃったし」
「……ええと、つまりこれを貴女のお姉さんに渡してくれれば良いんですね」
「あまり大きな金額は用意できないけど、お願いできるかしら？」
「その前に、一つだけ……聞いてもいいですか？」
ブリジットは、一つ咳払いをして重苦しい面持ちで問いかける。イセネ行きの便が欠航になった理由はご存知ですか、と。その問いを受けた女性は面食らったような表情を浮かべたが、すぐに首を振って少年の方へと向き直った。
「……だから、賞金稼ぎだっていう貴方にお願いしたいの」
彼女の言葉を聞いて、ブリジットは改めて頷く。万が一噂が本当のものであった場合も最善を尽くすという意思を乗せて。
「分かりました。ただ、今の段階だと船に乗れるかも分かりませんし、行く方法が見つかったらその時に改めてお預かりします」
「そう？　じゃあ連絡先だけ教えておくわ。しばらくは此処に居るから、進展があったら教えてね」

「分かりました」
　そうして互いに礼を交わし、ブリジットは人混みを抜けて港を後にする。ついでと言えばそうなのだが、彼女の依頼に関してはこれまでの噂話から考えても色よい結果にはならないのではないかとつい考え、気分が沈みこんでしまう。
　晴れない気分のまま、日が傾き始めた通りを歩いている内に、ギルドの正面入り口が視界の端に映る。
「あ、ノーティスさん」
「ブリジット。そっちはどうだった？」
　扉を開けて大通りへと出てきた少女の問いに、ブリジットは沈んだ表情のままゆっくりと首を振る。その意味するところを違えることなく把握したのか、ノーティスは小さなため息を吐きながら少年の前へと歩いてきた。
「イセネ島への連絡船は全て欠航、個人便、小型船の貸出なんかも今は控えているそうです」
「そ。となるとあんまり状況は良くないか……」
「ノーティスさんの方は、何か収穫は？」
　ブリジットの問い掛けに応じ、少女は背負っていたバッグから数枚の紙切れを取り出し広げる。釣られて覗き込んだ先に書かれていたのは、依頼主を国際警察機構や街区の連名とした手配書の一節であった。
『イセネ島民の消失事件調査、ならびに原因究明』と題されたその文書には、定例的な免責事項や時系列に沿って纏められた島民の失踪疑惑浮上に至るまでの経緯、そして決して安くはない額の報奨金額が記されていた。
「これって」
「警察が動き始めてるあたり、単なる噂話とはいかなくなったってワケね」
「でも、本当なんでしょうか？」
　少年のもっともな疑問に眉をひそめつつも、ノーティスはそのまま続きを促す。

「いくら小さな島で人が少ないといっても、住んでた人達が誰もいなくなるだなんて、普通有り得ないですよ」
「それを調べるのが目的でしょ。この概要見る限りまだ何週間も経ってないし、ギアの線も疑った方がいいかもね」
「……あんまり考えたくないですね」

「それで、島の地図とかは一通り揃いましたけど、どうやってイセネ島に行くんですか？」
　待ち続けることを諦め始めたのか、先日来た時よりも人が疎らになっている港に、人影が二つ。周囲に気を使ってか声を潜めて問いかけてくるブリジットと歩きながら、ノーティスはポケットの中から小さな封筒を取り出す。
「イセネの件、団長もちょっと気にしてたらしくてね。聞きそびれてたメッセージ確認して連絡取ってたの」
「カイさんが？」
「そ。こっちで調べてくるから船を出せる様にして欲しいって頼んでおいたのよ、これがギルドで用意してもらった紹介状」
　そう言って少女は手に持った封筒を揺らしながら笑みを浮かべる。そのまま早足で船着き場にいる関係者らしき人物のところへと歩いていくノーティスを追うブリジットの背後から、記憶に新しい声が二人を呼び止めた。
「貴女は」
「ごめんなさい、急いでる様子だったからもしかして、と思って」
「……誰？」
「先日此処で知り合ったんです。イセネ島に住んでた人で、届け物をイセネに居る家族に渡して欲しいって」
　その発言を聞いたノーティスの眉がピクリと跳ねる。
「私達便利屋だったっけ」
「いえその、状況が状況ですし、なんというか……」
「いや、別にお節介なのはいいんだけどさ。その、そっちの人」
「私？」

「ブリジットから多少聞いてるとは思うけど、イセネ島の状況って正直結構悪いっぽいんだよね」
だから、と前置きして少女は続ける。最悪の可能性は覚悟できるか、噂通りギアが絡んでいたなら、間違いなく訃報を持って帰ることになるがそれで納得できるのか。
ブリジットが言外に問いかけた内容を明確な言葉として突き付けるように、少女は平坦な声色のまま目の前の女性に問いかけた。
「身も蓋もない話するけど、色々情報調べた感じ、今から行ったところで生き残りなんて居ない可能性が高いっていうか。仮にギア絡みだとしたら後始末に行くようなものだし」
「なっ……」
「最終確認。死体は連れてこれないけど本当に良いの？」
愕然とした表情を浮かべ、少し遅れてノーティスに対して怒りや侮蔑の混じった視線を投げた女性は、やがて暫くの間をおいて吐き捨てるように彼女の問いに答えを示した。
「賞金稼ぎ様がそういうならそうなんでしょうね……それでも良いわ」
「最善は尽くすけど、期待しないでね。その方が辛くないだろうし」
「すみません……」
「良いのよ。それじゃあコレ、お願い」
申し訳なさそうに口を開くブリジットに先日と同じ紙袋を渡し、改めてといった様子で彼女は頭を下げる。何が起こっているのかを突き止めて欲しい、もし本当に事件が起こっているのであればその解決を、私の姉を助けて欲しいと。
助けられればね、と答えてノーティスは踵を返す。さしたる迷いもなく船着き場へと向かうノーティスを慌てて追いかけ、少年は不機嫌な声を上げた。
「ノーティスさん、何もあんな言い方しなくても良いじゃないですか」
「前にも言ったでしょ、取捨選択って。あの人はともかくとして、アンタも割と楽観的だったからちょっとね」
「ウチは別にそんな」

「経験上、この手の行方不明事件に化物の噂のセットって時点で、九割がたギア絡みだったからさ」
　嘆息するように吐き出された言葉に、ブリジットの表情が凍り付く。人が居なくなった場所で見かけた化物が見間違いだった試しがない、と続けたノーティスの表情は暗く、それ故どこか急くような足の速さが彼女自身の焦りからくるものだと彼は気付いた。
「じゃあ尚更、急がなきゃいけませんね」
「……ブリジット？」
「やっぱり、拾えるものは拾っておきたいじゃないですか」
「……それもそっか」
　少女らは船に乗り、海を越えてイセネ島へと向かう。既に手遅れであることを心のどこかで気付いていながら、それでもと僅かな可能性に縋るように。暫くの時を経てやがて見えた島は、灰色の雲が覆う鋭鋒に隔たれた、さながら自然の城塞のようだった。

「あっれぇ、ダンナ？　久し振りだね」
「……なんだってテメエがこんなところに居やがる」
　どさり、と音を立てて崩れ落ちる人影を尻目に、男は不機嫌そうな声を親し気に話しかけてくる人影へと向ける。顔をしこたま殴られて不細工になった、自分と似たような格好の男から視線を外し、ユニオンジャックのシャツを着た金髪の男を睨みつければ、わざとらしく肩を竦めて彼は笑う。
「ちょいと気になるギアと魔法使いの情報を掴んだからダンナを探しててね、まさかいつの間にか二人になっているとは、流石の俺様も予想が……」
　言いかけた男の髪を掠めた炎が焼く。血の気の引いた顔を引き攣らせている男に、二度目はないとその手の剣が炎を纏った。
「焼き加減はウェルダン固定だが文句はねえな？」
「ちょちょ、ジョーダンだってダンナを俺様が見間違うわけないっしょ!?」
「……ったく。で？」

「そんで、大型のギアを操る男が南極大陸の方に居るってんで色々調べた結果、こりゃ一人で乗り込むのはちと危険かなーと」
ニヒヒ、と歯を見せて笑う男にあからさまな呆れを見せつつ、男（ソル）は正面に立つ人物（アクセル＝ロウ）に問いかけた。
「面倒くせえ……幾らだ？」
「俺とダンナの仲でしょ？　それに凄腕の魔法使いって話だしあの男の情報だって持ってるかも……」
「チッ……しゃあねえな」
「ありがとうダンナ！」
時を同じくして、二人の男は南極大陸へとその足を向けていた。未だ活動中だという大型のギアと、それを操る魔法使いの噂を確かめるために。
そして、己の目的に繋がる情報を少しでも得んとするために。

第一章　上陸

辺境の孤島『イセネ』。人口数千人足らずの小さな島であり、その立地と地形から、聖戦においてもギアの侵攻が及ばず平穏な姿を残していた数少ない地域である。その切り立った鋭鋒が近づくにつれ、かつての平穏とは明らかに異なるような静けさが感じられ、島へと向ける視線が険しいものへと変わってゆく。

「……船着き場、見える？」

「あれ、じゃないですか」

船上からブリジットが指さした先に、木材で拵えられた簡易的な桟橋が見えた。

何事もなくその桟橋へとボートを横付け、手短に係留を済ませた二人は砂浜へと降り立つ。周囲をぐるりと見渡しても人の気配はせず、山間部を抜ける風か、はたまた化物（GEAR）のものなのか、唸るような音だけが静かな島に響いた。

「この辺りは特に何もなさそうね。……一番近くの村に行ってみよう」

人の気配が感じられない静かな道を、二人連れだって歩いてゆく。一人は地図を片手に、まるで散歩でもするかのように淀みない足取りで。そしてもう一人は、愛用のヨーヨーを手に取り、周囲を警戒するように視線を走らせ、一歩一歩を踏みしめるように。

そうして進んでゆく内に、村の所在地を示す看板が見え、無意識に二人の歩くスピードが少しずつ上がり始める。

そして、疎らに建つ家屋が視界に見え始めた辺りで、ノーティスが不意に足を止めた。

「ノーティスさん？」

「構えて」

「何を……」

言いかけたブリジットの背筋を悪寒が撫でる。強張った声と悪寒に従い構えた少年の耳に、微かに聞こえる木の焼ける音。鼻を突く焦げ臭い風、空に立ち昇る黒煙の下にあったのは、化物の巣窟と化した

小さな村であった。
少しの躊躇いを見せたブリジットの横を一陣の風が駆け抜ける。大剣を振るい複数のそれを引き裂いた少女は、振り返ることなく声を張り上げて少年を呼ぶ。
「ブリジット！　生存者の捜索と救助！」
「は、はいっ!!」
爬虫類のようなフォルムに、甲虫を思い出させる外殻、肥大化した腕から伸びる鋭い爪。一見すると蜥蜴のようにも見える、自然に生まれたものとは到底思えない化物が、新たな獲物に気付いて四つの目を赤く光らせる。
そして、その両腕を振りかぶり、戦闘を避けて村の内部へと踏み込もうとしたブリジットを目掛けて襲い掛かった。
「このっ……！」
「行かせるかっての！」
行く手を塞ぐように現れた敵を切り捨て、戦闘を避けて村の内部へと踏み込もうとしたブリジットを目掛けて襲い掛かった。
「このっ……！」
「行かせるかっての！」
行く手を塞ぐように現れた敵を切り捨て、ブリジットの背後から飛び掛かる二つの影を目掛けて大剣を投擲。そして、飛来した鉄塊に甲殻ごとその身を砕かれ、地に伏した亡骸から得物を引き抜きノーティスは少年の後を追うように走る。
やがて村と呼べる規模の民家と共に見えてきたのは、かつての聖戦を思い出させるような惨憺たる光景であった。
「警察機構が調査隊の編成を進めてるって話だったけど」
「……正直、警察の人には見せられない状況ですよね、コレ」
「そうだね。……いっそ討伐隊でも組んだ方が良いんじゃないかってレベルだよ」
吐き捨てた言葉は化物たちの咆哮や、苦悶の声に紛れ、誰の耳に届くこともなく消えてゆく。間髪を入れずに耳孔を叩く肉を裂く音や、掌を伝わる感触と、無意識に湧いてくる昂揚感を飲み込み、少女は注意深く周囲を伺う。
一体ごとの強さは取るに足らず、索敵の大部分を視覚に頼っており、明らかに他と異なる足音でも捕捉は出来ない様に見える。長引いても然程問題にならないとはいえ、それはあくまで人外であり、体力、

精神力に余裕のあるノーティス自身にとっての話である。
　彼女とは違い、人間であり聖戦を経験していない賞金稼ぎであるブリジットとは、そもそものスタミナに絶対的な差が存在しているのだ。少年に彼女ほどの大きな力はなく、また、耐久力に勝る敵を延々と倒し続けられるような体力も、精神力も存在しない。
「ねえ……右手側の風車塔見える？」
「は、はい……彼処に？」
　であれば、と少女が指さしたのは石造りの小さな風車塔。扉や窓、外壁などの損傷も見られず、そして接触直後から数が減ったとはいえ未だに多く残る敵の姿を忌々し気に見渡し、少年は少女の問い掛けの意図に乗ることを決めた。
「窓は高層階だけだし多分内側から留められてる。扉もどうにかしてバリケードを作っちゃえばしばらくは休めると思うけど、どう？」
「賛成です。これからどうするにしろ、一旦落ち着いて状況を整理したいですし」
「じゃあ決定ってことで、道空けるから入り口までダッシュして。バリケード作ったら中でちょっと休憩しよう」
　言うが早いか、少女の両腕が大剣を振りかぶり、轟音を伴って包囲網に穴を開ける。その間隙を縫うように少年は駆け出し、自身を狙って襲い来る敵を捌いてどうにか入り口らしき扉へと到達した。扉を開き中を一通り警戒、敵の姿がない事を確認したブリジットはノーティスを呼ぶためにその声を張り上げる。
「急いでください！」
「分かってる!!」
　少年の声に応えるように少女は駆け出し、一気に扉の前へと躍り出る。そして、遅れて殺到する化物たちをひと睨みし、その剣を大きく抱えて体を弓なりに捻った。
「吹きっ……飛べえっ!!」
　瞬間。大剣から伸びるように放たれた風の刃が大地を裂き、瓦礫と共に異形を吹き飛ばし、頑強な甲殻ごとその肉を引き裂く。数秒の後、地面に残された爪痕や血痕、打ち捨てられた死骸を一瞥して少女

は扉の中へと消えた。
　風車塔の内部は、乱雑に資材や食料品と思しき木箱が置いたままとなっており、視界の通りが悪い。放置されていた箱や棚の一部を扉の前に積み上げて小さく息を吐いたところで、吹き抜けの上部より先に隠れていた少年の声が聞こえる。
「ノーティスさん、大丈夫ですか」
「別に。掠り傷よこれくらい……それより、何か目ぼしい物はあった？」
「いえ、特には……」
　言いかけたブリジットの背後で、がたん、と一際大きな物音が響く。反射的に身構えたブリジットと、吹き抜けを跳んで上がってきたノーティスが物音の主を探すように視線を彷徨わせる。やがて金色の瞳が正体を捉えて、僅かながら緊張を解いた。
　その彼女の反応に少年が抱いた疑問は、ものの数秒の内に氷解することとなる。
「生存者ね？」
「え？」
「……あ、アンタは……？」
　薄らと差し込む光に照らされた影は、やがて十代前半か半ばを思わせる少年の姿へとそのディテールを変える。泥や砂埃で汚れた服と体をそのままに、明らかな警戒を見せる少年の前へと歩み寄り、ノーティスはしゃがみ込んで視線を合わせた。
「私達は旅の賞金稼ぎ。外でウロチョロしてるあの化物を調べに来たのと、あとアンタみたいな生存者を探しにね」
「……本当に？」
「嘘ついてどうすんのよ」
　呆れたように息を吐き、少女は肩を竦める。やがて差し出した手をおずおずと握り、少年は促されるようにその重い腰を上げた。
「それで、何時から隠れてたわけ？」
　血の匂いに交じって鼻を刺す臭いに眉をひそめながら少女は問う。
　臭いそのものの不快感は決して小さなものではなかったが、殊更に

突いて空気を悪くする必要もないだろう、と考えてのことであったが、どうやら少年には気取られてしまっていたらしく、バツが悪そうに顔を俯けて、彼は消え入りそうな声で答えを返した。
「多分、三日位」
「よくバレなかったわね……」
「さっき戦ってた時もそうでしたけど、あまり嗅覚や聴覚は発達してないんでしょうか」
「並外れて鋭いってことはなさそう。それに船着き場から村まで襲われなかったし、制圧した村をそのまま縄張りにでもしてるんじゃないかな」
「アンタ達あの怪物と戦ったのか?!」
　大声を上げる口を慌ててその手で塞ぎ、ノーティスは戸惑う少年に厳しい視線をぶつける。戸惑う姿を余所に、扉や窓へと視線を巡らせ、ブリジットが小さく頷いたのを見てその手をゆっくりと放した。
「……ったく、大声出さないでくれる?」
「でも、聴覚が発達してないって」
「悪かったわね、ただの予想よ。それに聞こえないとは一言も言ってないけど」
「ノーティスさん」
　わかってる、そう答えて少女は未だ震える少年の頬に手を添え、自分の方へと振り向かせる。驚愕に見開かれたその瞳を見据え、彼女は落ち着いた声で、僅かでも手がかりを得るために少年に語り掛けたのだった。

「ふーん、本土から来た学者ねえ」
　壁際に積まれていた木箱のうち、一段低い場所にあるそれの上に腰かけ、地面に置いたバッグから小さな包みを取り出してその包装紙を剥がす。程なくして姿を現したシリアルバーを咥え、小気味よい音を立てて咀嚼しながら少年の説明に詰まらなさそうな反応を示す。
「二ヶ月ほど前にイセネに来たんだよ、聖戦で遺失した学術だとか、郷土史の復元だとかが専門って言ってさ」

「その時は何もなかったんですか？」
「そりゃ、急に余所者が来た訳だから村の連中もあんまり気は良くなかったよ。ただ、愛想は悪くなかったし、島じゃ誰も持ってない通信機器を持ってたもんだから……」
「ん、コレクトコールも居ない訳？」
　田舎で悪かったな、と不貞腐れる少年と、話の腰を折らないでください、とムッとした表情を向ける少年に頭を下げて続きを促す。
「食い物とかをやる代わりに、たまに本土にいる家族とかに連絡を取ってたんだとよ」
「へえ。で、それがなんだってこんな状況になってるの」
「俺だって分かんねえよ。ただ、ひと月くらい前から中央の村にもあんまり顔出さなくなったらしいんだ。何かすげー資料かなんかが見つかったって」
「……」
「……ノーティスさん？」
　何事か気になる内容でもあったのか、俯き考え込むように微かな唸り声を上げる少女。
　やがてブリジットの問い掛けに答えて顔を上げ、薄汚れた格好のままの少年へと強張った声で呼びかける。
「その学者とやらの名前と、何処に住んでたかって分かる？」
「……ゴメン、直接会ったわけじゃないし、中央の村に行く事もあんまり無かったから」
「そっか。……どうする？」
「やっぱり、その学者の人について調べてみた方が良いかもしれませんね」
　確認を取るように質問を投げつけ、期待通りのブリジットの提案に頷いた少女は、一度木箱から降り、風車塔上部の窓から外の様子を伺う。
　村の入り口から見た時から比べると明らかに減った化物達が、生き残りを全て排除しようとしているかのように、それぞれに建物の中に姿を消しては現れ、村の中を徘徊しているのが見えた。

「ナビ頼みたいんだけど、付いて来れそう？」
「お、お前等……ホントに島の中央に行く気なのか」
「状況が状況ですし、今の内に出来る事をやっておきたいんですよ」
　真面目な表情で呟くブリジットと、嫌なら置いていくけど、と感情の伺えない表情を浮かべているノーティスとをしばらく見比べていたが、やがて少年は諦めたように首を縦に振った。
「わかった。あそこなら、北にある寺院から洞窟に入って近道できる」
「近道？」
「この島山が多いんだよ、隣村に行くのに山沿いの街道越えなきゃいけねーんだ」
「……ブリジット、どう思う？」
「ウチ、ですか？」
　少女の問い掛けにうーん、と一つ唸り声を上げて考える。確かに少年の言うとおり、島の中心部に向かう方向には険しい山が見えており、その街道を通るとなれば時間が掛かるのも十分に予想できるところである。
　とはいえ、少年の言葉を信じるなら彼の言う近道をこそ警戒している可能性の方が高いのではないか、という疑念が浮かび上がってくるのだ。
「できれば、安全な道を選びたいですね」
「それは同感。って言っても三日三晩引き籠ってた子をハイキングさせられないってのもあるんだよね」
「？……なんで山道の方が安全だって思うんだ？」
「首謀者が分ってないし、近道も別にアンタ一人しか知らない訳じゃないでしょ？　険しい山道を無視してショートカット出来るんなら誰だってそっち優先するわよ」
　ノーティスが淡々と告げた言葉になるほど、と納得を見せつつもやはり少年の表情は硬い。目の前にいる二人組の言葉が正しければ、彼女らを案内するためにあの化物達が闊歩するであろう場所へと同行しなければならないのだから。
「……」

「男のクセに、って言うには無茶苦茶な状況だからあんまり言わないでおくけど、一人で籠ってるよりは生き残れる可能性あると思うわよ？」
「わ、分かってるよ！」
「ウチ達がちゃんと守ってあげますから、ね？」
　自分より幾分か年上とはいえ、殆ど年齢が変わらないであろう少女らに庇護されては格好がつかない、そんな葛藤をありありと見せながらも、彼はしばしの沈黙の後ゆっくりと頷いた。

「どう？」
「追ってきません、ひとまずは逃げきれたみたいです」
　大仰な石造りの建造物の中へと駆け込み、周囲を警戒するノーティスと、彼女の後ろを追うように入口を抜け、すぐさま背後を振り返り外の様子を伺うブリジット。
「はぁっ、はぁっ……！」
「引き籠ってた割には良い根性してるじゃん」
「……そう、かよ」
　そして、二人の間で大きく体を屈ませ、肩で息をするようにその身を揺らす少年が一人。ノーティスの冗談めかした言葉にまともに対応する余裕もなく、ただおざなりな返答をして呼吸を整えることに意識を集中させていた。
「長居はしたくないし、すぐに移動することになると思うけど。最悪私が担いで行くからそのまましゃがみ込んでていいよ」
「分かった……」
「ノーティスさん、そっちはどうですか？」
「見た感じ人の気配は無いかな」
　ノーティスの返答を聞き、ブリジットは外へ意識を向けたまま二人の側へと戻ってくる。同じように建物の奥へ向けた視線を逸らすことなく、近づいてきたブリジットへと少女は声を掛けた。
「ひとまずコレの回復待ちね。二、三分ほど待って動こうと思う」
「その方が良さそうですね。敵の気配もありませんし、少し休憩しま

しょうか」
「悪い」
「代わりに色々聞きたい事あるから良いよ」
剣を床に突き立て、ノーティスはすぐ近くの柱へと背中を預けたまま小さく息を吐く。刺すような視線に肩を竦めた少年を気遣うブリジットを気にする様子もなく、少女は淡々とした声でいくつかの問い掛けを始めた。
手始めに二か月前に島を訪れた男のことを、村でどんな研究をしていたのか。ひと月ほど前に姿を現さなくなってから、今の状況が起こるまでに何か変わったことは無かったか。男が興味を持っていたと思しき学術や郷土史、伝承などに心当たりはあるか。
そうして一つ一つ疑問点を潰してゆく内に、朧気ながら事件の輪郭が見え始めたかと一瞬考えたが、不確定な情報の多さに頭を振って慢心を消す。
「ありがと、方針はこのままで間違ってなさそうね」
「……役に立てたんなら良かったけど、今のでなんか分かったのか？」
「分かるほどの情報は無かったですけど、少なくともその研究者の人が要注意だな、という判断は出来たっていう感じですね」
「まあそんな感じ。化物の原因もまだなんとも言えないし、とにかく中央の村に着いてからかな。その研究者とやらが探してた資料なんかもそっちにあるでしょうし」
そう言いながら大剣を引き抜き、再び先陣を切るように少女は建物の奥へ視線を向け、一歩足を踏み出す。遅れて後を追い掛ける二人と共に、埃の薄れている方向へと慎重に足を進めて行く。やがていくつかの部屋を抜け、大広間へと繋がる門をくぐった直後、二人の足が止まり、ヒリついた空気に少年が気圧され立ち止まった。
「……ストップ」
「……背中は任せてください」
「お、おい」
柱ごと吹き飛ばされるか一応抵抗するかどっちがいい？　そう挑発するような言葉を部屋の奥へと投げ掛ければ、ガラガラと硬質の物

が擦れ合う音がそれに答える。暫くの間をおいて姿を現したのは、バラバラになったマネキンの部品たち。
警戒を崩さない二人とは対照的に、少年はガラクタと言って相違ないそれらを見て、小さなため息を吐き肩を竦めた。
「な、なんだよ、ただの人形じゃねーか。驚かせやがって」
「……」
「ほら、ホントに化物がまた出てくる前に早く行っちゃおうぜ」
「そうね」
心なしか不安で早くなる少年の足に合わせるように、武器を構えたまま二人はガラクタの横を通り抜けようと駆け出す。
そして、少年の足がそれの横を通過する瞬間、微かに動いた影に少女の体は迷わず反応を起こした。
「え」
風を切る音と衝撃、遅れて空を裂く轟音に思わず耳を塞いだ少年の視界を覆う砂埃。その隙間から一瞬だけ見えたノーティスの姿が再び巻き上がる砂埃の中に飲まれ、間もなく数度の破壊音が少年の鼓膜を叩く。
塞がれた視界の向こうで起こっているであろう剣戟に慄く暇もなく、遅れて飛び込んできたブリジットに手を引かれて少年は砂埃の中から抜け出した。
「大丈夫ですか！」
「え、あ、ああ」
「良かった、ノーティスさん！」
「オッケー、こっちももう終わった！」
少女の声に続けて、煙っていた視界が一陣の風によって晴れる。砂埃の中から呆れたような表情を浮かべて出てきたのは、大剣をその手に提げ、木で形作られたマネキンの腕を詰まらなさそうに持って歩いてくるノーティスの姿であった。
「それ、さっきの人形、か？」
「そ。バラバラの状態で待機してて、近付いてきたり部屋を通り抜けようとした人間を奇襲して殺すのが目的って感じかしら。さっきの

バケモノとは違ってただのマネキンを術式で制御してるみたいね」
「……それって」
「……まあ、そういう事でしょ」
不愉快だと言わんばかりに眉根をひそめるブリジットに向き直り、小さく肩を竦める。双方ともにそれ以上の言葉は交わすことなく、少女らは大広間の奥、地下へと続く階段へとその足を踏み入れた。
（見覚えのない術式、材質からみても自律稼働系で間違いなさそうだけど……その割にスペルが複雑過ぎる）
少女は眉間に深い皺を刻み、ゆっくりと歩きながら人形の残骸を弄ぶ。
（起動条件はそう複雑じゃない筈だし、じゃあ動きが変に滑らかだったのはこのスペルのせい？　全部の術式知ってる訳じゃないけど、それにしたって体系と噛み合わなさ過ぎるっていうか……）
「……なあ」
「ノーティスさん？」
「ん、何？」
ふと気づけば、階段を先に進んでいたブリジットと少年の二人が怪訝そうにこちらの方に視線を向けている。
「ずっとその残骸を持って考え込んでますけど、どうかしたんですか？」
「ああ」
これか、と手に持っていたそれを一つ二つ振り、少し考えた後にあっさりとそれを階段の外へと投げ捨てる。ノーティスの行動に驚いた顔を浮かべた二人に、大した事じゃないと笑い、少女は階段を下りる足を速めた。
「ちょっと気になることがあっただけ。後でまた別のマネキンから部品分捕って調べれば良いし、先急ごっか」
「は、はい」
「……おう」
地下へと続く階段を抜けて、蔵として使われていたであろう一室へ

と三人は足を踏み入れる。最近まで使われていたのか、そこそこに手入れのされている室内を見回しつつ、少女は棚の一つに収められていた小包を手に取る。
「……行き止まりみたいだけど？」
「隠し通路があるんだよ。確か、この棚の裏だったっけな……」
　言いながら棚を触る少年を見つつも、合間に手に取った小包の封を切って開け始める。中身の保存食らしき個包装を確認してそれらをバッグに無造作に突っ込み、悪戦苦闘している少年を見て眉をひそめる。
「明らかに固定されてる感じだけどホントにあってんの？」
「そのはずなんだけどな……ほら、ここに目印あるだろ？」
「この×印ですか？」
「そうそう、この棚がスライドするようになってたんだよ」
　ブリジットの問い掛けに頷き、少年は再び棚を動かそうとして首を捻る。
　こんなに重くなかった筈なんだけど、と呟く声に警戒心がゆっくりと頭を上げた。
「ちょっと代わって。ブリジットはこの子連れて部屋の入口で待機」
「……罠、でしょうか」
「かもしれないし、単純に塞がれてるだけって線もあるんじゃない。いったん試してはみるけど力技になるかも」
　そう言いながら固定されている棚をつま先で小突く。一通り棚の周囲を確認し、離れた二人が安全であろう場所に待機した事をみとめて、大きくその足を振りぬいた。
　少年の言葉のようにスライドする事もなく蹴られた棚は転倒し、重量を感じさせる衝撃音と共に砂埃を巻き上げる。棚の裏から姿を見せた壁とその周囲をノックし、反響音が違うという確認が取れた事で、隠し通路と思われる空洞の場所に間違いないのではないかと予想を立てる。
「せー、のっ！」
　再びの轟音。ガラガラと崩れて行く壁面の向こうから流れてくる

風にピクリと眉を跳ね上げ、無意識の内に唇が小さな弧を描く。
「ビンゴ。罠は無かったわね」
「大丈夫ですか」
「全然。壁と棚が両方とも固定されてただけだったみたい」
平然とした表情で剣を提げて答えるノーティスに、ブリジットが安心したように小さく息を吐く。しかし直後に流れてきた風の匂いに、少女たちは一様に怪訝な表情を浮かべた。
「ちっ……！」
「ウチの後ろに！」
「えっ」
ブリジットが少年を庇うように立ち位置を変え、ノーティスが剣を地面へと突き刺し拳を構える。数秒と経たない内に聞こえ始めた唸り声と足音が大きくなり、殺意を湛えた咆哮へと姿を変える。
「喰らえッ!!」
振りかぶり、振り下ろされた鉤爪を躱し、クロスカウンターの要領で握り締めた拳を振りぬく。腹部に空いた風穴に悲鳴を上げる化物を蹴り剥がし、地面から引き抜いた剣を流れるようにその頭部へと突き立てる。
何度かの痙攣を見せて動かなくなったそれを壁際に打ち捨てて、少女は二人へと声を掛ける。
「オッケー。さっきの血の臭いもコイツだったみたいね」
「……閉じ込められた人がいた、っていう事でしょうか」
「……さあ。外で人を殺した奴が反対側から入ってきたのかも」
「なあ、急ごうぜ。ずっとここに居ても同じように殺されるだろ」
震えた声で呟く少年の言葉に頷き、二人は風の流れてくる方へとその足を進めて行く。やがて真っ暗な通路を抜ければ洞窟が広がり、そこには村で見たよりは少なく、しかし間違いなく力を持たない人間では逃げきれそうもない数の怪物がその赤い瞳を輝かせていた。
襲い来る化物を屠り、戦えない少年を守りながら、風の流れる方向を辿って三人は洞窟の中を進む。しばらく同じような景色の中を歩いてゆく内に、風の匂いがわずかずつ不快な物へと変貌してゆく。

「血と……何、この匂い……」
「う……かなり酷いですね」
「まだ何かいるのかよ、ひょっとして……」
「ひょっとしなくても居るでしょうね」
　そして見えてくる明かりと、近づいてくる洞窟の出口。待ち伏せのない事を確認して出てきたのは、開けた入り江のような場所。鋭鋒に囲まれ外海へと出る路も狭く、島の内外両方から姿を隠す事が出来る空間。
　かつてここを拠点にしていたであろう船舶の残骸や、潮風に中てられて朽ちた木箱などの中心に、それは存在していた。
　大きな三角の柱に、それぞれの面から生えた大きな三つの頭部。人の頭部にも見えるそれは、しかし明らかに人のものとは逸脱した大きさで、それぞれの目や口元を塞ぐような拘束具とそれに繋がる鎖が柱の表面を這っている。
「何、なんですか、あれ……」
「ギア？……いや違う、てことはさっきの化物連中も、いや……まさかそんなはず……」
「ノーティスさん！」
「ああもう分かってる！　嫌な予感しかしないけどとにかく構えて！」
　言うが早いか、三面の柱の顔の内、紅い紋様が描かれたディテールの無い仮面が声を上げる。遅れて鳴り始めた地響きにノーティスは少年を抱きかかえ、ブリジットはヨーヨーを構えて駆け出した。
　二人を追うように地面が隆起し、ギロチンのように壁が突き立てられてゆく。
「く、遠隔攻撃型ってわけ!?」
「上です！」
（コイツ、やっぱり……！）
　続けて聞こえた女の声。ブリジットの警告に従い上に視線を向けた直後、自身を目掛けて降り注ぐ巨大な氷の棘を躱し、少女は声を張り上げた。

「ソイツ等、多分一体の化物じゃない！」
「それって……！」
「人為的に複数の化物が合成されてる！　頭を全部潰さなきゃ多分死なない!!」
物陰に少年を隠れさせ、少女は戦いへとその身を投げ出した。

第二章　追跡

少女が大きく薙ぎ払うように振るった剣が眼前を塞ぐ岩壁を破砕し、合わせて飛び込んだ少年のヨーヨーが熊を模った姿へとその身を変えて渾身の力で拳を振るう。

苦悶と思しき声を上げる仮面に手応えを感じたのも束の間、続けざまに振り注ぐ氷の雨が、攻撃を中断しての回避を余儀なくさせる。

「クソっ、見た目通りの頑丈さって訳！」

「ダメですノーティスさん、やっぱりウチの法力じゃあまりダメージが……！」

ブリジットの言葉に眉間の皺をさらに深くし、ノーティスは逡巡する。見る限り、先程から沈黙している頭部が一つあったこと。そして、その頭部が機能停止しているものなのであれば、そちらから柱ごと破壊することは出来ないだろうか、と。

そして思い至ってからの行動は早く、そのまま少女は少年へと二言三言の指示を出してすぐに駆け出す。

「それぞれの頭の視界から外れれば攻撃の精度は落ちる、なるべく一つの頭部に集中するように動いて！」

「はい!!」

「……さて、これで片付けば楽なんだけど！」

正面に踊り出たブリジットを目掛けて攻撃を続ける仮面と、依然としてこちらを狙い続ける女の攻撃を躱しながら、少女は沈黙を続ける男の顔へと目掛け走り出す。口元を拘束具で塞がれ、目の光の消えたその頭部ごと柱を破壊するため、少女はその身を捻り愛剣へと法力を練り込み始める。

そして至る眼前。渾身の力を込めて、少女は身の丈を超える剣を振り下ろした。

「喰らえッ!!」

大剣から放たれた法力は風を起こし、強大な爪となって正面の柱を襲う。轟音と共に巻き上げられた爆風と、まぎれて聞こえる大きな破壊音に頬が緩み、少なくとも一定の効果を上げたはずだと少女の心に

隙間を空ける。
その結果頬は緩み、反動で浮かび上がる身体の制御も最低限になり、ただ着地を待つだけの時間が生まれる。
「ふはっ」
故に、反応がコンマ1秒遅れた。
「ノーティスさん!?」
足元に微かに見えた紅く光る線と、そしてそこから感じる熱量。それが何かを問う暇はなかった。
「ッ!?」
咄嗟に地面の方へと翳した大剣毎、少女を熱量と爆炎が襲う。吹き飛ばされ大きくぶれる視界の端に見えた男の口元から拘束具の一部が崩れ落ちるのが見え、大きな損傷を受けた様子の無い柱が回転し、同様に拘束具の外れた女の顔がこちらを捉えるのが分かった。
「コイツ……!!」
苛烈さを増して飛び交う氷弾を躱し、時にはその剣で防ぎながら、ブリジットと合流し二人は柱からの距離を大きく離す。
「あの防壁、法術ですか?」
煤塗れの身体を払い、ノーティスは不愉快そうな表情のまま答える。
「……多分ね、にしてもこっちの法力の通りが悪すぎるわ。単純に強力な防壁って訳じゃないと思う」
先程から続く違和感が、少しずつ一本の線で繋がり始める。ブリジットの法力による攻撃、自身の法力、大剣での斬撃、そしてギア化した肉体を利用した直接攻撃。それら全てを経て、彼女の脳裏に一つの予想図が浮かび上がってくる。
それは、この事件の首謀者が使役しているこれらが単なる生体兵器やギアではなく、異界（バックヤード）一説には法力、魔法の構成要素を始めとした世界全ての情報が記されている、と推定される上位世界。
法力を始めとした超常現象は、バックヤードから強制的に『現象が発生する理由』や『発生した現象という結果』を持ってくることで成立している、と考えられている。実際は超々高密度の情報の海と言っ

ていい世界であり、そこに脚を踏み入れた生物は大抵の場合、溢れる情報の波に押し潰されて圧壊してしまう。等とまことしやかに呼ばれる世界より呼び出した怪物なのではないか、という事。そして、それらの怪物を用いた実験によって、首謀者は『何か』を成そうとしているのではないか、という事。

予測というには材料が足りず、妄想と断ずるには目の前の事象が不自然に過ぎる。そんな不気味かつ不愉快な状況が少女の苛立ちを募らせてゆく。

「……やっぱ法力は効果薄か。ブリジットはひとまず回避優先で、火力は私がどうにかする」

「わ、わかりました」

（……アイツ等、元々法力に対して耐性を持ってるのは間違いなさそうね、ただ物理はサイズなりに頑丈って程度に収まってる）

だったらと、少女は剣を持つ手に力を込める。隆起する壁を飛び越え、足元から襲い来る炎を躱し、急所を的確に狙い飛んでくる氷の棘を鷲掴み、彼女は目隠しの取られた女の顔へと肉薄する。感情の見えない顔に獰猛な笑みを返し、ノーティスは握っていたそれを振りかざした。

「あああぁぁぁぁッ!?!!」

「……人間みたいな悲鳴上げてんじゃないわよ」

眼球を貫く棘から手を離し、握りこんだ拳を杭打ちでもするかのように打ち付ける。その激痛からかひと際大きく開けられた口に突き立てられた剣は、ミシリと音を立てながら口腔へと食い込み始める。

「大層な防壁張ってたみたいだけど、口の中ってのはどうなのかしらね」

言い終わるのと、口内を暴れ回った暴風が女の顔を引き裂くのはほぼ同時であった。

「あと二つ！」

言いながら大剣を逆手に取り、右隣りの男の顔を射止めんと刺突を繰り出す。そして拘束具を突き破って頬を貫いた剣を引き抜いて続けざまに振り払う。

致命傷ではないものの明確に損傷を与えた事を確認し、止めを刺すべく彼女は一歩足を踏み込む。
「同じ手を二度喰うほど馬鹿に見えた？」
「オオオオォッ!!」
そこを狙って立ち上る炎、踏み込んだ足をそのまま押し出し後方へとその身を蹴り戻すノーティス。そして追い掛けるように幾重にも立ち昇る炎の壁を越えて、少女がその身体ごと振り下ろした剣は風の刃を生み出し、眼前に広がる炎の壁を真っ二つに断ち切った。
瞬間、風を切って飛来した鉄塊が、男の眉間へ深々と突き立てられ。遅れて飛び掛かってきた人影が、その肘から下を鉄塊と同等の大剣へと変化させて呻き声を上げる頭部を真っ二つに切り裂いた。
「あと一つです！」
「分かってる！」
立て続けに二つの頭部を破壊されたことへの憤りか、単なる生存本能か、苛烈さを増した攻撃を躱しながら、少女は確実に最後に残った仮面の頭部へとダメージを与えてゆく。
そして幾度目かの剣戟が仮面の中央に亀裂を作り、ノーティスと自分の間を寸断するように壁がせり上がった直後。
「ロジャー!!」
ノーティスへと注意を向けている間に、側面から懐へ飛び込んでいたブリジットが真上にヨーヨーを放り投げて叫ぶ。呼応して現れたロジャーはそのまま拳を振りかぶり、亀裂の中心へとその剛腕を叩き込んだ。
「ナイスアシスト」
砕け散った仮面の中から現れた単眼に大剣を突き立て、少女は勝ち誇ったような笑みをその顔に浮かべたのだった。

全ての機能を失い、ただ入り江の中央に座するのみとなった柱に、少女が手を触れ、時折法術と思われる魔法陣を浮かび上がらせる。何かを調べていたらしい彼女はしばらくの時間の後、諦めたように首を左右に振って待っている二人の元へと歩いていった。

「どうですか？」
「ダメね、合成の為に使われてる法術も、コイツらの拘束に使われてた法術も、あの厄介な防壁も全部見た事ないスペルで書かれてる」
「……？」
「……何その顔」
　疑問符を浮かべるブリジットへと、訝し気な視線を向けるノーティス。続くブリジットの言葉にその眉間の皺が一段と深く彫り込まれる。
「いえ、意外と法力とか法術に詳しいんだなって」
「……ま、一応元聖騎士団だからね。法力学に魔法基礎理論、聖天貸法現存する法術を記した体系。禁呪とされている６種を含めた全６６６種が纏められている。しかしこの他にも遺失したもの、一部の存在や魔法使いなどのみが扱える物などがあるため、聖天貸法に存在する法術が全て、という訳ではない。は最低限押さえてるよ」
「そうなんですね……ウチも賞金稼ぎを始める時に勉強はしたんですけど、分からない所も多くて」
　そう言いながら頬を掻く少年を見て肩を竦め、呆れたように笑いながらノーティスは踵を返す。
「それが普通でしょ。使うもの、必要なものだけ最低限覚えてれば十分だし」
「でも……」
「まず聖天貸法だけで６６０種。その中でも転移みたいな空間や時間を制御する法力は相当の知識と演算が必要になるの」
　使わない、使えない上に使用難度だけは高い法術を覚える暇があるなら使用頻度の高い法術をきっちり使いこなす方が何倍もいい、そのように続けてノーティスは歩みを進めていく。視線の先に居るのは、恐怖にその瞳を揺らし、腰が抜けたのか動けないままでいる案内者の少年。
　少女が近付くほどに少年の身体は竦み、差し出された手に、彼の瞳はぎゅっと閉じられる。
「何してんのよ、化物は倒したんだからまた見つからない内に進まな

きゃ」
「お前……ギア、だったのかよ」
「……だから？」
　露骨に不愉快そうな表情を浮かべた少女に驚き、思わず口籠る。
「なっ、だから、って……」
「何か勘違いしてるみたいだから教えてあげるけど、聖戦ってジャスティスの指揮下にあったギアと人類の戦争だったの。ほぼ全個体がアレの制御下にあったのは確かだけど、例外だってそれなりに居るわけ」
　その言葉に一瞬はっとしたような表情を浮かべたが、すぐにまた恐れと警戒の混じった瞳でノーティスを睨みつける。その仕草に何を思ったか、わざとらしいため息の後、少女は低く冷たい声で問いかけた。
「此処で化物に殺されるかギアに連れられて生き残るか5秒で決めなさい」
「え」
「の、ノーティスさん」
　問い詰める間もなく、ハイ時間切れ、と吐き捨てて少女はブリジットの手を引く。戸惑うように彼女に連れられるままの少年と、此方を一瞥すらしない少女の後ろ姿に、少年の心を一気に暗雲が覆いつくしてゆく。本当に彼女は自分をここに捨てて行くつもりなのだと。
「ま、待って！　分かった！　ちゃんと一緒に案内するから置いて行かないでくれよ!!」
「ほら。ああ言ってますし、戻りますよ。今のところはともかく、ずっと安全とは限らないんですから」
「……ま、及第点って所かな」
　相変わらず不機嫌そうな表情を隠そうともせず、ノーティスは腰を抜かしたままの少年を担ぎ上げて道を進み始める。黙って成すがままとなっていた少年は、しばらくの時間の後、意を決したようにその硬い口を開いた。変な事聞いて悪かった、と。
「別に今更だし、良いけど」

「……でも、ゴメン」
「はぁ……これで賞金稼ぎって言った理由もわかったでしょ。アンタみたいに怯えるのも、逆に迫害しようとする連中ってのも居るわけだし、そういう事にしてふらついてた方が何かと都合が良いのよ」
淡々と続けられる話を聞いている内に浮かんだ一つの疑問。深く考えずに少年はその問いを口にした。それが虎の尾であるとは露とも思わずに。
「でも……そうやって人間の中に入るんじゃなくて、人間と敵対してないギア同士で暮らすってのは出来ないのか？　俺だったら、その、そっちの方が気楽だと思うんだけど」
少年の問い掛けに、ノーティスの表情が露骨に歪む。担がれたままの少年や、彼女のやや後ろを着いて歩くブリジットには見えなかったが、その顔には嫌悪や不快感、そして後悔といった負の感情が入り混じった色が浮かんでいた。
「……さっきの、アレ嘘だから」
「え？」
「確かにジャスティスの制御下を外れた例外は居た。でもその大半は自我も無ければ他の命令系統もない休眠状態だったし、殆どが聖戦後に討伐か監視対象として結界に封じられたわ。私みたいに自我や意識を得たのはほんの一部、人型となれば尚更」
「……ノーティスさん、それって」
「ま、そういう事よ。少なすぎて共同体なんて作れなかったの」
嘯くように笑う声とは裏腹に、段々と早くなる少女の足取り。やがてしばらくの沈黙を経て、絞り出されるように口から零れ落ちたのは怨嗟の声。
「……私は化物（ギア）になりたくてなったわけじゃない」
それは、誰に向けての言葉だったのか。側に居る二人の耳に入ることなく風に消えた声は、僅かな苛立ちを滲ませて震えていた。
その後も、少女は無言のまま襲い掛かる敵を倒し、時に簡潔な指示だけをブリジットに飛ばし、そして必要最低限のやり取りだけを続け

ながら入り江から続く洞窟を進んでゆく。先程の失言を気にしているのか、抱えられるままに黙り込んだままの少年と、彼女らを気にして同じように黙ってしまっているブリジットと、気まずい空気のまま、彼女らは次の目的地へと向かっていた。
「此処は？」
「……そのまま真っ直ぐ」
「そ」
やがて目的地としていた島の中央の村が見え始めた時、初めにそれを見つけた少女がくぐもった声を上げた。
「？　ノーティスさん？」
「いや、ちょっとね。煙見えるんだけど、最初の村と比べてどう見える？」
「煙、ですか？」
問いかけられ、視線をそちらに向けたブリジットの表情が疑問から諦観を滲ませたものへとみるみる内に変わっていく。
「……明らかに少ないというか、弱弱しいですね」
「そう、よね」
「どういうことだよ」
おずおずと口を開く少年にノーティスが視線をやり、そして不快感の混じった声で答える。恐らくもう終わった後じゃないか、と。
彼女の言葉が意味するところを過不足なく理解したのか、少年の瞳が小さく揺れた。
そして、程なくして目の前に広がった惨状に、少女らは一様にその顔を歪ませる。一人は強烈な不快感に、一人は鮮烈な怒りに、また一人は強大な悲しみに。
起点となる感情は違えど出力される表情は皆似通っており、そして皆が皆同様に、この現状を前にして行うべき事を理解していた。
「……誰か、生きてないのか？」
「調べてはみるけど、望み薄かしらね」
「今なら敵の姿もほとんどありませんし、少し探してみましょう」
言いながら近くにあった民家へと入って行くブリジットを見て、残

された二人も連れだって彼とは別の建物へと向かい歩いてゆく。
　しかし捜索の成果は惨憺たるもので、一向に見つからない生存者と、三人をせせら笑うかのように着々と見つかる死体の数に比例するように、彼女らの心を無力感が覆いつくしてゆく。
「……ここが村長の屋敷？」
「……そうだよ」
「せめて、手掛かりでもあればいいんですけど……」
　そう言いながら扉に手を掛け、ゆっくりと開いて敷地内へと足を踏み入れる。そこに見えるのはこれまでに何度も見た、化物が散々に暴れたであろう痕跡と、その暴力によって引き起こされた惨劇を、否が応でも認識させるように壁や床を彩る血と臓物の装飾。
　こみ上げる吐き気を抑えながら歩くブリジットと、嫌悪感を示しながらも平然としているノーティス、そして、胃の中が空になってもなお、吐き気に負けて時折うずくまる少年。最低限気を遣う素振りは見せるものの、そちらを優先するわけにはいかない、と少女は探索を続ける。
「悪いとは思うけど、表が絶対安全とは言えない以上着いて来てもらうしかないの」
「……わかって、る」
「……ノーティスさん」
「そうね。一通り此処を調べ終わったら、どこか安全な場所に隠れてもらった方がいいかも」
「隠、れる？」
　少年の疑問に、ブリジットが穏やかな声で答える。二人の目的上、この先も同じような惨状を目にする可能性が高い事、特に殺し殺されの関係である以上はそれを避ける手段がない事、そして、現在五体満足だからといって、今後戦闘が激しくなった場合にも同じように守り続けられるとは限らない事。
　それらの理由から、事件の解決ないし警察機構の突入まで隠れられる場所があるのであれば、そこに隠れていた方が都合がいい事。
　それらを掻い摘んで話したあと、少年は申し訳なさそうに頭を下げ

た。
「ごめんなさい、ウチ達の都合で振り回すことになって」
「……いいよ、あのまま隠れてても生きてられたか分かんねえし」
「でしょうね、バリケードも作れなかったみたいだし」
「は？」
「ちょっ、ノーティスさん！」
　反射的に出た言葉に慌てて口を塞ぐも、はっきりと聞こえていた少年の機嫌が明らかに悪くなる。諌めるように名前を呼ぶブリジットと不貞腐れる少年に小さく頭を下げて、ノーティスは再び口を開いた。
「悪かったわね。埋め合わせっていうのもアレだけど、アンタの隠れ場所に関してはこっちで面倒見るから」
「本当か？」
「大丈夫なんですか？　どこか良さそうなところとかは……」
「場所はどこでも関係ないの。一応視覚的にも良くないからある程度頑丈な部屋の方がいいんだけど」
　疑問符を浮かべる二人に続けて説明をしながら、着々と建物内の物色を進めて行く。暫くの時間を掛けて、一通りの保存食と書物、日記帳らしきノートなどを揃えた三人は、二階の一角にある客室らしき部屋へと足を踏み入れた。
　室内の様子は大広間や他の民家と比べても荒らされた様子が無く、使用感にも欠けていることから、事が起こった時には利用者が居なかったであろうことが想像できた。
「……綺麗なもんだし、ここでいいか」
「何する気だ？」
「さっき言った通り、此処で籠城してもらうのよ」
「……本気で言ってます？　壁も床も普通のお屋敷のそれですし、ドアなんて木製ですよ。さっきの化物に襲われたらひとたまりも……」
　怪訝な表情を浮かべるブリジットに対して、にやりと口角を釣り上げるノーティス。つかつかと部屋の中央へと歩みを進め、床に無造作に置いたバッグから、彼女は小さな発光体を取り出した。

「……何だそれ」
「ジール再起の日以降、科学文明を失った世界で最も多く使用されているエネルギー物質。石炭や石油などの既存のものを大きく引き離す燃焼効率の良さが特徴だが、その実態は高密度の情報体。
ジールそのものが法術を記述する媒体（スコア）の役割を果たし、これをジルポッドに装填することで、第三者が法術を行使することが可能となる。と、ジルポッド？」
「そ。一通り戦ってみて分かったけど、アイツ等って別に法力での攻撃手段は持ってないし、やることって言ったら爪とか牙での攻撃か体内から溶解液を吐き出すくらいだったしね」
口頭での説明もそこそこに、未使用品と思しきジールの入ったシリンダーを一つ手に取り、空いた左手を翳して意識を集中する。そうして数十秒ほどの時間を経て、少し疲れたような顔を浮かべた少女は手に持つそれを、ジルポッドと呼ばれた物体へと装填し、ブリジットへと投げ渡した。
「はいコレ。扉の横辺りにセットして」
「ま、待って下さい今……？！」
「……？」
自身に向けられた困惑の眼差しに首を傾げるのも束の間、視線の理由に思い当たった少女が少し上機嫌な声色に乗せて語り始める。
「こう見えても、簡単な法術ならスコア書けるのよ？」
「でも、ライターってかなり難しい国家資格じゃ」
「難しいのは確かなんだけど、ソルとか団長とか私みたいな戦闘職だとメリット大してないし、普通使わないから勉強してまで資格取る必要性があんまり無いのよね」
「……？　どういう事だ？」
「簡単に言うとそこのポッドに結界法術のスコア書き込んで設置するって話」
言われた通りにブリジットがジルポッドと呼ばれた物体を設置すると、青緑の光の帯が広がり、部屋一帯をやがて覆いつくす。何が起こっているのかわからない様子でそれを見ている少年と、既視感を覚

えるブリジットとを見比べて、少女は備え付けのベッドに腰を落とし、集めてきた本の内の一冊を手に取った。
　特に周囲を警戒する素振りもなく読書を始めたノーティスに、二人はそれぞれ異なった反応を見せる。起こった事象を理解しているブリジットは少女と同じように緊張を解いて彼女と同じように資料を確認し始めるが、そんな二人の様子を不信感を持って眺めている少年に気付いたノーティスは、やがてゆっくりとその口を開いた。
「城壁（ランパート）。要塞（フォルトレス）フォルトレスディフェンス。Ｄ以外の２ボタン同時押し、タイトルによってＳ＋ＨＳでは使えない、Ｐ＋Ｋのみなどコマンドが若干変わる。基本システムとして存在する削りダメージを減らし相手との距離を大きく離せるのが特徴で、空中ダッシュなどのフロートと共にプレイアブルキャラの中では一般的な法術の一つ。の広範囲型の応用だからブリジットは見た事あるんじゃない？」
「そうですね、これならしばらくは大丈夫だと思います」
「……なあ、法術とかよく分かんねーんだけどさ、ホントにこんなので平気なのか？」
「聖騎士団でも使ってた結界法術だから性能は折り紙つきだけど。不安だったら試してみる？」
　言いながらブリジットに読みかけの本を手渡し、少女は廊下へと歩いてゆく。開け放たれたままの扉の向こうで向き直り、ゆっくりと構えを取る。突然の行動に戸惑いを見せる少年を気にすることもなく、一寸息を止めて少女は握りこんだその手を大きく振りぬいた。
「!?」
　キィィィン、と甲高い反響音が鼓膜を叩く。反射的に瞑られた瞳を開けた先には、防壁を殴りつけた右手をひらひらと振りながら眉をしかめるノーティスと、衝撃の余波でひび割れた扉周辺の壁面、そして何事も無かったかのように光を放つ防壁がそれぞれ見えた。
「ね、だから言ったでしょ」
　そのまま軽い動作で自分たちの居る部屋と反対側の扉を殴りつけ、大きなヒビとクレーターを作り出す。これよりも力を込めて殴って無傷なのだから大丈夫だ、とでも言うように。

　そのまま結界に手を触れ、僅かな沈黙の後に結界を抜けて部屋へと戻ってくるノーティスに、彼女から持たされていた本を手渡すブリジット。一言の礼と共にそれを受け取り、少女はベッドへと腰掛けた。
「一応、あるだけの食料は集めたから。警察機構にもここまでの情報と合わせて連絡は入れておくし、先遣隊が来るまでの三日四日は持つと思う」
「あまり時間は掛けられませんが、資料を確認する間はウチ達もここに居ます」
「……ありがとう」
　ポツリと呟かれた言葉にきょとんとした表情を浮かべた後、少女はゆっくりと首を振る。
「礼を言われるほどの事じゃないわ。結局助けられたのはアンタ一人だけだし」
「……」
「ノーティスさん」
「事実でしょ」
　そういう事じゃなくて、と怪訝な顔をするブリジットをよそに、少女は座り込んだままの少年に視線を向けた。
「利口なのはいいけど、なんでもっと早く来てくれなかったくらいキレてくれても私は別に構わないわよ？」
「気分じゃねえよ……ていうか無茶苦茶理不尽じゃねえかそれ」
「無茶苦茶でも感情ってそんな物だし。どうせ言うなら同じ人間の警察よりギア相手の方が気兼ねなく言えるんじゃないの」
　冷淡な少女の言葉に少年は思わず口籠る。
「……ま、良いって言うんなら私がどうこう言う事じゃないけどね。ただ、そうやって抱え込んで壊れた連中を昔よく見たってだけ」
　少しの沈黙の後、少女は興味なさげに手に持っている本へと視線を戻した。どうせ情報を集める時間は必要だし、泣く暇くらいはあげる、と。
「……っ」

ページをめくる音が一つするたび、咽び泣く声が微かに聞こえる。少女らは何も問わず。少年は何も口に出さず。
資料を探る手も、情報を拾う目も止めることなく、彼女らはただ時間が過ぎることだけを待ち続けた。

「さっき調べてた時には居なかったみたいなんだけど、これってこの島の人であってる？」
一刻程の時間が経過した。次の目的地の目星を大まかに付けたのか、いくつかの本から纏められたメモ書きを懐に仕舞い、少女はその腰を上げる。
そして、ノーティスはブリジットの預かっていた荷物から一枚の写真を取り出し、少年へと問いかけた。写真を見た少年は一瞬その表情を強張らせ、その後平静を装いあいまいな答えを返す。
「……ああ、たしか、最初にそっちの人が入った家に住んでたと思う」
「あの家ですか？　でも誰も居ませんでしたけど……」
「ちょっと調べ直してみよっか」
ノーティスの提案に頷くブリジット。自分はどうすれば、と戸惑いを見せる少年にゆっくりと首を振り、少女はそれまでとは打って変わって、その口から優しい声色を吐き出した。
「アンタとは此処でお別れ。さっきも言ったでしょ、警察機構に連絡を入れたから到着するまで動くなって」
「でも」
「大丈夫ですよ。さっきも言った通りこの結界法術の頑丈さは折り紙つきですし、警察の人も救助隊を編成しているそうですから」
「……それに、結果次第じゃ耐えられないから。多分ね」
僅かな反応から内心を言い当てられたと感じたのか、少女の言葉に少年は顔を俯けてしまう。絶対に黒幕はウチ達が何とかします、と努めて明るく話すブリジットと共に結界の外へと脚を踏み出し、一度足を止めた少女は振り返ることなく口を開いた。
「死んでたら仇は討つ」
「……ああ」

「生きてたらアンタと同じように絶対に助ける」
「……、うん」
「それで良いでしょ」
　そう言い残して二人は屋敷を立ち去り、最初にブリジットが立ち入った民家へと再び足を運ぶ。単なる一般家庭と思わしき内装が荒らされている以外に目立ったものはなく、少年を匿う事にした部屋と同様に、血や吐瀉物、臓物などの死の痕跡は見受けられなかった。
　一つ二つ言葉を交わして捜索を行い、やがてブリジットが私室らしき部屋から見つけたのは一冊の日記帳。
「ノーティスさん、これに何か書いてるかもしれません」
「日記？　何日まである？」
「えー、っと……」
　パラパラとページをめくり、文章の頭に書かれていた日付を確認する。最後の記録は、少年が風車塔に隠れ始めたと話した日付よりさらに一週間ほど前。内容はそれまでのものとは大きく変わらない日常の記録と、末尾に書かれた数行ほどの非日常の記述。
「レイモンド……この人があの男の子の言ってた本土からの学者でしょうか」
「でしょうね。助手、か……嫌な予感しかしないわね」
「風の塔とそこに繋がる遺跡、この村の外にある川の下流にあるみたいです」
「さっきの部屋から地図持って来てる？」
　はい、と答えて少年が広げた地図を見ながら、日記やメモ書きに書かれた地名に印を付けて行く。村の外れにあり、島の中央へと流れる大きな川、川沿いの遺跡、外周と同じような断崖に阻まれ陸路では侵入経路の限られる、風の塔と呼ばれる構造物。
　数分ほど考えた結果、定まっていた目的地への道程が段々と明確に見え始めた。

第三章　進入

南極大陸への中継地点となる、ニュージーランドへと向かう飛空艇の中。ユニオンジャックのシャツを着た金髪の男と、紅いヘッドギアの男は二人、窓から流れる雲を眺めながら話をしていた。
「それで、大型ギアってのが中々のクセモノって話らしいんだ」
「……勿体付けてねえでとっとと話せ」
「ダンナってばせっかちだねぇ……ま、いいけど。」
ソルのわざとらしいため息に肩を竦め、アクセルは情報屋などから手に入れた内容を掻い摘んで説明していく。

曰く、大型ギアの口内に犬と魔法使いらしき男が同乗しているらしい。
曰く、大型ギアの外殻は非常に強固で生半可な攻撃では傷一つ与えられないらしい。
曰く、攻撃手段も多岐に渡り、並の賞金稼ぎでは手も足も出なかったらしい。
曰く。その魔法使いは大型ギア以外のギアも制御することが可能らしい。

「全部伝聞形じゃねえか」
「しょうがないでしょ噂なんだから。とにかく、ギアの制御技術を持ってるって噂通りならダンナの探してるあの男に繋がる情報も持ってるかもしれないし、調べる価値はあるんじゃないの？」
「どうだかな」
呆れたように窓の外へと視線を戻して再び黙り込んでしまう姿を見て肩を竦めた男は、通り掛かった乗務員を呼び止め注文を済ませた後にソルの方へと再び視線を戻す。
「まあそう言わずにさ、ちょっとした人助けだと思って」
「そもそもテメエが南極に向かう理由もねえだろうが」
「俺はまぁ……ダンナの役に立てればってね？　他にない訳じゃない

けど」
　ぼかすように空笑いを浮かべつつ、アクセルはカップへと口付けた。
　そうして飛空艇を乗り継ぐこと数時間。目的地としていた南極大陸の大地を踏みしめ、男二人は周囲を見渡す。合流時刻を伝えられた小型飛空艇の乗員は二人に気を付けてという旨の言葉を残し撤収し、残されたのは自分たち以外には何もない。
　道中の飛空艇で確認すべき事を一通り確認していた二人は、迷う素振りもなく目撃証言の集中する地点へと向かい歩き始める。時折アクセルが振ってくる雑談に渋々といった様子で対応しつつ歩みを進めていたソルは、やがて何かに気付いたように足を止める。
「……ダンナ？」
「構えろ」
「何ダンナ、ってアレは……はぐれギアって奴？」
　わざわざ南極に来て初めて会うのがはぐれギアとはツイてないねぇ、と嘯く男に違いないと淡白な返事をし、ソルは得物である封炎剣を構え姿勢を落とす。
　二人の眼前に現れたのは、数体の大型獣。一目見る限りでは狼と呼ばれる種と相違ないように見えるが、明らかに一般的なそれよりも大きく、そして真っ白なシルエットの中に見える紅い光点が、見た目通りの生物ではないことを示していた。
「集団戦か……面倒クセェな」
　言うが早いか、大型獣の内の一体が二人の臓腑を食い破らんと牙を剥き、大地を蹴って飛び掛かる。
　しかし正面から伸びた鎖鎌に眉間を打ち付けられて体勢を崩し、その隙を逃す筈もなく懐まで飛び込んでいたソルが封炎剣を胴体へと深々と突き刺し、獣の悲鳴は炎に巻かれて灰と消えた。
「そらっ!!」
「砕けろッ!!」
　続けざまに襲い来る獣たちを、それぞれの得物を手に迎撃し、そしてそれらは圧倒的な戦力差から見る見るうちに数を減らしてゆく。

やがて残り五体を切った頃、形勢不利を悟った一体に遅れて残ったギアが我先にと踵を返し逃げ始める。
だがしかし、それに気付かないほど切迫した戦況でもなければ、敵対行動を取ったギアの逃げの一手を見逃すほど男は甘くもなかった。
「悪いが、終いだ」
轟音と共に地を蹴ったソルの身体が炎を纏い、やがて大きな火球となって弾けるように加速する。
「タイラン・レイヴタイランレイヴＶｅｒ．α。↓↘←↙↑↗＋ＨＳ、ＥＸ限定、テンションゲージ５０％使用。全身に炎を纏って突進する。!!」
超高温の炎を纏った飛翔体は、こちらに背中を向けて逃げ続けるギアへと瞬く間に到達し、そのまま灼熱の渦へと獣たちを飲み込む。
炎にその身を焼かれ、物言わぬ亡骸となったギアが弾き飛ばされる。一体残らずギアを屠ったソルの身体を覆う炎は消え、そのまま彼は慣性に従い十数メートルは先の地面へと着地した。
「さすがダンナ」
「手こずらせやがって……行くぞ」
機構を展開し、冷却状態になったままの封炎剣を担いでソルは再び歩きはじめ、遅れてアクセルがその後を追い掛ける。明確に殺意を以て襲い掛かってきたようにも見えたギアの様子に警戒心を一段強め、彼らは大型ギアの目撃地点を目指す。
「ねえダンナ、さっきのアレってさ……」
「一体目はこっちにあてられて殺しにきたんだろうが、残りは脅しだな」
「ダンナもそう思う？　なんかヌルいな～とは思ったんだよね」
大型ギア以外も制御できるってのはあながち嘘でもなさそうだ、と男はわざとらしく大きなため息を吐く。
それに反応したソルの不機嫌そうな舌打ちに軽く詫びつつも、変わらずアクセルの足取りは重いままで、それでもソルに遅れないように歩き続ける事は止めない。
しかし、よりにもよって最も嘘であって欲しい噂が事実かもしれな

い、という情報がアクセルの脳内に後悔の二文字を浮かび上がらせたのは間違いなく、男は軽率に首を突っ込んだ自分を呪うのであった。

変わって、イセネ島中央に位置する村の一角。二人がこの家屋に入ってから十数分は経ったであろうか。

私室のテーブルに遺されていた日記をバッグへと仕舞い、少女らは尋ね人と思わしき人物が住んでいた住居を後にした。

燃え残る肉の臭いや血の悪臭で眉間に彫り込まれた皺を解す暇もなく、二人は村の外れへと進む。しばらく歩いている内にたどり着いたのは川沿いの船着き場。

複数の丸太を組み合わせて作られた、思いのほか広く作られたそこに足を踏み入れ、少女は周囲を見渡す。

「……流石に先手は打たれてるか」

「船、ありませんね……流れも急ですし、流されちゃってるのかもしれません」

湿った空気と目の前を流れる急流に眉を顰めたまま、少女は足場から周囲を見渡す。ブリジットの何か見えるか、という問いに生返事をしつつ上流、下流と目を向ければ、遠くの下流に同様の構造物が作られているのが小さく見えた。

目敏く反応したブリジットに下流の船着き場について伝え、ノーティスは塔へと近付くついでにそちらの船着き場も確認してみようと促す。特に迷う様子も見せずに頷く少年に満足げに目を細め、二人は川沿いを下り始めた。

「でも、本当に川から下って大丈夫なんでしょうか」

「あんまり気乗りはしないけど、地図を見た感じだと他に道は無さそうだし。もともと特定の人間だけが出入りする目的で建てられたんだと思う」

「……仕方ありませんけど、強行突破になる可能性も高いですよね」

「……それが目的だろうしね」

話している内に深みを増す森を進み、散発的に現れる怪物を倒して歩いて行くと、やがて二人は開けた場所に出た。

そこで目にしたのは先程と同様の船着き場と、流されないように陸に揚げられた大掛かりな筏。
ノーティスが剣を抜き、目配せに頷いたブリジットが周囲を警戒しながらゆっくりと筏へと近付く。そして筏に手を触れ、暫く状態を確認した後に彼は弾んだ声を上げた。
その後遅れてノーティスが筏に取りつき、ブリジットと交代して右手を縁に掛け、そして。
「よっ、と」
「……え？」
呆気にとられる少年の目の前、ずず、と重い音を立てて４ｍ四方はありそうな大きな塊が湿った土に線を引き始める。
破損しないように気を付けつつゆっくりと筏を引きずっていたノーティスであったが、やがてこちらを見ていたブリジットの視線に気付き不愉快そうに首を傾げる。
「……一応戦闘用ギアなんだから力強くて当たり前じゃない。そもそも剣だって普通の人間が片手で振り回せる重さじゃないんだし、今更驚かないでくれる？」
「すみません、つい……」
そう謝るブリジットと二人苦笑いを浮かべながら川縁へと少女は筏を移動させる。そして、合図とともにノーティスはそれを水上へと投げ入れた。
「飛び乗って」
弾かれるように駆け出した二人は、流れに乗って進み始める筏へと飛び移り、川下へとその双眸を向けた。
見る見るうちに船着き場を離れ、ぐんぐんと速度を上げる筏。流れて行く景色に一息ついた二人は、ノーティスの持っていたバッグから水筒や医療品を取り出して道中の戦闘で枯れた喉を潤し、ブリジットの肌に目立つ裂傷や擦り傷に手当を施してゆく。
「あ、ありがとうございます」
「良いからそのまま。ＧＥＡＲ（私）は軽い傷なんて放っとけばいいけど人間（そっち）はそうもいかないでしょ」

「そう、なんですけど……ちょっと落ち着かなくて」
ブリジットの言葉に目を丸くし、居心地悪そうに視線を逸らす。流石に大した怪我もないみたい、と誤魔化すようにぽんと処置を済ませた場所を軽く叩き、少女は飲みかけの水筒をひったくった。
「とにかく、予想が正しければ風の塔ってのを根城にしてる可能性が高い訳だし、ちょっとの油断が命取りになるわ」
「ええ、警戒しなくちゃいけませんね」
「……向こうもただ渓流を通してくれる気は無さそうだしね！」
「っ!!」
二人が構え、川岸からこちらに向けて飛び掛かってくる影へと迎撃態勢をとる。
「アイツは私がやる！　ブリジットは他を警戒して！」
「分かりました！」
言うが早いか、先陣を切って飛び込んできた怪物の一体の眉間にヨーヨーが放たれ、筏へ取りつくことなく急流に飲まれて消える。間髪を入れずに二体、三体と襲い掛かってくるそれらを迎撃し、筏へと取りついた一部をノーティスの大剣が引き裂く。
不安定かつ、攻撃を誤って当てようものなら崩壊する危険と隣り合わせな筏の上、そして流れる速さを増してゆく水流に翻弄されながらも、少女らは水上に投げ出される事なく目的地へと近付いてゆく。
「……見えた！」
「……少し、まずいかもしれません」
風の塔の姿を見つけた少女が歓喜の声を上げると同時に、後方を警戒していた少年が小さな舌打ちをする。振り返った先に見えるのは、筏の後ろを追うように波立つ水面と、ちらほらと見え隠れする『何か』の姿。
それが意味するところを瞬時に理解した少女は、先程少年がしたように無意識の内に舌打ちをして筏の後端に歩みを進めた。
「ごめん、十秒だけ時間ちょうだい」
「……やれそうですか？」
「上手くいくかはわかんないけど、剣とかヨーヨーよりはマシかも」

それだけ聞いて、ブリジットはヨーヨーを構え、召喚したロジャーと共に、十秒の時間を稼ぐため敵の迎撃を一手に引き受ける。水辺に落としてしまえば追撃されないとはいえ、怪物の頑強さが変わったという訳ではない以上一人での迎撃がそう長く続けられることではない事は、二人とも重々承知していた。

しかし、二人の見たものが予想通りの物であるならば、それの迎撃は最優先に行われるべきものであったのだ。

水棲型に追いつかれ、筏を壊されてしまえばまともに戦うことなどできなくなってしまうのだから。

（大丈夫、水を伝わせるんだから減衰はしない……あの人ほどの制御が必要なわけじゃないんだから……）

自分に言い聞かせるように、何度も大丈夫だと反芻する。両腕に意識を集中させ、纏った雷が描く軌跡をなるべく鮮明に思い浮かべる。

速度も、軌道制御も、雷撃を遠くまで維持するほどの精密な制御も今は要らない。

（ただ、放つまで散らさなきゃいい）

「ノーティスさん!!」

「喰らえッ……!」

ブリジットの呼ぶ声に遅れて筏の後方から襲い来る影、眼前にまで迫った怪物達を倒すため、大きく上げた腕を叩きつけるように振り下ろし少女は声を張り上げた。

「レイ・ディバイター←↘↓＋ＨＳ。カイのボツ技であり、ロボカイの必殺技。腕を振り下ろし、正面に多段ヒットする雷の衝撃波を発生させる。!!」

暫くの時間が経過した頃。急流を抜け、あちこちにぶつけながら速度を落としてゆく筏から岩場へと飛び移り、周囲に敵影のない事を確認した少女ら二人は大きく息を吐き、思い思いの場所へと腰を下ろした。

「……凄かったですね、さっきの技。あれも前に言ってた聖天貸法に？」

「まあ、ね。雷属性の法術の一つで、地上で使うのは難しい方だと思う。……とにかく周り全部感電させるつもりでやったから今回は出来たけど、正直私じゃ使いこなせないかな」
　あの天才サマは平気で色んな法術使ってるけどね、と自嘲気味に笑いながら少女は手荷物の様子を検める。幾つか駄目になっていた消耗品などを処分しつつ、手に持った水筒で喉を潤した。
「そういえば、あの大きな雷出すときも『聖騎士団奥義！』っていってますもんね……そんなに凄いんですか？」
「自分で制御しながらあのレベルの近接戦できるのなんてあの人位じゃない？　普通前線の人間じゃなくて法術部隊が別で制御するもんだし」
「ええ……」
　滅茶苦茶じゃないですか、と呆れた様な表情で水筒に口をつけるブリジットに同意を示しつつ、少女はバッグと大剣を取り直して体を起こす。
　視線を向けるのは、目的地である風の塔と、その手前に広がる遺跡群。
　いつから人の手が入らなくなったのだろうか、雨風に曝されて崩れた柱や構造物と、それを覆い尽くさんばかりの蔦や苔。
　そして、それらとは対照的に踏み固められ、人の出入りがうかがえる道とを見比べて、少女は大剣を握る手に力を籠め直す。
「ビンゴ」
「ここで間違いなさそうですね」
　二人が遺跡の中を進む内に、やがて遠くに一つの影が姿を現す。
　初めはおぼろげに見えたその姿が、近づくにつれてハッキリと人の形を浮かび上がらせた辺りで、ノーティスの表情が硬く強張った。
「ノーティスさん？　あれって……」
「……多分」
　少女の表情を訝しみ、正面の人影に目を凝らした少年は、手荷物の小袋と写真を不意に思い浮かべた。
　港町で出会った一人の女性から受けた、イセネ島に住む姉を捜索し

て欲しいという依頼。彼女から預かった写真や伝え聞いた背格好など、此処に向かうまでに得た情報を思い返し、遠目に見える人影と照合してゆく。

そして、それらの情報と合致する人物であると判別できるまでの距離に近づいたその時、隣を歩く少女の足がピタリと止まった。

つられて足を止め、ブリジットは隣で立ち止まる少女に視線を向ける。少年には、彼女の表情が曇り、瞳から光が消えている理由が分からなかった。

何故、声を掛けようとしない？　生存者が見つかったのに。

何故、剣から手を離そうとしない？　目の前にいるのは人間なのに。

どうして――そんなに辛そうな表情をしているんですか。

問いかける言葉を持てず、戸惑いのまま再び少女の視線の先に振り返ったブリジットは、目に映る姿に小さな違和感を覚える。それは小さく、単純で、そして根本的な違和感。

（どうして、あの場所から動こうとしないんだろう）

その答えを得るためか、あるいは単純な厚意から、少年は先んじて一歩足を踏み出す。後ろから聞こえた声は焦りからか遠く聞こえ、やがて駆け出した少年の手が立ち尽くす女性に触れる瞬間、昂っていた心から一瞬にして血の気が引いてゆく。

背筋を走った悪寒から視界が一気に鮮明になり、自分が手を伸ばそうとしていたものが、今どのような姿をしているかがハッキリと見えた。

「え」

それは、有り体に言えば既に人間ではなかった。

足元から生える蔦に体は同化されており、そして彼女の周囲を、塔の入り口を守るように複数の蔦が姿を現し、覇王花（ラフレシア）に似た花が咲き誇る。

そして背中から見える四枚の翼、周囲の蔦や草花を含むそれらが苦

悶の表情を浮かべる女の意志に従い動くものだと気付いた時、ブリジットは先程浮かんだ疑問の答えを得、そして目を背けようとしていた自身を呪った。
「ブリジット!!」
　地表を突き破って伸びる複数の蔦、少年のみを貫こうとするそれを反射的に迎撃するも、すべてを防ぐまでには至らず、攻撃をすり抜けた内の数本が体を掠め、逃げ場を失った少年の胴体を目掛けて襲いかかる。
「くっ!?」
　鋭利な何かが肉を貫く音が、遥か遠くに聞こえたような気がした。

第四章　対峙

灼けるような痛みが、腹部を抉る。
――またか。
どこか他人事のようにそう考えながら、突き飛ばした少年の方へと振り返れば、今にも泣きそうな表情を浮かべている姿が見えて。
こんな状況だというのに、少しばかり気勢が緩んだ。
「……そんな顔しなくて、いいのに」
身体を貫く蔦によってベルトが千切れ、背負っていた剣が宙を舞う。人ではない何かへと変わり果てた探し人へと視線を戻し、ノーティスはその両腕で蔦を引き抜き重力に任せて地面へと降り立つ。
そして、彼女に先んじて地面に刺さっていた大剣を手に取り、戸惑うブリジットを庇うように二人を目掛けて伸びる殺意を切り払った。
「あの……怪我は」
「それよりあっちが優先!!」
「は、はい！」
鋭く飛んだ、水音を含んだ声に唇をきゅっと引き結び、二人は態勢を立て直すため、迫りくる攻撃を躱して間合いを大きく離す。
やがて攻撃が届かなくなったと見たか、怪物と化した女は二人の侵入を防ぐように蔦を張り巡らせてバリケードを構築し始める。そして、その様を苦々しげに睨みつけていたノーティスの上体が突如、ぐらりと大きく揺れてそのまま崩れ落ちた。
「うッぷ……がはっ……ぁ……!!」
「ノーティスさん?!」
膝を付いて蹲るノーティスの視線の先、雑草が踏み荒らされ土があらわになった獣道に、不快感を催す水音を伴って赤黒い吐瀉物が撒き散らされる。
肩で息をしながら、涙の浮かんだ目尻を拭い立ち上がろうとする少女を慌てて少年は支えた。
「全然大丈夫じゃないじゃないですか、どうして!?」
「……アンタが、アレ……喰らったら、間違いなく死んでたでしょ……

それくらいは分かってると、思ったんだけど」
　呆れた様な口調でぽつりぽつりと言葉を紡ぐ少女を遮り、涙混じりの声を荒げて、ブリジットは少しずつバリケードから距離を取るように体を起こした。
「わかってるから言ってるんです!!　とにかく一旦下がりましょう、このままだと」
「いいワケ、ないでしょ……バリケードを強固にされ……たら、侵入どころじゃなくなるんだから」
「でも！」
「良いから!!」
　食い下がるブリジットを無理矢理振り払い、少女は再び剣を構える。引き留めようと更に伸ばした腕が届く前に、彼女は少しずつ高さを増してゆく蔦の壁へと駆け出した。
（……ち、動けはするけど、明らかに前より治りが遅い。ギア細胞の自然治癒が阻害されてるのか知らないけど、あんまり余裕なさそうだね）
「ぐっ……ぁぁぁぁぁぁぁぁッ!!!!」
　痛みに鈍る身体を奮い立たせ、悲鳴にも似た咆哮を上げ、その手に抱えた大剣を大きく振り抜く。纏った風は一際大きな暴風を巻き起こし、織り上げられた蔦に一筋の綻びを生んだ。
　しかし、身体に掛かった負荷が傷を開かせ、次の一撃を鈍らせる。
「クソ……もう一発……!!」
「下がってください!!」
　言うが早いか、少女の脇を青い影が駆け抜ける。ヨーヨーを使い加速した勢いで大地を蹴り宙に跳び出し、ウエストポーチからありったけの薬莢を、少女が作り出したバリケードの綻びへと向かって投げつけた。
　そして、合わせて再装填を済ませたヨーヨーを構え、深く息を吸い込む。
「行けぇっ!!」
　続けて放り投げたヨーヨーが火花を散らし、続けて装填された薬莢

をスターターとして炎が炸裂する。生み出された爆風は先に投げられた薬莢に次々と引火し、バリケードを引き裂くように大きな炎を上げてゆく。
「やった……？」
「……ひとまず、バリケードはどうにかって所かな」
肩で息を吐くノーティスとブリジットの正面で、燃え落ちていく蔦が壁の形を失っていく。段々と開けて行く視界の先、再び姿を現した人影に少女らは改めて自分たちの現状を突き付けられ、無意識の内に強く拳を握り込んだ。
私達は間に合わなかったのだ、と。

燃え残る炎を挟んで二人と一体は向かい合う。
乱れた呼吸を整える間もなく、こちらの様子を伺うようにゆらゆらと蠢いていた蔦が再び殺意を持って動き出した。
「チッ……！」
「くっ！」
二人を狙ってそれぞれ伸びてくる蔦を一方は断ち切り、また一方は身をかがめて潜り抜け、少女らは一気に目標へと向けて駆け出す。二度三度と繰り返される攻撃の隙間から見える入口には、先程二人が破壊したものと同様のバリケードが生成され、侵入者を阻んでいた。
「……戦闘を避けて通り抜けるのは難しそうですね」
「それ以前に、あんな化物を放置して行く訳にもいかないでしょ」
「それは……いえ、大丈夫です」
言いかけた言葉を飲み込み、少年はぎゅっと唇を引き結ぶ。
少女の台詞は、今からやろうとしている事は、自分達の力不足を証明するだけに過ぎないのだ。
それがどれほど酷薄なことであるかは理解している。そして、この行為を他者に押し付ける事が、どれほど無責任であるかも。
「……やりましょう」
だからせめて、背を向けて逃げはしないと思い直し、少年は三度ヨーヨーを構えた。

地表を破り突き立てられる蔦を迂回し、正面や側面から来る攻撃を躱し、ノーティスは敵へと肉薄する。迎撃を図る蔦を大剣で打ち払い、返す刃が束ねられた蔦で軌道を逸らされ、そうして互いに致命傷を狙うような剣戟が繰り返される。
「コイツっ……!?」
そして、数度の打ち合いの後、大きく弾かれた大剣ごと身体が宙へと浮かび上がった。数m程の距離が開き、体勢を立て直して再び構えを取った少女の瞳が驚愕に見開かれる。
聞こえたのは苦悶の声。そして数瞬の後に、青白い光条が輪になって周囲に放たれる。
「ぐあッ!!?」
「きゃぁっ!?」
咄嗟に盾として構えた大剣やヨーヨー毎、その身を弾き飛ばすような衝撃が二人の身体を襲う。受け身も取れず地面を転がり、数秒の後にようやくその身を起こすが、白黒に明滅する視界と力の入らない両脚や全身を襲う痺れによって、少女らは自らが受けた攻撃の質を理解していた。
（雷属性の法力?!　予備動作もなくあんな一瞬で……っ！）
「ロ、ジャー！」
無意識に落ちた視線の先から地面を割って伸びる殺意に対して、主の身を守るべくロジャーがその剛腕を唸らせる。そして、法力によって守られた腕が矛先を逸らし、致命的な一撃を少年の頬に裂傷を生むまでに止めた。
「動ける!?」
「なんとか！」
「なら走って!!」
鋭く飛んだノーティスの声に、少年は弾かれたようにその場から飛び退く。着地を誤り地面を転がる少年の視界に入った花のような物体が、先程まで彼の居た場所を狙ってその花弁を閉じる。
ブリジットの背筋をなぞる悪寒が、その動きの意味するところを過不足なく伝え、いまだ痺れの残る身体に鞭を打たせた。

一つ、また一つと襲い来る攻撃を躱し、再び少女らは怪物の喉元に手の届く距離へと飛び込む。
「今度こそ!!」
そう言いながら振るった剣を起点に暴風が起こり、身を守ろうと束ねられた蔦ごと怪物の身を食い破らんと牙を突き立てる。しかし、引き裂かれ落下してゆく茨や蔦とは対照的に、苦し気な表情を浮かべたままの女には掠り傷すら与えられず、少女は歯噛みする。
「ちっ……コイツもか……!」
法力を通さない防壁。先の戦闘でも遭遇した絶対的不利に少女の表情が険しくなる。法力が決定打にならない敵を相手取るということがどういう事なのか、少女は先の戦闘経験から理解していたのだから。
そしてそれ以上に相対する者の性質が、それを殺さざるを得ない状況にある彼女の心の内に暗い影を落としていた。
「……ブリジット、援護お願い」
「……はい」
強く握りこまれた剣と、一段と低くなった声にその言葉の意味するところを察したか、神妙な面持ちで少年は頷き、再び駆け出す。
いつまた同じように光条が放たれるか分からず、そしてこの距離であの攻撃を再び受けてしまえば、続けてくる攻撃を先程のように躱すことは出来そうにないのだ。
二人は、この接敵で全てを終わらせなければならなかった。
「これ、でッ!!」
三度の斬撃。巻き起こる暴風に紛れて大地を、続けて周囲を守るように伸び続ける茨や蔦を踏み越え、少女は女の頭上へと再び躍り出る。
迎撃するように四方から襲い来る蔦をその身を捻ってすり抜け、下方から放たれたヨーヨーやロジャーの拳が軌道を逸らし、それでも躱しきれなかった一本がその腕を貫くのにも構わず大剣を振りかぶる。
声にならない声と共に放り投げられたそれは僅かに軌道を逸れ、植物の一部と女の姿をしたそれの左腕を吹き飛ばした。

『ぁあああああァァあッ!!!』
耳をつんざく悲鳴。止めを刺そうと構えた拳を咄嗟に留め、上体を守るように構え直す。
そしてその反応は正しいものであった。一瞬視界に移った青白い光が、再び電撃を帯びた光条となって彼女を襲ったのだから。
「ぐッ……うぁ?!」
吹き飛ばされかけた身体が、がくん、と大きな抵抗を受けて宙に留まる。
それに伴って不意に痛んだ手首と、巻き付いたヨーヨーから伸びるストリングの先に視線は吸い寄せられ、この一瞬で起こった出来事を少女は無力感と共に理解した。
故に、迷っている暇などあろうはずが無かった。
解ける糸も、力を失って落下する人影にも目もくれず、少女は練り上げた法力で中空を蹴り、そして。
虚ろだった女の瞳が一瞬だけ光を取り戻し、その唇が小さく動く。
——ありがとう。
その言葉に応えるように、少女はその腕を尋ね人の胸元へと突き立てた。
それからどれほどの時が経っただろうか。
頬に落ちる雫と寝心地の悪さに目覚めた少年の瞳に映ったのは、憔悴しきった表情を浮かべる金色の瞳と、僅かばかりの照明が設置された坑道の一角だった。
「ノーティス、さん……?」
「……よかった。応急処置はしたけど、動ける?」
「え? あ、はい……なんとか。あの」
言いかけた言葉を飲み込み、少年は口を噤む。彼女がこうしてここに居て、あの時無防備な状態を晒していた自分がこうして生きている

のなら、彼女はあの敵を倒す事が出来たのだろうと納得して。
そして、彼女を倒したという事がどういう意味を持つのかも。
少年は十二分に理解していた。

「身体は平気？」
「万全とは言えませんが、どうにか戦えるくらいにはなったと思います」
しばらくの時間の後。先の戦闘で損傷した衣服や汚損した非常食など、持ち歩けなくなった物や使用できない物の整理を済ませ、一通り装備を検めた二人はゆっくりとその腰を上げる。
「ところで、ここは……？」
「地下坑道みたいね。風の塔まではもうちょっと進まなきゃいけないみたい」
今は使われていないのか、所々に風化の見える線路に沿って歩きながら少女は答える。しかし、普段とまるで変わらないその口調とは裏腹に、声色には底冷えのするような悪意が乗せられていた。
その理由も悪意の矛先も分かってはいるものの、かといって掛けられる言葉は持っておらず、道なりに進む間、少年はただただ相槌を打つだけに終始していた。
やがて、しばらくの道程の後に閉塞的だった視界が不意に開ける。
最低限の通路しかなかったような坑道から大規模な洞穴へと姿を変えた周囲を見渡せば、壁面に埋設するように見える人工的な構造物や、段々と近代的なものへと変わってゆく照明がちらほらと見え始め、二人の目的地が近づいているであろうことを予感させた。
「……これって」
「……？でしょ、こんな規模の研究施設が現存してたなんて」
そこから更に進み続けること数十分。散発する襲撃者を迎え撃ち、追手を振り切ってたどり着いたのは、明らかに人の手が入った建造物の室内。
青白い照明の光と無機質な金属の床や壁、張り巡らされたガラスの向こうに見える影などから、現在に至るまで稼働を続けていたことが

うかがえる。
「これも、レイモンドって人が……？」
「どうかしら。今使ってるのはそうだろうけど、明らかに一人や二人で用意できる規模の施設じゃないし」
「じゃあ、もともとこの島にあったって事ですか？」
「……でしょうね」
そうつまらなさそうに答えながら、閉ざされた扉の横に立ち、慣れた手つきで端末を操作する。何度かの操作音の後、ゆっくりと持ち上がってゆく分厚い扉の音に紛れて聞こえた唸り声に、少女らはそれぞれの得物を構えた。
「……そりゃ、ここを拠点にしてるならそうなるか！」
「なるべく時間は掛けたくないですね……！」
扉の向こうから姿を現したのは、村や地上で倒してきた怪物とは異なり、明らかに人の手が入ったであろう異形のもの。体表は甲虫のような光沢を放つ外殻に守られ、首の後や四肢に、チューブのような構造体が見えている。
こちらの姿に気付いた怪物の内数体が、先陣を切って襲い来る。
受け止めた攻撃が明らかに重さを増していることに気付いたのも束の間、少年の援護により態勢を立て直して、返す刃で複数体を一息に切り伏せた。
「ちょっと強くなったくらいで!!」
そして少女が行く手を遮る最後の一体へと接近したその時、化物が唸り声を上げ、その胸部が大きく開く。
「遅い!!」
何らかの攻撃を目論んだであろうその隙を彼女が見逃す筈もなく、大きく隆起した左腕と、その爪が開かれた胸郭へと突き立てられた。
殺意の込められた唸り声は苦悶の鳴き声へと変わり、やがて血を吹き出しながらそれは糸の切れた人形のように崩れ落ちる。
そうして進み続ける少女の後を追って走る少年の側面。視界の端に映った紅い影と、こちらに気付いた少女の放った声に慌てて姿勢を落とせば、その頭上を割れたガラスが飛び、一陣の風が舞い上がった

ガラスと、人のようなシルエットをした何かを吹き飛ばす。
「今のは……」
「新型っていうか、明らかにさっきのとは違うタイプだね……こいつも、法力そのもののダメージはあんまりないみたい」
「そんな敵ばかりですね……」
　呆れた様なブリジットの物言いに同意を示しつつ、少女は何度目かの思索に耽る。既に二種類のものと接敵している、合成獣とでも形容できそうな大型の怪物や大量に現れた中型ギアのような何か、そして見慣れない術式（スコア）によって動いていたマネキン。
　それらの存在が、一度妄想だと否定しようとした一つの仮説を再び浮かび上がらせる。
「……あの天才サマみたいに即席でスコア書ければまだ楽になったかしらね」
「どうしたんですか？」
「何でもないわよ」
　大袈裟なため息を一つ吐き、少女は続く扉を開けて先へと進んでゆく。
（さっきのもそうだけど、明らかに人間（ヒト）を実験体にしてる個体が増えてきてる……村の連中は手遅れかもしれないけど、それでも急ぐに越したことはなさそうね）
　明らかに他の区画とは異なる金網の張られた扉。機械のような動作音を伴って開かれたそこから姿を現す赤黒い巨躯を睨み上げ、少女らは戦闘態勢を取った。

「大型ギアですか？」
　かつて同じ聖騎士団に所属していた少女からの報せを受け、装備と人員を整えていた警察機構の青年、カイ＝キスクは部下からもたらされた新たな情報に眉を顰めた。
「はい、南極大陸での目撃情報が複数件上がっております。活動状態で発見され、討伐しようとした賞金稼ぎも返り討ちにあったと……」
「よりにもよってこのタイミングでか……分かりました、イセネ島へ

向かう救助部隊の指揮はあなたに任せます」
「南極へ向かうのですか？」
　部下の問い掛けに微妙な表情を浮かべつつも肯定を示すように頷く。なるべくなら自分でイセネ島への救援も行いたいところではあるが、活動状態の大型ギアともなれば対処できる人間が限られてしまう以上、自分で対応するしかないと。
「敵意を持って戦う大型ギアが相手となれば私の領分です」
「……了解しました。では編成完了した部隊から順次イセネへと向かわせます」
「お願いします。先行しているノーティスからも法力への耐性が高い敵がいるという報告を受けています、警戒を怠らないでください」
　そう言付けて、カイは執務室を抜けたその足で小型飛空艇の発着場へと向かうのであった。
「カイ様。小型飛空艇、準備出来ております」
「助かります」
「お一人で、行かれるおつもりですか？」
　不安そうな視線を受けて、カイは飛空艇に乗り込む足を止める。そして事も無げに部下の方へと振り返って自信に満ちた笑みを返した。無謀と勇気は違うと。
「近隣の部隊に協力を要請しています。私一人で事に当たるつもりはありませんよ」
「それなら良いのですが……」
「それに、被害程度についてもいくつか気になる記述がありました。楽観視するつもりはありませんが、大型の猛獣などを勘違いした可能性もあります」
　心配には及ばないと笑いかけ、青年は飛空艇の昇降ハッチを閉じて操縦席へと着座する。
　そして、部下に見送られながら発進させた乗機の中で、法力通信を開くのであった。

第五章　異界

「チッ、手間取らせてくれたわね」
崩れ落ちる巨体を一瞥し、少女は大剣に付いた血を振り払う。
「……ひとまず、敵の気配は消えたみたいですね」
少年の言葉通り、行く手を阻むように現れた怪物たちはことごとくその命を失い、少女らが立つ研究所の一室を夥しい量の血や臓物で染め上げていた。
こみ上げる吐き気をこらえ、少年は手近な実験機器と思しき機械へとその手を伸ばす。
操作法も分からず適当に幾つかのボタンやパネルを操作している内に、モニターの一つが淡い光を放った。
「あ……ノーティスさん。動きましたよ」
「どれ？　……なるほど、こいつが今回の首謀者って訳か」
幾つか表示された情報を調べていく内に、やがて一人の男の情報が画面に浮かび上がる。モニターに映し出されたのは、眼鏡をかけた金髪ロングヘアーの男性の顔写真と、隣に記されたレイモンドという人名。そして、彼が研究していたらしき法力にまつわる事項を読み進めるうちに、二人の表情が段々と険しいものへと変わってゆく。
「この資料、クリスさん達を狙ってた人が持ってた物でも見た事のある記述があります」
「それに何人か村を調べてる内に見かけた名前や顔写真もあるね。幾つか持って帰れば此処（イセネ島）で起こった事件の証拠になるはず」
そう言いながら画面に映された顔写真や文書を撮っていく内に、少女の目に入ったある単語が、彼女の手を不意に止めた。しばらくの沈黙の後、少女は釈然としないようにその口を開く。
「イヌス……なんだっけ、異界の王？　でもアレって上位世界（バックヤード）森羅万象を定義する情報世界。いわばアカシックレコードとも言える存在であり、法力によって引き起こされる超常現象や自然現象はバックヤードから定義を持ち出す事で現世において効力を発揮する。一般には存在は知られておらず、実際にバックヤードの存在を観測できた

者も、「第一の男」と呼ばれる法力の始祖を除いて存在しないため、法力学を語る上ではあくまで仮の存在として扱われている。絡みの与太話みたいなものだったような気がするんだけど……」
「それ聞いた事あります。確か異界から現れた魔物や怪物を束ねる王様で、遠い昔に封印されたとか……そんなお話でしたよね？」
ブリジットの言葉に同意を示し、ノーティスは説明を続ける。
「そうそう。バックヤードが存在するっていうのは確かに昔から言われてるけど、観測に成功した人もいないし、あるって根拠も法力のメカニズムを説明するためにどうしても必要って感じのばっかりで、今のところあんまり正確な情報が無いんだよね」
「でも、この資料の書き方……」
ブリジットの懸念に同意を示すように、少女の声が一段と重く響いた。
「うん……多分、コイツは近いものを見つけてる」
「ですけど、実際にそんなものが居たとして本当に制御なんてできるんでしょうか……？」
決定的なノーティスの言葉に少年の表情から血の気が引く。おとぎ話や伝承のものとして認識していたはずの強大な存在が実際に存在し、更にはそれを我が物としようとする人物がいると。
にわかには信じられずに口をついて出た言葉も、少女と二人で調べていく資料の数々が希望的観測を打ち砕く材料として次々と牙を剥く。
「肝心の研究記録は鍵が掛けられてるけど、少なくともこいつはそのつもりで研究を進めてるはず。……実際、此処で見かけた連中も幾つか資料が出てきてるし、図面っぽいデータもあった。ここから風の塔に向かう連絡通路と地下通路が……」
言いかけた少女の言葉が虚空に消え、代わって唸り声のような、微かな吐息がその口から漏れ出る。不思議そうにその横顔を眺めていた少年が、ふと小さな声を上げた。
「……この資料、何かおかしくないですか？」
「何が？　……いや、そうか」

ブリジットの問い掛けに一瞬怪訝な表情を浮かべた少女だったが、モニターに向けられた視線を追い掛け、浮かび上がってきた違和感にはっと息を飲む。そして少年の言わんとするところに気付いたノーティスは、最低限の証拠の確保を済ませて大剣を手に駆け出した。

ここまでの会敵から、黒幕がここを拠点としていたのは恐らく間違いではなく、二人の侵入に気付いていることもおおよそ疑うべきではないだろう。そして、偶然によるところとはいえ、自身に繋がる情報や人体実験の証拠となる資料、更には本拠地ともいえる場所への道のりを少女らが突き止められる状態にしておくメリットなど考えられない。

つまり。

「イヌスに直接関係する情報の一部にだけ鍵が掛けられてた……！」

「はい！　証拠を全て隠滅する時間が無かったなら、まだ追いつける可能性があります！」

そうして封鎖された扉を切り開き、妨害を試みる怪物を打ち砕きながら二人は風の塔へと繋がる連絡通路へと辿り着く。

吹き抜けの中央に見える、研究施設の炉心らしき巨大な構造物を一瞥し、靴音を鳴らしながら二人は正面に見える扉を目指し駆け抜けてゆく。

やがて通路の半分を過ぎた頃、咆哮が響き渡った。

「ここからは行かせません、ってか」

「道は、間違いないみたいですね」

そう呟く二人の正面に立ちはだかるように、深紅の体毛に覆われた獣が一際大きな唸り声を上げる。一目見て標準的な動物の体躯を外れていると分かる巨体と、人為的なものと思われる拘束具。そして一際の違和感を主張する脇腹の構造物。

倒して進む以外ないと身構えた直後、一瞬の揺らぎの後に目の前の姿がふっと立ち消えた。

「なっ」

「クソっ！」

耳をつんざくような衝撃音を上げて、少女の構えた大剣が獣の突撃によって大きく跳ね上げられる。痺れる腕を無理矢理振り回し、再び突き立てられようとした爪ごとその巨体を弾き飛ばした。
しかし、ノーティスが大勢を立て直すよりも早くそれは駆け出し、三度その爪と牙で彼女らへと襲い掛かる。
袈裟懸けに振り下ろされる腕を躱しながら振るった大剣は体毛を切り裂くにとどまり、大きく捻った獣の身体から、折り畳まれていた構造物がその殺意を形作った。
「こいつ……っ!?」
盾のように掲げた大剣を脇腹から伸びた腕が強く打ち据え、弾き飛ばされた身体が手摺へと叩きつけられる。
体勢を立て直す少女へと追撃を加えようと転回した四足歩行の怪物は、援護の為に放たれたヨーヨーに制され、様子をうかがうように二人との距離を大きく開けた。
「流石にデカくてもトロくはならないか……!」
「どうにか動きを止められればいいんですけど……」
「……」
ブリジットの言葉に一つ、ノーティスは大きな息を吐いた。
感触を確かめるように握り直された大剣と、ゆっくりと構えを取り直した少女に視線を向けることなく、少年は一言口を開いた。
「ダメですからね」
「……分かってるよ。アレはどうなの、例のでっかい熊使うヤツ」
「出来なくはないですけど、壁なりにしようとするとそれなりに重さが必要ですし、この通路が耐えられるかどうか……」
そう不安げに話す少年に、少女は「その手があったか」と不敵な笑みを浮かべる。
「……ノーティスさん?」
「長引きそうなら、通路毎アイツを落として進む」
「それは……」
危険すぎる、と険しい表情を浮かべるブリジットを余所に再び少女は戦闘を再開する。

この後のことを考えればあまり時間を掛けていられないのはその通りだが、とはいえ彼女の策を採用とするには、その後のリスクは到底看過できるものではなかった。
しかし、その身に似合わぬ俊敏さに翻弄され、戦闘は長引くばかり。明確な決定打を与える事も叶わず、焦燥感が二人の心を染め始めていた。
（半端な踏み込みだと毛皮も通らないか……なら）
三度の剣戟を重ね怪物の脳天を目掛けた斬撃は、轟音を伴って通路の床へと叩きつけられる。足元を一際大きく揺るがす振動に気を取られたのも束の間、破滅的な音が一つ、吹き抜けに響いた。
「ノーティスさん!!!」
「走って!!」
軋みを上げる亀裂の中心から慌てて飛びのくブリジットを見送り、三度唸り声を上げる猛獣。逃げようとする一体を仕留めるよりも、目の前の少女に対しての敵愾心を優先したのだろう。
先程までよりも明らかに強い怒りの色が、その表情や咆哮ににじみ出すのが見えた。
「へえ、私が何やったか分かるんだ。見た目より利口じゃない」
言い終わる前に、少女の眼前へと巨体が迫る。続けて迫る爪からしゃがみ込むように身体を逃がし、空いた下顎を蹴り上げた。
そして反動で仰け反る獣の体勢が戻るよりも速く、彼女はその手の大剣を横腹に叩きつける。
「……ぁあああッ!!」
轟音を響かせて巨体が弾き飛ばされる。しかし、切先から伝わった手応えは芳しいものではなく、ノーティスは苦々しげに巻き起こる砂埃を睨みつけた。しかし、数分に思える沈黙を経てもその影は動かず。
やがて事態は、足場の崩壊と同時に急速に動き出した。
踵を返し、少年の後を追い始めた少女のすぐ横を、一陣の風が駆け抜ける。
「ッ……?!」

「え」
息を飲む暇すら惜しかった。
その手の剣を投擲し、その両脚に意識を集中し、少年に襲い掛かる死よりも速く、少女はその姿を変質させながら崩れ落ちる足場を蹴って飛ぶ。
少年が背後に気付き、自らの置かれた状況を察し、眼前に迫る爪に目を見開いたその時。
「落ちろ」
暴力が、死を叩き伏せた。
「ノーティスさん、大丈夫ですか？」
「なんとかね。剣も回収したし、一旦そっちに戻るよ」
凄まじい勢いで壁に叩きつけられクレーターの中心で動かなくなった怪物を後目に、少女はゆっくりと足場へと降下してゆく。ギア細胞の急激な活性化の反動で、フロートによる制御にも精細さを欠いているのが、ブリジットの視点からでもよく分かった。
「……こういう危ない真似しちゃダメって言いましたよね」
「ごめんって。あれ以上時間掛けてもいられなかったし、さっきは危なかったけど転落せずに済んだだけ大分マシでしょ？」
「……はぁ、それはそうかもしれませんけど……」
どうにか着地を済ませ、肩で息をするノーティスに呆れたように答えるブリジット。
先行して道を進み始めた少年が、ため息とともに吐き出された言葉は最後まで紡がれる事は無かった。
「ぐ……ぁっ!?」
「ノーティスさん!?」
息を吹き返した怪物に喰らい付かれ、縺れ合うように少女は体勢を崩す。
少年が気付いて助けに入るよりも速く、彼女の身体は途切れた通路の先へと落ちて行くのだった。
「……っざけんじゃ、ないわよ!!」

怪物と縺れ合いながら吹き抜けを落ちて行く少女は、脇腹に喰らい付く怪物を引き剥がそうと、刃へと変質させた腕を繰り返しその脇腹へと突き立てた。
先程までとは打って変わって易々と通る手応えに、合わせて上がるか細い悲鳴がこの戦いの終わりを教える。
「これで……!!」
やがて抵抗も弱まり、深く食い込んでいた牙がずるりと音を立てて抜けた。激痛に表情を歪めながらも攻撃の手を緩める事はなく、複数回の攻撃を経て血みどろの巨体が力を失い、少女の身体から離れた頃。
吹き抜けの最下層が視界の端に微かに見え始めた。
(どうにか引き剥がしたけど、ここからフロート練るのは流石に無理かな)
朦朧とする意識の中、加速してゆく落下速度。急激な多量の出血により四肢から力が失われ、法力を練ることも姿勢を立て直す事も出来ず、少女は落下を続ける。
流石に死んだかな、と他人事のような思考を寸断するように少年の声が洞穴に響いた。
「ノーティスさん!!」
「え……?」
不意に手に触れる体温と引き寄せられる身体。
数秒遅れてすぐそばから聞こえる声と、全身を包む柔らかな感触に、不完全ながら何が起こったのかをおおよそ察し、少女は自身を落下の衝撃から守ってくれたぬいぐるみの感触にその身を委ねた。
「……動けますか」
「……何とか。それにしても瓦礫を伝って追いついてくるなんて、とんでもない無茶したわね」
「それは、しょうがないじゃないですか」
呆れたように肩を竦める少年に、心配を掛けたことを詫び、どうにか動く身体をゆっくりとぬいぐるみの腹から起こす。
周囲に広がるのは殆ど人の手が入っていないように見える一面の

岩肌と、とりあえずで設置したような簡素なレール。終端には古びたトロッコが放置されており、その周囲の採掘跡から鉱物資源の採集に使われていたのだろうとうかがえる。
「……活火山か、急いだ方が良さそう……っ!?」
「……まさかまだ……?!」
ぐらり、と地面が揺れる。程なくして崩れ始める天井と、振動に合わせて落下してくる瓦礫から逃れるように、少女らはレールを辿るように走り出した。
「あの化物もそうですけど、首謀者……レイモンドはどういう目的でこんなことを……」
「……さあね、異常者の考える事なんて気にするだけ無駄でしょ」
どうせ碌な目的じゃないんだから、と続けて吐き捨てるように呟き、少女は更に歩調を速める。焦りがそのまま二人の走る速度へと表れ、僅かに姿を見せる追手も落石や、二人の攻撃によって悉く倒れてゆく。そしてしばらくの脱出劇の後、正面に見えてきた出口らしき光に目を細めたその時、背後から微かに聞こえる遠吠えが少女の表情を一層険しいものへと変えた。
「ノーティスさん、急いでください!」
「ゴメン先行ってて!」
「でも!」
先んじて出口を抜けた少年が慌てて戻ろう戻ろうと踵を返した直後、法力によって形作られた防壁が、少年と少女を隔てる。
「すぐ追いつくから」
自分自身に言い聞かせる様な言葉に迷い、やがて少年は一つ呼吸を整え、背を向けて走り出した。
その背中を見送った後、少女は出口を塞ぐように剣を構え咆哮の響く洞穴を見据える。
崩落の続く洞窟、たった二人の人間を追うには過剰なほどの速度で近づきつつある足音と怒りの籠った咆哮。薄暗い闇の向こうに揺らぐ炎を見据える彼女の瞳が、再び紅い光を纏った。
「……呆れた。しつこい奴はモテないよ」

装甲のような外殻に覆われた腕が、まるで小枝を振るような軽やかさで大剣を振り抜く。少女の眼前にまで迫っていた炎の塊は、彼女に触れる事も叶わずその横をすり抜け、苦悶の悲鳴と共にその身を引き裂かれ息絶えた。
「はぁ……急いで追いつかないと……ッ!?」
足元を揺らす大きな振動に危険を悟り、ノーティスは洞窟の出口へと向かって駆け出す。わずか数mの距離を一目散に駆け抜け、一息ついて振り返れば瓦礫が洞窟を埋め尽くす所が見えた。
(……流石に今回はヤバかったな。とにかく急がないと)

周囲を警戒しながら地下道を進むと、開けた一室へと辿り着いた。
かつては人の営みがあったのであろう形跡が各所に見られ、打ち捨てられ散乱した紙束を拾い上げれば、そこには、異界と呼ばれる世界についての研究が行われていたことが窺える内容が事細かに綴られていた。
「……さっきの施設の資料とも筆跡が違う。もともと研究してた人間が居たって事？　それに、こっちにはレイモンドの研究日誌も……」
(……あんなクソッタレな事しておいて『神』気取りか、イカレてる)
パラパラとその紙束をめくりながら、少女は一人上層階へと向かう階段を歩き進める。その途中、戦闘の跡らしき壁面の傷や煤汚れ、以前戦闘した人形と同系統らしき残骸などが視界に映り、少女の脳裏をわずかながら安堵の感情に染める。
時には足を止め、時には残骸を手に取り、やがて塔と思われる建造物の内部を粗方上った所で、見覚えのある後ろ姿を見つけることが出来た。
「お待たせ」
「無事だったんですね、よかった」
「そっちこそ。何か収穫は？」
僅か一刻にも満たない時間での再会にもかかわらず破顔してみせるブリジット。
無事を確認して同じように顔を綻ばせたノーティスの問い掛けに、

小さく肩を竦めてみせる。
「レイモンドの目的に繋がる様な情報については、特には。ただ、上に来るにつれて抵抗が激しくなってましたし、恐らく最上階にいるのは間違いなさそうです……ノーティスさんは？」
　最上階への道程を歩きながら、二人は互いが道中で得た情報の摺合せを進める。
「一応、アイツの書いた研究日誌を見つけた。読んで気分の良い物じゃないし、正確な目的を掴むには抽象的だけどね。……ただ、道中でキミが倒した連中を調べる時間があったから、アイツを追い詰める準備は出来た」
「そうなんですね。……ん？」
　少年の耳に残る違和感を余所に、少女は先へ先へと話を進める。そして、ぶつぶつと何事かを口にした後、彼女の手が淡い光を纏った。
　自身の身体を包み込む柔らかな光に、ブリジットは疑問の声を上げる。
「これは……？」
「アイツ等の防壁をぶち抜くための加護。解析に時間掛かったけど、これで法力も通るようになるはず」
　少女の言葉を受け、少年は軽くヨーヨーを振り回す。素振り一つで彼女の言う加護の効果を体感できる訳もなかったが、その軌跡に残る僅かな光が法力に依るものである事は、疑うべくも無かった。
「……やっぱり、凄いですね」
「最初は全然だったけどね。……色々あって、出来る事は全部やろうって思ったの」
「色々？」
　反射的にそう問いかけてすぐ、寂しそうな少女の笑みにその言葉の示すところを察し、少年は嫌な部分に触れた、と頭を下げる。触れたくなかったらそもそも答えないと苦笑いを浮かべる少女にそれでも、と謝罪の言葉を口にした。
「……ま、今するような話でもないか」
「今度は、ツキが落ちるって言わないんですね」

不幸になりたいならそう言いなよ。そう笑いながら、少女は辿り着いた広い部屋の端、フェンス側に設置された端末らしきものに手を触れる。
やがていくつかの操作を経て、金属の軋む音を伴いフロア全体がゆっくりと上へと動き始める。
「多分、このままエレベーターで最上部へ行けるはずです」
「……そうだね」
最上階へと上昇を始めたフロアの中心、追跡者の息の根を止めるために現れる刺客を危なげなく屠り、少女らは最後の扉に手を掛ける。

夕焼けに染まる空の下、風の塔と呼ばれる建造物の最上部。
彼女達の視線の先、茶色のロングコートを風に揺らしながら、その男はゆっくりと振り返った。

「……これはこれは」
金の長髪を揺らし振り向く長身痩躯の男。丸眼鏡のレンズ越しに見える目が、二人の姿を認めてすっと細められた。
「こんな辺境の島までようこそ。ブリジット君。そして――」
続く名前に、少女は言葉を失う。
「エリス＝マクドネル君」
「え……？」
「なん、で……」
顔面蒼白な少女を余所に、男はまるで雑談の続きでもするような気軽さで言葉を続ける。
「君の事はよく知っているよ。ＧＥＡＲ計画アメリカ合衆国の某医療研究所にて、ヴィンス＝マクドネルの監督指導の下、フレデリック＝バルサラ、アリア＝ヘイル、飛鳥＝Ｒ＝クロイツの三名を中心としたチームによって立ち上げられた生態系強化計画の通称。その根幹をなすＧＥＡＲ細胞は、元来医療目的の研究が進められていたが、軍部の暴走により接収、開発が進められた結果五感の鋭敏化、治癒力の強化による超回復、怪力などの特性を細胞適合者に与えるものとなっ

た。
の立ち上げにも関わった重要人物の子孫。……秩序の崩壊を引き起こした元凶、その生みの親の罪が孫や曾孫へと帰ってくるとは……因果な物だな」
「……ペラペラと良く回る舌ね。下らない雑談に興じてるほど暇じゃないんだけど」
　強く握りこまれた大剣、少女の足元で渦巻く風が、ヒリヒリと肌を焼く様な威圧感を発する。隣に立つブリジットの背筋を凍らせるほどの殺意をその身に向けられてなお、男は悠然とした態度を崩さずに笑ってのける。
「……ほう。だとしたら、どうするというのだね？」
「……決まってるでしょ」
「貴方を捕まえます」
「フフ……出来るかな？」
　強く言い切る少年など意に介さぬように男は笑う。怪訝な表情を浮かべた二人の視界の先に映ったのは、いつの間にやら大きく口を開けた転移法術だった。
「見たまえ……既に異界への扉は開きつつある」
　既に発動した転移法術に飲まれ、少しずつ、男の姿が高笑いと共に門の向こうへと消えてゆく。
「フフ……ハハハハ！　いよいよこれで私の研究も完成を迎える!!」
「逃がしません！」
「そう言うと思ってプレゼントを用意しておいたよ。受け取りたまえ！」
　追いかけようとした二人の間を引き裂くように、大きな物体が転がってくる。
　反射的に飛び退き、動きを止めた物体の方へと視線を向ければ、それは優に５ｍを越える体長の怪物であった。
　百足や甲殻類を思わせる外殻に守られた背中、側面から伸びる爪、明らかに異常な発達を見せる四本の腕。
　そのどれもとは不釣り合いな、獰猛な牙を持つ頭を二人の方へと

ゆっくりと向け、それは咆哮を上げた。
「ッ……悪趣味な玩具持ち出して喜んでんじゃないわよ!!」
『研究の成果を披露する時を楽しみにしていたまえ。……もっとも、それまで君が生きていればの話だがね』
高笑いを上げながら転移法術のエフェクトと共に消えていく男に毒づきながら、少女はその手に提げた大剣を構えた。
「……どうします?」
「残存法力から法術の復元は出来るから転移先は追える。なるべく手早く片付けよう」
言うが早いか、少女らは立て続けにその手の武器を怪物に向けて振るう。
伸びてくる腕を打ち払い、背後に回り込んだノーティスが背中の甲殻を大剣で引き裂く。真っ二つに割れた甲殻から肉色の触手が大量に伸び、少女を捕えようと迫りくる。
「ちッ!!」
「っ！　上です！」
伸びてくる触手から距離を取り、ブリジットの声を受けて視線を上げれば、大きな羽音を立てて複数の羽虫が彼女目掛けて飛来する。高速で落下してくるそれらを躱し、地面と激突した羽虫が上げる不快な音を無視して彼女は再び、巨体の背中へと向けて飛び掛かる。
「邪魔だ!!!」
蠢く触手を切り払い、露出した肉に大剣を突き立てる。
響く悲鳴に動揺する素振りも無く大剣に法力を込め、一瞬の後に怪物の体内を荒れ狂う風が引き裂く。しばらくのたうち回ったかと思うと、それはやがて全身から力を失い、倒れて動かなくなった。
「……ったく。急ごうブリジット」
「ええ……、また来ます！」
一息つく暇もなく、甲殻の色の違う個体が二体、立て続けに二人を釘付けにするように転がり来る。
構えをとるブリジットを背に、ノーティスは険しい表情のままレイモンドの消えた地点で手を翳していたが、やがて何かを引き裂くよう

に、その手を握り大きく振り払った。
「開いた！　追い掛けるよ!!」
「?!　は、はい！」
　大きく口を開けた転移法術の光に体を滑り込ませ、二人は異界と呼ばれる世界へと踏み込む。遅れて二人に喰らい付こうと、二体の怪物がその首を虚空に開いた穴から突き出してきた直後、少女はニタリとその口を歪めた。
「え」
　ぶつん、と鈍い音を伴い、虚空に開いた転移門がその口を閉じる。そして、光を失った二つの巨大な頭部が地面へと落ちた。
「……これ、は」
「遠く離れた場所を法力で繋ぐのが転移だからね。全身が門を抜けきらない内に転移を閉じるとこうなるって訳。……あまり時間掛けられなかったしね」
　それはそれとして、と険しい表情のまま振り返るノーティス。背筋を駆け巡る悪寒に眉根を顰め、周囲を見渡す。
　辺り一面に垂れ、張り巡らされた大きな鎖。足元の湿った感触。全身を襲う重圧と風に乗って鼻腔を刺す饐えた臭い。そのどれもが、この地に長居してはいけないと警鐘を鳴らす。
「……背筋がゾクゾクします」
「……これが異界（バックヤード）？　嫌な場所」
　周囲を警戒をしながら、二人は水浸しの道なき道を歩き進む。しばらくの道程の後、目的の人物の姿を遠くに見付けた。張り巡らされた鎖の先、こちらに背を向けている男の向こう。明らかに一般的な生物の範疇から外れた大きさの頭部らしき物体が、目覚めの時を待つように胎動していた。
「……久し振りね」
「フフ……また会えて嬉しいよ」
　殺気を孕んだ少女の声に気圧される様子も無く、男は小さな笑い声を上げ、その物体を見せびらかすようにその身を翻す。
「見たまえ、これこそ我が研究の要となる異界の王、イヌスだ」

「……」
「深き眠りについていながらも感じられるこの強大な力。素晴らしいと思わないかね？」
「……そうね。そのまま起きる事も無いだろうけど」
少女の皮肉めいた返事にも、男は悠然とした態度を崩そうとはしない。
くつくつと笑い、彼は大きく声を上げた。
「強く出たな。だが、残念だ……もう始まっているのだ」
「……なっ」
ドクン、と一つ大きな拍動が空間に響き渡る。
凍り付いた二人の表情に男が気付いた時には、既に手遅れだった。
「な、何?!」
ぐしゃりという音と共に、研究を誇っていた男はその研究の要に喰らい付かれ。耳を抉るような咀嚼音と、水音に紛れて消える悲鳴を残し、彼がイヌスと呼んだ存在の口内へと飲まれて消えていった。
「……最悪」
「……嫌なもの、見ちゃいましたね」
青褪めた表情の二人が帰還を考えた直後、ぞくりと不快感が全身の表面を走り抜けた。
――我の……眠り、妨げるもの
腹の底から響く様な声が、二人の鼓膜を揺らす。
声の主が誰かなど、考える必要はない。
「……そのまま寝てれば良かったのに」
――我が贄と……なるがよい……!!
正面に鎮座する頭が、その向こうに見える巨体が、鎖に縛り付けられたまま、大きな咆哮を上げたのだから。